会津士魂

十一

北越戦争

早乙女貢

集英社文庫

早乙女 貢
一九二六年、中国ハルビン生。戦後、山本周五郎の知遇を得、作家となる。六八年「僑人の檻」で直木賞受賞。八九年、独自の歴史観が結実した大河小説「会津士魂」で吉川英治文学賞を受賞。「血槍三代」等著書多数。

カバー・早乙女　貢
A　D・岡　邦彦

会津士魂 十一 北越戦争

早乙女 貢

集英社文庫

さ 5 25
会津士魂 十一
早乙女 貢
集英社文庫
629

9784087488265
1920193006292
ISBN4-08-748826-8
C0193 ¥629E

定価 本体629円＋税

解説
高橋千劒破

巻末エッセイ
菅原文太

北越の要衝長岡城が、西軍に攻略された。それは長岡藩総督河井継之助にとって、最大の恥辱であり、家名を汚すものであった。継之助は城奪還を目指し、用意周到な奪回作戦を練り上げた。七月二十四日、長岡軍の決死の夜襲が成功して長岡は一時、西軍から解放される。しかし、それも束の間、西軍の反攻が始まり継之助に不運にも流れ弾があたる。

早乙女 貢の大河歴史小説
会津士魂 全十三巻

一	会津藩 京へ
二	京都騒乱
三	鳥羽伏見の戦い
四	慶喜脱出
五	江戸開城
六	炎の彰義隊
七	会津を救え
八	風雲北へ
九	二本松少年隊
十	越後の戦火
十一	北越戦争
十二	白虎隊の悲歌
十三	鶴ヶ城落つ

全巻完結発売中

さ-5-25

集英社文庫

会津士魂 十一

北越戦争

早乙女 貢

集英社

会津士魂 十一 早乙女貢

集英社文庫

集英社文庫

会津士魂 十一

北越戦争

早乙女貢

集英社版

本書は、一九八六年十二月、新人物往来社より刊行されました。

会津士魂 十一

目次

死闘八丁沖 9
泥中の血戦 22
八丁沖再び 35
長岡城奪還 51
長岡城恢復成る 65
継之助負傷 78
城、再び陥つ 91
西軍急襲 105
会津への道 119
八十里越 133
継之助の死 146
白虎隊出陣 159
赤谷の戦い 173
若松城下 191
農兵隊結成 205
決戦迫る 218
白虎士中二番隊 231
われは王臣なり 257
母成峠 270
解説　高橋千劒破 284
巻末エッセイ　菅原文太 289
年表 292

会津士魂 十一

北越戦争

◆主要登場人物

山県狂介（やまがたきょうすけ）　後の有朋。長州藩士。奇兵隊隊長で西軍北陸道鎮撫総督府参謀。

河井継之助（かわいつぐのすけ）　長岡藩家老・総督。卓越した才能の持ち主。

佐川官兵衛（さがわかんべえ）　会津藩士。北越の戦功で朱雀四番士中隊頭から軍事奉行頭取に昇進。

西園寺公望（さいおんじきんもち）　総督府参謀。山陰道の鎮撫総督から会津征討越後口総督府大参謀に。

鮎川兵馬（あゆかわひょうま）　会津藩士。小隊頭仮役として兵を統率。

雪乃（ゆきの）　兵馬の妹。

松蔵（まつぞう）　河井継之助の誠実な従僕。

豊（とよ）　兵馬の僚友で北原半介の妹。

中野妹姉（なかのしまい）　姉は竹子、妹は優子。会津藩士中野平内の娘で、江戸育ち。

土方歳三（ひじかたとしぞう）　新選組副長。尊攘・討幕派弾圧に活躍し、戊辰戦争を転戦。

安達藤三郎（あだちとうざぶろう）　白虎隊士の中の年長者で十七歳。

河野広中（こうのひろなか）　三春藩郷士。王臣となるべく進攻した西軍に帰順。

西郷吉之助（さいごうきちのすけ）　後の隆盛。薩摩藩士。討幕派の指導者として戊辰戦争などで活躍。

死闘八丁沖

一

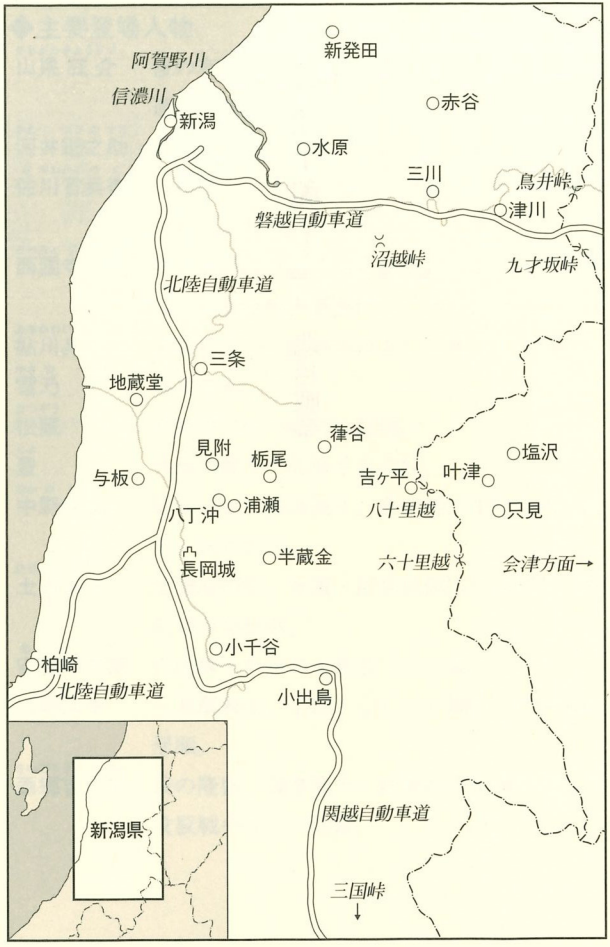
慶応四年（一八六八）六月十四日の越後長岡郊外、大黒新田における激闘は、雨中だけに双方とも相手の損害の程度を明確に把握出来なかった。長岡藩では隊長らの死傷が出て敗北感があったが、西軍のほうでも、おそらく百余りの死傷者を出して、内部では責任のなすり合いになったことが、山県狂介（有朋）の〈越の山風〉でわかる。

山県は直接この戦さには出ていない。この日は川袋に行っていた。川袋は信濃川の西岸で、与板の手前、川が大きく西へ彎曲したあたりである。東軍が与板を襲って西方から長岡へ迫るのを防ぐためにこの方面へ来ていた。与板から南方の関原に至る黒川流域は長岡を守るために確保しておかねばならない要地であった。

夜に入って関原へ帰営した山県は、長岡から報告のために来た福原和勝から戦況を聞いた。福原はまだ昂奮がおさまらないように、時々、詰って唾を飛ばした。

「今朝、大黒、筒場方面にやつらが押し寄せて参り激しい戦いになったが、就中、筒場で

◆本巻関係地図



はすんでのことに全滅の危うきに至りました。それというのも、高田の兵が怯懦だったためでござる。かれらがわれらと等しく闘ってくれれば充分に応戦出来たものを、卑怯にも浮足立ったために、総崩れとなってしもうた。この惨状を招いたのは、すべて高田兵が張本人じゃ」

福原は拳をぶるぶる顫わせて、傍らに高田兵がいれば、摑みかからんばかりだった。

「もっと詳しく知りたい」

と、山県は言った。

高田兵が当初から渋々参戦したことは感じている。したがって、あまり期待はしていなかったのだが、その怯懦ゆえに全軍に影響を与えたとなると等閑に付されなかった。

「高田兵の半隊は大黒の東側を守っていた。ところが東軍が吶喊してくるのを見るや、ひと支えもなく、持場を離れて逃げだしたのじゃ、そのため筒場の防禦が困難になった。われらが半ばを割いて応援にやったために、こちらも苦戦になってしもうた」

福原が縷々語ったところでは、とばっちりを喰った薩兵の死傷者が多く、隊長、半隊長ともに戦死したほどであり、長州の八番隊の救援がなかったら、全滅どころか、その勢いをかって、東軍に長岡侵入を許すことになったかもしれない、というのである。

「高田兵のこの怯懦には、本陣でみんなが激怒している。わしが恐れるのは、そのことじゃ。なんとかせぬことには、おさまりがつかぬ。このままにすれば、隊規が乱れ、戦線の統制など無に等しいことになる。山県さんの英断を仰ぎたい」

と言った。

山県は考えた。

高田兵が当初から東軍に敵対する意志がなかったことは明瞭である。そのことは尾張や彦根なども同様だ。かれらがいやいやながら出兵していることは知っている。

薩長の勢力と、錦旗に抗い難く、出兵要請に応じているのだ。ただ、人間の闘争心は、理由の如何に拘わらず、対峙すれば闘志が湧く。しかし、それも限度がある。

今回のように東軍が必死になって攻撃してくれば、浮足立って遁走してしまうことになる。

(処刑しなければならぬ)

と、山県は考えた。

(一罰百戒にもなる)

たんに高田兵のみのことではない。情勢が不利になれば、他の藩兵にも波及することは火を見るよりも瞭らかなことだ。

思いのほか東軍が手強いことも、山県には看過出来ないことであった。この場合の懲罰は、むしろ必然であった。

いやいやながらの出兵は、いずれは、こうした結果があらわれるであろうことを懸念していたのである。

先ごろから、山県の脳裡を占めていたのは薩摩との確執だった。薩摩の方では長州の優位をなんとかして制御したいと思っているはずだ。両者の反目が他へ洩れることをかれはおそ

れていた。

動員された、他の藩兵にとっては、薩長の確執による指揮系統の乱れは、口実をもうけて、戦争放棄する絶好の機会なのである。

そのことに頭を悩ましていた山県にとって高田兵の戦線逃亡の事件は、当初、面倒な感じを抱かせたが、かえって、この禍を福に転ずることに考えをあらためた。こうした柔軟さと決断力が山県の特質であった。

かれは幹部と相談のうえ、高田兵とその隊長の処分を決めた。高田兵半隊の司令は前田門之丞である。翌日、本営に呼びつけて、こう申し渡している。

前田門之丞

右六月十四日暁、長岡口川辺、十二潟、筒場等へ賊兵襲来の砌、左右の台場に不拘、大黒の持場を引退散乱せしめ、臆病の所業、総軍の士気に関係する而已ならず、薩藩等の死傷等も畢竟、右不始末之致す所、此旨高田表へ申達し何分之御処置有之候迄、先慎申渡候事。

北陸道鎮撫総督府参謀の資格といっても、直接的に処分出来ない。高田藩へことの次第を申し送って、処分させる、という形をとっている。

これは形式上、その必要があってのことだが、全軍への影響力の基になるものだった。

同時に、これを諸藩に送って公表しているのである。布告は次の通りである。

別紙之通申渡候条、御承知可被成候、益士気を奮励し、持場をかため必死戦守、覆轍を不踏様、可有御心得候、以上。

この布告が全軍に与えた衝撃は尠からぬものがあった。

武士にとって、これは恥辱以外の何ものでもない。武士が武士であることは、生命以上に考えられた時代である。

敵の攻撃が烈しかったから退却したでは通らない。西洋の騎士道との違いがここにある。

この報告を受けた高田藩では驚愕した。ひとり前田門之丞とその半隊士の問題ではない。高田藩そのものが恥を晒したことになる。

数日後、高田藩からの処分の通知を受けた山県は、あらためて、全軍に布告している。処分決定をわざわざ知らせたのは、北陸道鎮撫総督府参謀としての威令の効果を再認識させるものであった。

過る十四日、大黒台場戦争之砌、不始末之所業に付、厳罰可申付候処、同藩中歎願之趣も有之、此度之儀は格別寛大の処置を以、指揮役被差除、卒伍に貶斥し他日之功績相試可申段申渡候事。

降格で一兵卒にするから、名誉挽回のために忠勤しろ、というのである。この処分は山県を大いに我意を得たり、という気分にした。かれが、付記しているところによると、前田門之丞は、〝何れかの合戦に於て討死にを遂げたるやに記憶し居れり〟という。こういう男は、どこかで討死にしてくれないと、しめしがつかないのである。

二

山県が高田藩兵の指揮者の厳重な処分を通達したのは、全軍の士気の昂揚もさりながら、この日、総督府参謀西園寺公望と先鋒副総督四条隆平が柏崎に着到している。戦地実見かたがた軍隊慰労のために、出馬して来たのである。

二人とも犬公卿さんで薩長に担がれているだけだから、実戦には何の力もない。が、薩長色をうすめて、官軍たることを内外に誇示するためには、きらびやかに飾り立てた公卿の総督が姿を見せた方がいい。そう思って、山県が前線への出馬を要請していたのである。

前田はついていなかった。この日の失態が運命を決定してしまったのだ。

この日、退却したのは高田兵だけではない。栃窪での交戦では、濃霧の中から突然あらわれた東軍に狼狽して、大垣兵なども塁を捨てて山麓桂沢に走っている。

これなどは、福原が直接山県に言いつけなかったから、処分を免れているのだ。

もっとも、大垣には知恵者がいて、早晩、このことが山県の耳に入る以上、糊塗するに如かずとして、翌日早々に、巧弁の者を派遣して、こう報告せしめた。

「昨暁、賊兵雨霧咫尺を弁ぜざるに乗じて、本道ならびに山手方面より来襲いたしました。われらはこれを邀え撃ちましたるが、何しろ濃霧と雨とで如何ともならず、味方の死傷が多く、遂に支うることが出来ずに、敵のために山上の砲台を奪われた次第でござる。まことにもって慙愧の次第、残念千万のみならず、一旦此の口の破るるに於ては、諸口みな保ち難きを以って、是非とも援兵をお願いしたくて参上いたしました」

こう先に言ってしまえば、高田兵のように怯懦の烙印を捺されないで済む。

山県が頷くのを見て、使者はほっとしながら、用意してきた言葉をつづけた。

「援兵と申しても、それぞれに余裕はござるまい。さりながら、わが大垣藩の隊が川袋に居ります。かの者共を桂沢に派遣せらるるなれば、大垣兵の全力を以って昨日の持場を恢復することが出来ると存ずるゆえ、是非とも、願いをお聞き届け頂きたい」

山県は了承した。ただちに、川袋の大垣兵を桂沢に転じせしめることにして、岩村精一郎を川袋に出張させた。

岩村は川袋の守備の状況を調べて、兵を動かしても当座は心配ないと判断した。

この大垣兵らは陣地奪回に死力を尽くしたので、十五日の三時ごろには、漸く東軍を逐って陣地に戻ることが出来た。

しかし川袋ではやはりこころもとなくなったので、与板から守備兵をもとめている。戦線が広がったために守備兵の配分が難しくなっていた。

この十五日には、桂沢と福井の戦いが、熾烈だった。会津朱雀四番士中隊は福井村の西軍胸壁の奪取をこころみて昼夜に及び砲戦をつづけたが、抜くまでに至っていない。

西園寺、四条の両公卿は十六日に柏崎から関原に来て、翌日、怪我人の養生所を視察して、重軽傷者を慰問した。

当時、まだ野戦病院とか兵站病院なる用語はなかったらしい。もっとも、養生所というのも仮の設営で、関原の民家をあてていたようである。

翌日、両卿から慰労の書がそれぞれ諸藩の代表へ下賜されている。大体文面は同じようなものだが、松代藩のみには〝別而粉骨〟の四文字だけ多かったという。

松代藩兵だけが、特別に粉骨砕身奮闘した様子は、山県らの口から上申されたからだ。

この点を、山県はその回顧談の中で〝固より余等の進出に出でたるなり〟と恩に被せている。

翌十八日、西郷吉之助（隆盛）が長岡にやって来ている。この方面のことは黒田了介（清隆）に任せてあったが、黒田が急病で淵辺直右衛門がその役目を代行している状態と聞いていたし、大黒方面での薩摩兵の死傷激増を憂慮してやった来たのだ。

ところが黒田は二、三日前から漸く歩行出来るようになり、小千谷より関原に寄り、ついで長岡に来ていた。

もっとも、西郷の長岡滞在は一日きりで、翌日には柏崎に帰っている。山県は西郷を送ってのち与板に立ち寄ったが、この朝、筑前の蒸汽船大鵬丸が、長州の奇兵隊二小隊を乗せて柏崎へ入港していた。このときの隊長は片野十郎と三浦梧楼らである。

山県はこの報告を聞いて欣喜した。

「いよいよ北越から、やつらを追っ払う日が来る」

大鵬丸はすぐに萩へ帰港し、さらに援兵を積んでくることになっている。筑後柳河藩の璟

瀛丸もまた薩兵を乗せて東岩瀬から到着するや、折り返し萩へ回航して援兵を迎えに行くというのだ。山県はこれで苦戦を攻勢に転じることが出来ると思った。

かれは福田俠平を長岡に派して黒田了介らと協議させたが、進攻策についての論議は意外にも進展しなかった。

東軍の逆襲が思ったよりも強力で、西軍の損傷が多かったのが、かれらを消極的にしていたらしい。

こうした間に、京では北越戦線がはかばかしくないのに業を煮やして、あらたに越後口総督に仁和寺宮嘉彰親王が任じられた。副総督に四条隆平、西園寺公望と壬生基修が参謀、戸倉修理亮、荒尾駿河、松平源太郎の三人が軍監。壬生卿はかつて三条実美らと京を逐われた、例の七卿落ちの一人だ。復讐の秋来れりとばかり、その任に就いたことであろう。

このため兵隊もあらたに動員された。長州より千人、薩摩より三百人、肥前、上総より五百人、越前より千人、因幡より百人余、備前より百人余、加えて御親兵の内二、三百人、長州の支藩吉川家より三百人、土佐より二百人という人数がおっつけ運ばれてくるということで山県は暗夜に燭光を見た思いであった。

三

東軍の方でも、こうした情報は入手したに違いなかった。その援兵が着到する前に長岡城

を恢復しなければ、一層困難になる。

河井継之助は六月二十二日に攻撃をかけることにして、その進路を八丁沖にとり、時刻は暁闇に決めた。八丁沖は猿橋川が流れて左右に葦の茂る沼沢地である。ところどころに田圃があるが、ちょっと増水すると、すぐに海になってしまう低湿地で、ここを渉って攻めてくるとは想像つかない。

ことにこの年の大雨と増水は、この八丁沖を文字通り渚から八丁の沖までの湖水にしてしまっている。

本営でも、無謀だとの声も出たが、少しの可能性でもある以上は、これを敢行しなければならなかった。

誰の目にも無謀だと見えることが、敵にとっての隙になる。河井らは決行に際し、部署を決めた。

暗夜の総攻撃は、持場を判然としておかないと、同士討ちの危険を孕んでいたのである。

一、福島本営を焼き払い、夫より池田隊、佐川半隊（会津）は稲葉村に放火、右を囲む。
一、篠原、千本木両隊は、荒屋、色貝に放火、浦瀬の敵を囲む。
一、米沢二小隊、大川隊は、一軒家を焼き、大黒を横撃す。
一、使番鵜殿、三浦、伊東、片山、安原、軍事掛花輪求馬。
一、大黒口福井寺裏よりは軍事方三間市之進、稲垣隊、小島隊、付属佐川半隊、米沢一小隊、鈴木精四郎隊（米沢）。

一、援兵森隊大砲一門。
一、福井本道は二見隊、本富隊、米沢隊大砲一門。

東軍諸隊が四ツ屋の仮本営を出立したのが九ツ（午前0時）であった。嚮導は須藤岩之助、武井三四郎らである。軍事掛花輪求馬は池田隊を先鋒に、大川、篠原、千本木の三隊ならびに米藩の二小隊をひきいて勇躍して闇の八丁沖に進んでいった。

夜雨蕭条として、東軍を濡らした。かれらは間道の沼道を辿ったが、ゆくほどに八丁沖の湿地帯はくるぶしを埋め、脛を浸し膝にまで及んだ。

夜襲のためには龕灯も油提灯も使えないのだ。殆ど手さぐりだった。方向がいつの間にか外れているのではないかという不安が誰の胸にもあった。

歩行困難の上に大砲を曳き、弾薬を運搬するのだ。将士ともに泥まみれになって進んだが、ともかく福島のはずれに至った。

細雨の中に焚火が見えたので、数人が息をひそめて、近づいた。すると、敵の先鋒ではなく、村人らしい者が四人で火を囲んでいるのだった。

「捕えろ」

隊長の命令で、ぱっと飛び出すと、村人らはあわてて逃げだそうとした。

「待て、逃げると撃つぞ」

大喝して、竦んだところを引き据えた。

「静かにしていろ、声をあげれば斬る」

村人足らは恐怖で色を失い、ふるえている。

「様子を聞くだけだ、正直に答えれば放してやる。西軍の配置はどうなっている」

この方面は富山藩が守っていることはすでにさぐってある。が、仔細に聞くと、本営は村の庄屋の家があてられているという。家の前に高張（提灯）が二つ出ているということだった。

「よし、富山の本営に斬り込もう」

武井三四郎は、隊長の池田彦三郎に報告して、ただちに、大川隊に協力を要請した。

すなわち池田隊が庄屋を包囲し、大川隊が鉄砲を撃ち込む。この作戦で奇襲したのである。

陣中日記には、このときの本営の狼狽ぶりが詳細に描写してある。

——家人寝静まり居る家の四方へ池田、大川隊廻り、一時に放発す。敵並に家内の者大狼狽、雨戸を蹴はづして逃げ候。裸体にて逃る四、五人、池田隊の為め出口にて三人重り死す、其外死人怪我人多く、田の中へ逃隠るる者数不知、直接六小隊四方に分れ、農家に放火す、数家一時に焼上る、一生一代の声を出し、殆んど天地を動揺す。

須藤岩之助は、諸隊がそれぞれの口へ分散して交戦をはじめたのを見ると、人数が少ないことが気にかかった。すぐにも逆襲されそうに思えたので、急いで引きかえして、四ツ屋の河井継之助に後陣の出兵を乞うている。

だがこのとき、河井はなぜか、

「援兵などいるまい」

と、笑いとばしたという。

「しかし、あの様子では」

「ははは、おみしゃんは苦労性だのう、大丈夫、勝利うたがいなしじゃ」

と笑ってごろりと横になった。

河井がなぜ、こう安直に推断したのかわからない。この態度も、のちのち批判の集まるところとなったのである。

陣中日記には簡潔に、

——河井君に援兵を請ふ、不被用、大丈夫勝利の由にて四ツ屋に安臥す。

となっている。

たしかに当初は大丈夫だった。池田隊は長岡近辺へ繰り込んで敵を追っ払った。七ツ半（午前五時）ごろ一軒家に放火して進んだ。米沢の二小隊、大川隊が大黒の水門へ打ちかかると、敵はろくに戦わずに大砲を捨てて大黒村へ走りこんだ。百束からも森隊が撒兵太鼓を鳴らして水門口へ繰り込んでくる。

富山藩本営には弾薬が四十箱もあった。が、これは二、三日前国元から運送して来たばかりだという。ほかに大小あるいは小銃、毛布、衣服等の品々があり、これを分捕って、近傍の寺を本陣にとり、分捕り品は、本堂に積み上げた。だが、勝利感はここまでだったのである。明け方になって薩長の大軍が猛然と反攻して来たのだ。

泥中の血戦

一

八丁沖の死闘は前後二度に及んでいる。豪雨と泥濘と暗闇の中であった。六月二十二日といえば、晴天でも月の出が遅い。暗闇の中だけに、攻めるほうも守るほうも手さぐりで、文字通り、暗中模索であった。何よりも泥まみれになっての戦いは、一度ものを取り落とせば、捜すことも出来なかったし、鉄砲も泥にまみれて役に立たなくなった。雨の降る間は、ライフルなら使えるが、泥まみれになっては弾の装塡も出来ない。

会津藩士でこの夜襲に奮闘したのは、朱雀四番士中隊小隊頭の木村理右衛門をはじめ、嚮導の円城寺岩五郎、甲士の上島権八郎、榎本栄之助、三原酉五郎、篠田幸三郎らである。

夜襲が一応成功したことは、前に述べた通りだが、河井継之助の判断の誤りから、逆襲をもろに喰うことになった。

四ツ屋を仮本陣としていたから、継之助が自ら出陣するなり、応援の手配りをしていたら、逆襲も未然に防げたかもしれなかったのだ。富山藩は夥しい武器弾薬を遺棄して敗走したが、

高田兵と同じく必ずしも怯懦の故ばかりではない。それだけ東軍の夜襲が急激で的確だったということだが、家老や隊長などが討死にするほど闘っている。

急を聞いた薩長の兵が城岡土手を走って来たし、福井、大黒、福島の敗走した西軍が、ふたたびとってかえした。

奇襲に一時は敗れたが、所詮、東軍の人数は少ない。勝利で気が弛んだところを逆襲しろという指令が飛んだのだろう。

もしも継之助が勝利に酔うことなく、慎重に固めの態勢をとっていたら、この反撃にも対処出来たに違いない。この夜の継之助はどうかしていた。八丁沖は泥濘に埋まり迅速な行動がとれなかったのだから、城岡土手を防いでさえいれば、薩長の大軍も救援に来ることが出来なかったはずである。

地勢をよく知りながらの、この放置が思わぬ結果を招いた。

凄まじい反攻だった。陣中日記には〝田の中、土手、雲霞の如し〟とある。

長岡藩池田彦四郎の隊は防ぎかねて、じりじりと退るしかなかった。

そこへさらに浦瀬からも街道を二小隊ばかりが千本木と篠原の両隊に打ちかかったのだ。

両隊も支えきれずに退きはじめ、東軍は俄然、旗色が悪くなった。ために人足たちは逃げ腰になって、せっかくの分捕り品の弾薬など、残らず川中へ投げ捨ててしまった。

どうせ持ち帰ることが出来なければ、相手に奪い還されるよりは、使えなくしてしまえというのである。

六時から八時にかけて、東軍の敗色は明らかになっていた。大川隊は苦戦し、退却するしかなくなり、米沢藩の鈴木精四郎は寺押ということになっていたので、大黒へ進撃したのに、味方が泥まみれになって寺押はかなわずと、軍事方の判断から、引揚げを命じられた。

精四郎は怒った。士気の昂揚したときに、引揚げとは何ごとだと、四ツ屋の仮本陣に行き河井継之助に談判したが、このときも、継之助は耳をかさず、

「おんしらは寺裏を守っちょりゃいい」

と、言い放った。

精四郎らは遺憾に思ったが、総督の命令だから仕方がなかったのだ。

八時過ぎになると、西軍の勢いはいよいよ増して、味方は水門付近で防戦したが、遂に支えきれずに長岡勢は福井へ退却した。大川隊で数日苦戦を強いられながら果敢に先鋒をつとめていた三間鉄之助が水門で討死にしている。

この日の戦いは、実に九時間の長きに及んでいる。

大黒、福井方面と呼応して森上村の東軍は半蔵金方面の西軍へも攻撃をかけている。時刻はほとんど同じであった。東軍の三分の一の兵が向かった。

仙台兵と衝鋒隊は右側の山地より、左側の山地よりは米沢兵が向かい、会津藩の第二遊撃隊は街道の正面から進撃したのである。

米沢藩には上杉謙信以来の伝統的な鉄砲隊がある。種子島以来の和銃隊である。使用する三十匁の鉛玉の重さから、三十匁和銃隊という名称がある。

この鉄砲隊が敵の一の胸壁に接近して一斉射撃を浴びせかけた。

会津藩第二遊撃隊は、大砲一門を曳いて進んだが、山地とはいえ赤土が泥濘んで車輪にくいこみ、思うように進撃できなかった。

三分の一という兵員の少なさが、敵の反攻を招くことになったようである。

大砲の弾丸は、ろくに狙いを定めぬままに敵地へ向かって叩きつけられたが、目標を遠く隔たることとなり、畏怖させる効果もなく、敵の集中攻撃を浴びることになった。

隊長の桃沢彦次郎が傷を負ったのは、このときである。

「駄目だ、全員、退け、退け」

作戦が失敗と知って、桃沢は退却を命じたが、その退却さえ、もう難しくなっていた。

西軍の尾撃が激しかったからである。仙台兵が崩れ立って退くのを見たが、第二遊撃隊は側面からも銃撃を受けて立ち往生することになった。

半分だけ、そちらに向かって、樹間より銃撃で応じた。

こうして戦うこと数時間、午の下刻（午後一時ごろ）になっても、勝敗は決しなかったが、進むことなど思いもよらない。敵も疲れ気味になったらしい僅かの間隙に、兵を退かせた。

すなわち、衝鋒隊は一ノ貝の東半里（約二キロ）ばかりのところ田之口に退き、第二遊撃隊は荷頃に退いて、負傷兵の手当てをすることになった。

このとき、仙台兵と米沢兵は、栃尾まで戻っている。

八丁沖の進撃は、半蔵金とともに失敗に終わったのだ。

翌二十三日、佐川官兵衛の率いる朱雀四番士中隊は僅かに福井村の胸壁に拠って砲戦で示威するにとどまり、二十五日には、晴れ間を縫って、会津藩砲兵隊が、百束に台座を据えて哨兵砲戦をしたくらいであった。

河井継之助はこの数日、失敗を認めて、各藩の独自の行動に任せている。

各藩の間から、囂々たる非難の声が湧き起こったからだ。

勝っている間は、少々の間違いにも、寛大になるが、敗戦となれば、指揮者に責めが帰されるのはしかたがない。

継之助は沈黙した。

（文句をつけるのなら、おみしゃんら、勝手にやれ）

というのである。

むろん長岡の将士は、長岡城奪回の悲願がある。

暫く時を稼ぐしかなかった。

二

夜襲の失敗は、夜襲そのものに要因があったわけではない。敵陣を混乱させ、敵塁を奪ったあとの固めの兵が少なかったことだ。この後備えさえ、用意しておけば、そこが長岡進攻の橋頭堡になったはずだった。

長岡城奪回は何としてもやらねばならなかった。河井継之助の立場はいうまでもないが、会津藩にしても、徒らに継之助を責めてもしかたがないのだ。

長岡城の奪回は、会津藩自身のためであった。

長岡城が同盟藩のものであるかぎり、薩長の西軍はここで足止めされるのである。

六月二十七日になって、転陣の命令があり、会津軍は移動を開始した。

朱雀四番士中隊、砲兵隊、青龍三番士中隊が見附を発したのが申の下刻、すなわち午後五時であった。

夜間の行動は、いうまでもなく、敵の斥候や諜者の眼を晦ますためであった。全軍、物音をころして三条に至ったのが、亥の刻だというから、五時間ほどのちである。

この朱雀四番士中隊、中隊頭の佐川官兵衛のもとに、前日、会津から上意が届いていた。

北越における戦功を賞して、若年寄格に昇らせ、軍事奉行頭取と為す、というのである。

会津若松の肥後守容保以下家老たちとしては、現地の佐川官兵衛を昇進させることで、かれ自身と、会津兵の士気を高める効果を期待してのことであろう。

三条に一泊したかれらは、翌二十八日、日暮れに出発して、地蔵堂に到着した。

地蔵堂というのは地名である。その日と次の日、かれらは滞陣している。

会津藩が独自の行動を起こしたように、米沢藩も、進攻の戦略を案じた。

七月二日、福井、百束に布陣する米沢兵は大黒の敵陣を襲撃する計画をたてて、応援を河井総督にもとめた。米沢兵だけでは不足だったからである。

継之助はその壮をたたえて、ただちに池田隊と本富隊に協力を頼んだ。

ところが、池田彦四郎も本富寛之丞も難色を示したのである。

「総督の命令とあれば、背く気はないが、しかし、大黒の敵塁は堅固にして、われらが加勢するとしても、とても攻略出来るものではありませぬ。いわばこの計画は無謀だ、強って敢行すれば、徒らに兵を損じるのみで、一分の利もありますまい」

真意は、米沢藩に主導権をとられての行動が気が進まなかったに違いない。

継之助はこれを説得している。

「おみしゃんらのいうところはわかる。たしかにそうだ、むやみと攻めても、あの塁は抜けるものではない。おれもはじめはかれらにそのことを忠告した。が、返事はこうだ。もしも長岡藩の力を借りることが出来なければ、独力でもこれに当たる、とな」

継之助は歎息していった。

「米沢の士が、そこまで決意している以上、もはや抑えもならぬ。自らの力を量らずして漫りに敵の兵力を軽視するの愚をおかし、むざむざ死地に陥ることであろう。左様なことがあっては、我が藩は何の面目あってか同盟の諸藩に対することが出来よう。無理を承知で、総督がこう頼んでいるのだ、わかってくれ」

こう説かれては、両隊長も否とはいえなかった。

継之助一流の相手の心情に訴える説得法である。

「左様な次第なれば、仰せの如く、米沢藩に協力しましょう。しかし、作戦は相談の上にして頂きたい。それさえお聞き届け頂ければ」

継之助は応諾して、そのことを米沢藩隊長に伝えた。

共同作戦となれば、お互いに齟齬するところがあれば成功はおぼつかない。

かれらが相談して立てた戦略は、米沢兵が、迂回して敵塁の背後を衝き、長岡勢は砲声を合図に前面より攻撃する、というものである。

これは長岡勢の方が危険だった。敢えてその役割を引き受けたのも、これが突破口になれば、という継之助の希みもこめられていたからだ。

この作戦は、計画としては申し分なかった。が、惜しむらくは、時間がかかりすぎた。

米沢兵が迂回するのに手間どり、その合図が発せられたのは、六ツ（午前六時）過ぎだった。

暁闇は猛雨に助けられて、暗かったが、時刻はすでに夜明けだったのである。米沢藩の六小隊は、雨と闇の中を潜行して、敵塁の右斜め後方から、ふいに小銃を連発して、次いで刀槍をふるって、塁中に突入し、これを合図に長岡の池田、本富の両隊も、深泥の水田を進んで正面から一斉に起って吶喊した。

西軍は狼狽した。だが、夜襲というには遅すぎた。すでに夜は明けていたのである。

西軍は壁に拠って塁を堅く守り、新式のライフル銃で猛烈に撃ってきた。

しかし、挟み打ちの効果は尠からず、西軍のうち富山と高田の兵が退却した。

長岡勢は一塁を奪って、さらに進んで第二塁に進攻したが、しかし、そのときはすでに後

方にあった薩長兵が、連袂し突撃して来たのである。

雨が小やみになり、空は灰色に明けてきている。相互の人数もはっきりしてきた。

東軍の諸隊は、深泥の間を潜行したために、全身悉く泥土にまみれていて、進退射撃、倶に思うようにならなかったが、いずれも決死の気持で、畦畔に拠って戦った。

この乱戦は夜明けとともに、答えが出た。まず米沢隊が敗れ、隊長まで斬死している。

三

米沢藩の隊長某の働きは目ざましかった。抜刀で敵陣に躍り込み、手当たりしだいに縦横に斬りまくって、六人を仆した。

だが、たちまち包囲されて、左腕を切り落とされたのにひるまずに、さらに一人を斬り伏せている。が、その右腕も数人が群がり寄って背後からの一刀で、肩の付け根の近くから切り放された。

両腕を失い、凄まじい血を左右にふり撒いて、隊長はぶっ倒れた。

米沢兵の死傷六十人を数えるという悲惨なことになった。

西軍は勢いを得て、さらに猛射してきた。文字通り、雨あられの飛弾だった。

米沢兵が退却すると、長岡兵ももう踏みとどまれなかった。死者を捨てて、負傷兵を庇って敗走にうつった。

悲惨なのは米沢兵ばかりではない。

本富隊の隊長本富寛之丞は、引揚げの命令を下したが、誰も返事をする者がないので見まわすと、鉄砲隊士は、悉く銃を把んだまま絶命していた。

それも、一人として、敵に背を見せた者はなく、敵に向かった姿勢で死んでいたのである。

河井継之助の言葉が如何に長岡兵を発奮せしめたかわかる。

継之助は慎重な上に慎重だった。七月三日、軍事掛の花輪求馬を従えて見附に赴いた継之助は、長岡城恢復の策を決行するために長岡勢を栃尾に引揚げさせた。百束、福井、押切、四ツ屋等の守備を米沢兵に委ねた上である。

だが、西軍に洩れるのを憚って、道を漆山通りから名木野、太田村通りにとらしめた。

栃尾には、仮本営を置いた。長岡城奪回作戦の本部である。

この日、栃尾を確保するため、会津藩朱雀四番足軽隊（隊長横山主税）、米沢、仙台、村松の各藩兵は見附から応援にやって来た。

このとき、寄った全軍一千七百余人である。

あらためて持場を定めることにした。

荷佐村口数ヶ所　第二遊撃隊、仙米両隊、長岡藩
土ヶ谷口　米沢藩、長岡藩士
小　塁　村　朱雀四番足軽隊
来伝口泉村　衝鋒隊、村松藩

与板方面の東軍の陣容は、左のごとくになっていた。

朱雀四番士中隊、砲兵隊、青龍三番士中隊、水戸兵は、与板の北方の大山に胸壁を築いてこれに拠った。高越村、岩方村、塩ノ入村を経て、山上に登ったのだが、高みから大砲で狙撃すれば、かなりの遠距離まで着弾できるのだ。

一の胸壁には、会津藩砲兵隊が三十人ばかりで一門の大砲を据えた。

二、三、四の胸壁には、やはり会津の青龍三番士中隊及び付属隊砲一門。こちらは百六十人ばかりを分散させた。

また、五、六の胸壁には上山兵八十人ばかりがこれに拠った。

信濃川堤防の三ヶ所の胸壁には、水戸の筧隊が八十人ばかりで守り、堤防以西は水戸の市川隊が百二十人ばかりで守備に当たった。

陣ヶ嶺前方は桑名藩の地神隊が六十人ばかり。陣ヶ嶺以西は水戸の朝比奈隊が百人ばかり。小島谷村方面日野浦近傍には、衝鋒隊、遊撃隊、小雲雀村には朱雀二番寄合組隊（西郷頼母隊長）が配され、寺泊、山田辺には松宮雄次郎の庄内兵と、新遊撃隊、結義隊がこれを拠点とした。

なお、上山藩の国境いがあやしくなったので上山兵がそちらへ転じたので、四と五の胸壁には会津朱雀四番士中隊が四十人余と、元金田隊と五泉兵が守ることになった。

五泉というのは駿州沼津藩（五万石）の飛地で、五泉周辺の石高は約一万石をかぞえ、五泉（新津の東南約二里）に陣屋があった。なにしろ、飛地なので、陣屋に詰める家臣の数も少なかったが、同盟の一員である以上、頭を抱えて隠れているわけにもいかない。

奥羽越同盟の一員としての義理を果たさねばならず、渋々、出兵したものである。

一方、西軍の方も、あらたな力を得て、防備陣は充実していた。

さきに山陰道の鎮撫総督だった西園寺権中納言公望は東山道の重要性から二軍の総督を命じられたが、さらに、会津征討越後口総督府大参謀を命じられてやって来たのである。

このあたり、まことに朝令暮改だが、戦局は予断を許さなかった。

西園寺公望が直江津に入港したのは、慶応四年（一八六八）の五月二十二日だが、戦地へ入ったのは六月半ばのことだ。

会津征討総督、ついで奥羽越後口総督となった高倉永祜は、お公卿さんとして筆より重い物を持ったことがないので、この役目はこたえたらしく、病気になってしまった。

副総督となって来た四条隆平は、もっぱら民政を司っていた。

もともとお公卿さんに戦争の采配を振らせようというのが無理なのだ。永祜は高田で病床に臥していたが、一日一日病状は悪化するばかりだった。

京へ戻って静養した方がよろしいと、高田藩の御典医もいったが、もう永祜の肉体は、その帰京にも耐えられないほど衰弱していた。

少し後のことになるが、七月二十九日に死ぬのである。

高倉永祜に比べて西園寺は元気だった。血気にはやるところすらあった。

僅か十五人を率いただけで、高田から戦線へ向かった西園寺は、身分を隠して普通の兵士

の服装で、宿泊するときも、偽名を用いたりしている。

何といっても敵地なので、暗殺や襲撃を憂慮する側近の知恵だったろう。

ところが、西園寺はそういう周囲の心配がうるさい。屢々、馬を駆って砲火をおかすほど戦地へ出たりした。

「もしも公に万一のことがあれば、かえって士気に禍する。もっと慎重になって頂かねば困る」

と、側近では気に病んだ。

西園寺は、高田などに本陣を置いていては、味方の士気があがらず、不便でもあるとして、七月九日には、本営を長岡に移した。

これは山県狂介の進言に基づくものだという。

八丁沖再び

一

河井継之助を総督とする東軍の方でも、長岡城を奪われてから二ヶ月を経るとなれば、その恢復は難しいのではないかという気持がしだいにひろがっていた。その焦りが、六月二十二日の八丁沖の強行戦になったのだが、西軍の方でも、北越戦線の膠着状態には苛立っていた。仁和寺宮嘉彰親王があらためて会津征討越後口総督に任じられたのも、強力な局面の展開を意図されてのことである。

権中納言西園寺公望、修理権大夫壬生基修が参謀としてこれにしたがい、長州、岩国、筑前、越前、肥前、芸州などの兵が動員されて来た。海陸相呼応しての進撃であった。

六月二十一日には西軍の軍艦五隻が柏崎に入っている。長州の山田市之允（顕義）、薩州の本多弥右衛門が海軍参謀になって、西軍の総勢はおよそ三万にも達していた。

小松、小野、足守、三日月の四藩兵は関原に至って中央軍と合流して東軍の中堅を衝き、薩、長、芸州、高鍋、明石の諸兵は海軍に属して、海路より下越に上陸して東軍の背後を断

たんとしていた。

これらの西軍の動きと戦略は、河井継之助の知るところとなっていた。

「長岡城を恢復するには、大軍が押し寄せないうちに、機先を制するに如かず」

として、継之助は総力を挙げて、長岡に進撃することにしたのだ。

継之助のその決死の気持は、しかし、長岡城をいったん放棄したときから決まっていたようである。

七月十一日、米沢の甘粕備後、斎藤主計が継之助と三間市之進、花輪求馬を栃尾の営に招いて進撃の作戦を練ったとき、継之助は決意を眉にあらわして、こう言った。

「貴藩の策は悪くはない。だが、正面から進撃して、もし幸いに一方を破ることが出来ても、全面的に勝利を得ることは覚束ない」

そして、自分に考えがある。その秘策はこうだ、と、胸中を明かした。

「いま敵の警備する所を視察するに、彼れ北面八丁沼の嶮を恃み、此方面の警備甚だ疎なり、若し此沼中を潜行して直ちに長岡の本営を衝かば、或は勝利あらん、而して此策を為さんには、諸藩の兵を各要地に配置し、弊藩の残兵僅に五百に足らずと雖も、之を挙げて進撃せんには、旧城を恢復するの一念、必ず死を決して勇進せん、其兵の多寡に付て勝敗を卜すれば、勝算なきは論を俟たず、他の危み疑を懐く所なるも、予は只人和一致を恃むのみ、我兵若し図の如く長城に打入らば、諸藩の兵には疑はず、速やかに諸口を破り進入し、戮力し、信水（信濃川）を渡り、遠く之を駆逐せんことを望む。是予が兼て考へ居る所なり」

と、言ったという。

これは長岡の牧野頼母の回想によるものだが、〈米沢藩戊辰事情〉によると、幾らか趣が違っている。

甘粕備後らに継之助はこう言ったという。

「我に異見あり、尋常に進撃せば、敵亦能く防ぐ、勝算の理あり、遍く敵営を視察するに、一旦忽ち長岡城を抜きて之に拠り、或は自ら驕るの色あり、長岡西北面八丁沖、水田萬頃、故に警備甚だ厳ならず、因て我れ自ら見兵を尽し、水田中を潜行して進まんと欲す、敵の番兵忽ち之を見れば、必ず弾丸雨注せん、不幸我れ先に倒るれば、屍を傍に捨て、市之進ら我に継ぐべし、此間髪を容れず、一に死傷を度外に付し、速やかに郭外の川流を渉り、敵営に放火するを以て着眼とす、敵は郭中某の寺院二所に在り、但我兵寡し、此挙や死傷亦測られず、幸に貴藩精鋭を尽して之に継で、我兵をして全没せしむる勿れ、我れ若し旧城を恢復するあらば、以て恥か恥を雪で孤憤を逞うすべし」

ニュアンスは違うが、だいたい、継之助の決意のほどを窺うことが出来るようである。

甘粕備後と斎藤主計は、継之助の覚悟とその画策が成功の可能性が大きいことを知って大いに喜んだ。米沢藩の総督千坂太郎左衛門に報告すべく急いで見附に戻ってくると、本営の入口でばったり佐川官兵衛に会った。

佐川は集義隊の辰野源左衛門と一緒だった。

「甘粕さん、どちゃまいで、なじょした？」
「おお」
と、甘粕は佐川を見たが、
「総督に会われたのか」
「そうだげんじょも、お身さまは栃尾に行っでらったかし」
「河井さんに呼ばれていったのだが、急ぎの報告があるので」
多くは語りたくない様子で、急ぎ足に入っていった。
佐川はむっとした。長岡の応援に来たという点では、会津も米沢も同じ立場である。会津藩の方にはこの日の呼びかけはなかったのだ。
「なんだ、あいつ、ごしゃげる奴だなし」
と辰野も毒吐いた。
ごしゃげるとは、腹が立つということだ。
「そうでなし、米沢のやつは、いつもいつもこそっとしでな、くそ！」
河井継之助は何の相談をしたのか。会津藩に黙っているというのはどういうことなのか。米沢だけと密談するというのが、許せない気持だった。いまや、長岡も米沢も会津も、一蓮托生の運命共同体のはずだった。
だが、河井の考えは違うらしい。以前から佐川官兵衛とはことごとに意見が対立している。佐川は、その原因が、かれの積極性と、継之助の慎重さにあると悟っていた。

虫が好かないということも、否定はできないが、国家（藩）の存亡を背負っているいま、そうした感情に左右されるのは、
（尻穴がちんぼけな奴でなし）
としか思えない。
朱雀四番士中隊や砲兵隊、青龍三番士中隊など会津藩士は与板城の山脈に続く大山に胸壁を築いていた。
山麓の塩ノ入村に戻ってくると、十人ばかりの兵が休んでいた。
「佐川さんだ」
誰からともなく声が起こった。隊士ではなかった。官兵衛が足を止めて振りかえると、中から進み出た者がある。
「わたしです、鮎川です」
「おお、兵馬か、何用来たぞ。汝は白河口に行っでいたのだべ」
「負傷して若松へ帰っていたのだども、なんでかんで、出て来だかったものですから」
どうしても若松城下でゆっくり治療している気にはなれなかったのだ。まだ傷口がふさがってはいなかったが、無理に軍事方に頼んで、越後への出張を認めて貰ったのだ。
前述のように佐川官兵衛は若年寄格に昇って、軍事奉行頭取になっている。鮎川兵馬は、その小隊頭仮役に任命されて十数人の新編成の兵を統率して来たのだった。
「そうかそうか、汝が来でくれたで百人力だぞ」

官兵衛は旧知の兵馬が配下に入ることになって嬉しかったらしく、冗談めかして言った。

激情家で行動的な官兵衛は誤解されることが多いが、兵馬はかれの姿に古い時代の武将や剣客を見る思いだ。

京都でも、官兵衛はその性格や姿勢を崩さなかった。時にかれの姿勢は家中からも、顰蹙をかったりすることが多かったが、信念を曲げず、おのれに忠実に、真っ直ぐに歩いている。

そこに、会津武士の古風な一つの典型が見える。頑固ではあっても純粋であり、常軌を逸しているかに見えても、本来の武士の道であった。

越後口への出張を願い出た兵馬は、佐川の隊に配属されることを望んだのであった。

兵馬は自分の欠点を知っている。

官兵衛のような剛毅さも、信念の強さもない。会津武士として生きるには、そのがむしゃらなまでの強さがほしかった。他人の眼や思惑など気にせず、堂々と大股で歩ける官兵衛こそ、武士そのものであった。

翌日、佐川官兵衛の不審と不満を解消させる使者が栃尾の本陣から来た。河井総督が作戦会議に出席を要請して来たのである。

「兵馬、一緒に行べい」

官兵衛は兵三人を供にして、横山伝蔵と兵馬と共に栃尾の本陣に赴いた。横山は朱雀四番足軽隊頭である。

兵馬はむろん河井継之助の名を以前から耳にしている。長岡藩にその人ありという評判は、すでに伝説的ですらあった。牧野家も譜代の名門であり、陋習は否定できない。その門閥の外から筆頭家老になり、長岡藩総督になり、開戦に踏み切り、敗北して城を奪われている。

この作戦会議が、長岡城恢復のためのものであり、それももはや最後のこころみになるであろうことを、兵馬は情勢から察していた。

はじめて見る継之助の風丰は、予想したよりは、痩せて貧相なものに見えた。

名前と行動が誇大に喧伝されて、人物像がふくらみ過ぎていたのかもしれなかった。

ただ、兵馬が挨拶すると、無言でじろりと見た眼の鋭さが印象に強烈だった。

桑名藩からも陣将が来て、会議は仮本営としている伊勢屋伝兵衛方で行なわれた。

長岡藩からは、山本帯刀、牧野頼母、稲垣主税の三大隊長、それに川島、三間、花輪の三軍事掛が顔を揃えていた。

「長岡恢復の策はこれじゃ」

継之助はあらかじめ記しておいた作戦計画を示した。

一、十九日昼前より栃尾へ繰込ましむる人数左の如し。

朝岡俊次隊、石川杢右衛門隊、多功縫殿隊。

福井口より

戸沢又八隊　北川重助隊　浅羽隊

小貫口より
横山伝蔵隊
右人数公然として、鼓勢を盛にして栃尾へ入るべし、是は敵を栃尾に集め、一は山内の民を安んずる為なり。
一、同夕方、長岡勢窃かに栃尾を引払い、物静に漆山村迄出張して人馬を休むべし。
一、二十日暮時より長岡勢四百余人窃かに繰出し、八丁沖の田畝を忍び通り、たとひ敵の番兵に見咎められ、山上或は福島、大黒の勢に発砲せらるゝも、少しも構はず、真直に進んで直に宮下辺より小曾根へ通り、城下に押入り、所々の要所に放火し打立べし。
一、同夜長岡城下の火ノ手を見る哉否哉、諸口一度に進撃手配左の如し。
福井口　大井田手ノ十一小隊、一同壁に拠りて烈しく発砲、敵動揺するを見れば、直に百束より大黒水門へ進入すべし。
押切口　横山與一手の十一小隊、同じく烈放、虚を見ば直に池之島の方より進み、且予め船を持行きて筒場へ打入べし。
さすがに河井継之助が数日をかけて練った計画である。地元の強みがあり、地勢を心得ているのでソツはなかった。

二

実際、河井継之助は死ぬ気でいた。開戦に踏み切ったときから、すでに長岡武士としてのかれの気持は定まっていたのだ。
一時的にせよ、長岡城を敵に明け渡すなどとは、武士の恥辱であり、牧野家の名誉は汚されている。総督としての責任は、たとえ奪還しても拭われるものではないのだ。
人間、死を前にするくらい強いものはない。継之助の四十二年の知恵を賭けての計画なのだ。緻密なのは当然であった。
計画書はさらに続いていた。
大口口　中与野及び五反刈、大曲戸の兵七小隊及び新発田の一小隊を合し、又別に済民隊を援軍とし、散兵二隊を遊軍として中之島よりも三間小隊を移し、都合三百人程にして、予め夕刻五時頃より大口の敵塁近く埋伏、長岡の火の手砲声起るを期として、一度に喊声を発して烈しく打掛け、一歩も引かず、決戦敵を打散らし、直に十二湯を渡りて打立べし。
是時、早く人を走らせ、中之島手へ注進せば、粕島及品之木、大保等へ備へたる兵、皆土手伝ひに来りて二ノ手となりて後継すべし。
既に十二湯を破りたる以上は、例へ川辺或は黒津、天神等より敵出で打懸るとも、

少しも猶予せず、直に前進下条に放火するを以て功となすべし。
中之島口　暮々より長呂、宮内、品之木、大保の口々を務めて烈しく発砲して進撃の勢を示し、敵をして我虚を窺う事を得ざらしむ。
　与板口へも其計策を通じ、昼夜大に発砲せしめ、長岡破れて敵動くを見ば、直に攻入事を申合すべし。
田井口　予め兵備を整へて相待ち、長岡の火を見ば、一同打立ち、直ちに進んで干場横山の塁を破り、桂沢に放火し、浦瀬迄進撃すべし。
　但、上山の塁より烈放して、敵をして容易に山を下るを得ざらしむべし。但、桂沢放火に口伝。但、耳取に小倉隊、新発田も一同田井に合兵。
小貫口　萱野隊並他の四小隊、外に見附より三小隊を増し、（但此兵二十日夕方俄に入るべし）窃に間道より忍び上りて埋伏、諸道の砲声烈しきに及んで、直に桂沢に攻上るべし。尤も、取りたる上は固く守りて猥りに動くべからず。
栃尾口　東谷は僅に守兵を置て敵をあやつり、西谷、田ノ口及び荷頃口は番兵打を為さしめ置き、精兵を集めて土ヶ谷木津川より攻上るべし。
　但予め近右衛門、四郎兵衛、滝蔵等を人足に入込せ、打合盛なるを見合せ、此を焼かしめ、又一人を忍ばせ、窃に森立峠の茶屋を焼かしむべし。尤も敵敗走せば、直ちに勇決して森立に退くべし。
実にこまかなところまで考えている。

河井継之助を知る者も、ここまで細心の注意で計画を練っていたとは驚いたことである。
かれはさらに、合言葉まで考えていた。
合詞　誰と問はば雲と答ふ。
合印　白木綿一巾にて、胸を巻くべし。
合旗　白木綿中黒、丸く振れば十文字に受く。
夜の合図　龕燈をたがひに丸く◎如図振合すべし。
　但、之は長岡計りに示すなり。
長岡計り、とは会津や桑名には、それぞれの合図や合印があるだろうから、急遽これを変えるのは、かえって混乱を引き起こすからという配慮である。
各藩のそれぞれの伝統と独自の軍規などがある。東軍の総督ではあっても、それを無視することは、統制の乱れるもとであった。
継之助が新たに示した軍令は左のようなものである。

軍　令

一、歩行出来候上は、何様の儀有之候共決して不可退事。
一、潜行之節、敵より打掛候共、無音無声は勿論、発砲堅く禁止、不得已時宜に及候はば、其節可致差図候。尤、無差図組にて直に進入致すべき事。
一、兼て号令も有之、殊に敵地へ深く入込候事故、打死手負不可拘、若頭分の者手負候はゞ、其代りに小令相勤、小令手負候はゞ其順にて可相勤、軍終候はゞ、夫々深切に

可致介抱事。
一、乱軍に相成候共、一隊集合、決して不可離散、隊長の差図にて手分働候は格外に候へ共、其事仕果さず候はゞ、早速立戻り隊長を不可見失事。
一、味方打相互可心得事。
右条々、堅く可相守也。

継之助は読みかえしたうえで、これに付けたりをした。兵糧のことと弾薬のことだ。
一、夕飯給候上、銘々三度分腰兵粮に可致事。
一、弾薬百づつ銘々持参、尤も無益の打合心付、三十は用心に可残事。
百発ずつ持たせて、むやみとぶっ放すのを注意したうえで、イザという場合のために三十発くらいは残しておけ、というのだ。
総督として、ここまで、細かく気をくばることはなかったろうと思われるのだが、継之助の頭の廻り様と、配下の隊長等に、それだけの人物が少なかったことを物語っているようである。
だが、ここまで気をくばっていても、まだ全体の統制と連絡不備は免れなかったのだ。如何に連合軍を総括することが至難だったかがわかる。

三

夜襲は七月十九日の夜から二十日の早暁にかけて行なわれることになっていた。
そのため、当初、継之助は十九日のうちに栃尾付近在陣の長岡勢十小隊に急遽見附に引揚げを命じた。
ところが、ある隊から文句が出た。数日間山地に在って、備えに苦楚を嘗めたのだ、一宿の休養がほしいというのである。
これに対して、機密保持のために、「含みの筋あり」というだけで、ただ見附集合を厳命したのだ。
これでは不満が出るのも当然だった。各地に防備の陣を張っている諸隊は、それぞれに条件が違っている。その差をまるきり無視しての命令では、不満が湧くのも当然だった。
しかし、この一大決戦を目前にしては、継之助の立場ではそうした区々の不満を考慮しているひまはなかったかもしれない。
ところが、十九日の日暮れ近くなって、夜襲は中止になった。
連日の風雨がひときわ激しく、身動きとれないほどになったのだ。風雨は場合によっては夜襲に絶好の味方でもある。だが、それも程度問題だった。
間道の八丁沖も、径路全く泥濘に没して、宛ら一大湖面を開くが如き様相であり、諸将の

多くも、匙を投げた。

「これでは、敵は西軍ではなく、泥田ということになる。せめて、雨が止んでからにしては如何か」

いつもの継之助なら、あるいは耳をかさなかったかもしれない。

が、今度は、失敗したらそれまでなのだ。二度と長岡奪回の機を失うに違いなかった。

継之助は首肯した。かれが慎重になった証左である。

「英気を養うがよい」

といって〝飲食起臥恣にし〟たこと四日間。

二十三日に至って、継之助は諸将に二十四日の進撃の軍令を伝えるとともに、各隊に、前祝の酒肴を届けさせている。

牧野頼母の手記には、この継之助の決断は薩摩の西郷の進撃の噂が聞こえたからだとある。

――此頃、沼中霖雨の余、水漲り、潜行に便ならざるため、躊躇しありたるに、西郷吉之助、近日天下分け目の軍さを為すと云ふことの聞へあるを以て、急ぎ廿四日の夜進入の事に決せり。此密策の洩れて官軍に知らるるを恐るるがため、小隊長には其以前密告せしも、兵卒には其実を秘し、都合のため諸口固め場を繰替、我兵は見附を本営となし、各所を戍らしむると云ふことに言なせり……。

この牧野の手記には付記がある。牧野の筆蹟ではないので、他の人が書き加えたものらしいが、実は継之助は当初から夜襲一本に絞っていたのではなかったらしい。

その記するところ、こうなっている。

――始め見附に会するや、河井先生、二策を以て衆議に謀る。其一、薩長の兵隊西郷吉之助等に戦書を送り、日を期し、大に戦ひ、雌雄を決せんと。其二、夜八丁沼を潜行して、敵の不意を衝き、奇功を奏せんか、二策とも死は一なり、然れども八丁沼を渡る、或は奇功を奏せんと。衆議何れも玆に決す。

正面から戦うか、奇襲をするか。この期に及んで、まだ継之助が二策を示したのは、長岡武士としての誇りを持っていたからであろう。

こうした軍議は、西欧では決してないことである。

城を奪われたあとでもなお、これだけの武士の誇りが残っていたのだ。

なお、〈追考昔誌〉に拠れば、継之助が〝各隊の長をして密に命を伝へしめ〟たのは「午の中刻」とある。つまり午後零時ごろだったわけだ。

興味があるのは、この決戦にも、同盟軍と一線を画したい気持が働いていることである。単に城を奪い返せばそれでいい、というものではなかったのだ。武士の真髄とはそういうものであろうか。

継之助は、長岡の諸将にこう言っている。

「五月落城以来、諸士一同恢復に力を尽すと雖も、未だ其功を奏せず、若し他人の手に長岡を得らるゝあらば、仮令之を復すと雖も、これ豈、覥然之を受くることを得ん哉」

と。

会津や桑名の将兵は〝他人の手〟などと表現されるのは心外であろう。

この北越戦争では一心同体のはずだったが、あるいは河井継之助にしてみれば、あくまでも薩長ら西軍と長岡七万四千石の戦いのつもりだったのだ。

しかし、同盟諸軍が耳にすれば心外だったとしても、城を奪われた者とそうでない者とでは、やはり思い込みが違うのは当然かもしれない。

継之助は、そのとき諸将に、二百五十年来の居城を失い、いま眼前に望むことすでに二ヶ月、豈遺憾ならずや、と血を吐くような烈しさで、心情を吐露して、

「今夜、将に八丁の沼中を潜行し、一挙して、恢復せんとす。然れども敵は多勢、我兵僅かに五百人に足らず、死地に入て活路無し、只共に城墟の露と消えなば本意ならずや」

と決死のほどを見せている。

五百の兵、というのは、長岡兵だけの人数である。

継之助は御使番一統を本営に召集し、自ら御書付ならびに手配書、心得書を渡し、委細を各所属部隊に伝達すべしと命じ、なお、御肴代として各隊一人ごとに金二朱ずつを渡した。

長岡城奪還

一

総督たる河井継之助の全軍への〝口上書〟は当時としては口語体で書いてある。現代人には当たり前のことだが、当時の他の文書を見ると、いかに口語体が新しいものか、その心配りの深さを感じずにはいられない。

長岡城の奪還は、長岡藩の再起が成るか成らぬかの、文字通り興廃を賭けた一戦である。武士ならば大抵わかることでも、歩卒や農民や町民たちにその自覚を促し、協力させることが必要だと継之助は見て、かれらに理解できるよう、口語体を発案したのだ。

ここにも、かれの政治家としての卓見がある。

この口語体の〝口上書〟は、さながら一対一で話しかけるように、したためられている。

此一軍さは、第一御家の興廃も此の勝ち負けにあり、天下分け目も此の勝負にありて、御家がなければ銘々の身もなきもの故、御一同共に身を捨て、数代の御高恩に報じ、牧野家の御威名を万世に輝し、銘々の武名も後世に残す様、精力を極めて御奉公いたしま

せう。

なぜ分け目の軍さ（か）と云へば、奥州の敵も、今に捗々敷ことなく、東が大勝すれば、越後に敵が居らず、越後が大勝すれば、奥羽に敵は居られず、然れば敵もどこまで引て夫で済むといふ訳にも参らず、さうなると、天下の形勢が変じ、元々諸大名が義理でする仕事でもなし、軍ずきがした仕事でもなく、只暴威に劫やかされて、いやでも難儀でも一寸ずりに延したは、愚かの心底から、義も忘れて、左様の事（を）するけれども、心に誰でも悪るいといふこと知らぬ者なく、高田や与板が快いといふ事もなく、気楽でもあるまい。

少し模様が変ずれば、天下の諸侯が変心するから、そりゃ敵も大変で、天下を取らうとしてした仕事は空敷なり、さうなると、天下中に悪まれ、異国も見離し、終には国も亡る様に至るから、容易の事では引かれぬ筈で、敵も夫を知って居るから、此の大乱を作せし薩摩の西郷吉之助が越後へ来て、天下分け目の軍さをすると云ふ事を聞ましたが、何にしても、そりゃ（天下）分け目だから、此の軍は大切で、私共間違ても御城下へ入て死ねば、義名も残り、武士の道にも叶ふて、遣り置事もなく、思の儘に勝てば、天下の勢を変ずる程の大功が立つから、精一杯出してやりませう。

……。

センテンスが長くて息が切れるが、継之助が言いたいことを一気呵成に饒舌りまくっている感じがする。

この口上書は、これで終わったわけではない。まだ、後がある。

御城下は目の前にありて、入る事も出来ず、如何にも事多で、御一同の御難儀も不目立様なれども、中島文次左衛門殿の弟は、先月二日に今町で討死し、其弟が兄の首を介錯し、始終負て戦ひ居るを私は見て居ましたが、其男が当月二日大黒口の先駈して又討死し、竹垣傳七殿の両人も橡（栃）尾にて討死し、其外あっぱれの働して、討死手負したる人々は、皆様御承知の通り、忠憤義死の人は気の毒の事なれども、是も是非ない事にて、此上は一刻も早く長岡を取返し、両殿様を早速御迎へ申上、御一同忠死の程、両殿様へ申上、戦死の人々を厚く弔ひ、目出度御入城の上は、両三年も御政事を御立被遊れば、元の繁昌にすることは慥に出来るから、御一同共、必死を極めて勝ませう。

……。

わかりやすくて、巧妙なアジテーションである。ちゃんと例を引いて、殿様からの恩賞を匂わせている。

死ぬ気になって致せば生ることも出来、疑もなく大功を立てられますが、若し死にたくない、危い目に逢ひたくないと云ふ心があらうなら、夫こそ生ることも出来ず、空敷汚名を後世まで残し、残念に存じますから、身を捨てこそ浮む瀬もあれと申しますれば、能々覚悟を深めて大功を立てませう。

一昨夜より風も強く、此一戦を大切に思ひ、旨様と御一心になって、此度は是非とも大勝を致し度いと心に浮みし丈けを口上にて申上様と書きましたが、届ぬ事もあるけれど

も、篤と御考被下ますやう。

これが全文である。この口上書で発奮した者も多かったのではあるまいか。

二

長岡攻防で大きな意味を持っているのは八丁沖の存在である。河井継之助は前回の攻撃が八丁沖の深田のために失敗したことを知っていながら、敢えて同じ道を選んだのは、いかにもかれらしい計算といえる。

東軍が八丁沖で失敗したことは、西軍を安心させることになった。東軍が総攻撃に出るとしても、夜襲する以上、再度の試みは自ら前車の轍を踏むことになる、と思っている。河井継之助は、それだからこそ軍勢を進めることにしたのだ。

継之助の長岡恢復計画は、用意周到だった。

ただ長岡へ兵を進めればいいというものではない。戦略の手筈を定めた手配書を見ると、実に細かなところまで、考えられている。

前哨十人、一丁程前に進むべき事。

大川市左衛門、千本木林吉之二隊は、前哨口に次ぎ、八丁沖上り候て、浦瀬、宮下之敵に備へ、花輪彦左衛門、槙小太郎之二小隊は、福島の敵に備へ、総軍通行の後、敵来らば代る代る後殿いたすべし。無事故相仕舞候はゞ、宮下橋を焼き、夫より堀金通り川崎に出で、鮒橋並に左八ヶ裏の橋を落し、地蔵町を焼払ひ、大川、千本木の二隊は、三之江川西土手を固め、新町の応援可心得、花輪、槙の二隊は、台所町より御弓町中町通り千手へ出て、宮内へ攻め入、喰違先を焼払ひ、喰違を可固事。

こうしたこまかい指示を各隊に与えての行動だった。

こまかいといえば、〃心得〃の一つに、行軍の際の前後の距離まで示してある。

〃一人の間三尺、一隊の間二十間、四隊の間三十間の事〃

などとある。

直截的で明快な、喚声まで教えているのはおそらく継之助がはじめてであろう。

こんなことまで〃心得〃に書いてある。

一、御城下へ打入焼立候節、声々に、長岡の人数二千城下へ死に来た、殺せ〳〵と可呼事。

「死に来た、殺せ〳〵」

などというのは、まるで長屋噺しのようだが、こういうところに、人情の機微に通じた継之助の特質がある。戦さの場では、庶民のそれも負の論理など通用しそうにないが、相手も人間だ。関白亭主も、女房に殺せ殺せと金切声をあげられるとひるむのである。

実際、継之助の心境は、将にそれであったろう。

軍令では各自弾薬百発ずつ、となっていたが、出発に先立ち、継之助は器械方に百五十発

ずつ配るように命じた。

その上、青竹を一本ずつ支給することにした。八丁沖の沼地を歩くには、必要なのである。さらに、翌二十五日の兵糧として、餅を支給させている。

「勝餅だぞ、夜明けまで食うなよ」

一人に二十一顆ずつであった。即ち、一飯に七片ずつという勘定である。

だが、大半の者は、

「この戦さは、是が非でも勝たねばならぬ。勝てば、糧食は敵のものを分捕ればよい。身軽でなければ闘えぬぞ」

といって、それを固辞する者が多かった。

継之助の口上書が効いたのかもしれない。士気は盛りあがっていた。

長岡藩の十七小隊六百九十人の内訳は左の通りである。

前哨兵十人。

前軍　銃士隊長大川市左衛門（四十一人）
銃卒隊長千本木林吉（三十四人）
軍事掛川島億二郎
銃士隊長花輪彦左衛門（四十四人）
銃卒隊長槙小太郎（三十八人）
大隊長山本帯刀

二軍　銃士隊長稲垣林四郎（四十人）
銃卒隊長篠原伊左衛門（三十四人）
銃士隊長鬼頭六左衛門（四十七人）
銃卒隊長小野田伊織（三十六人）
軍事掛三間市之進

三軍　銃士隊長渡辺進（四十九人）
銃卒隊長望月忠之丞（三十四人）
銃士隊長小島久馬右衛門（四十四人）
銃卒隊長奥山七郎左衛門（三十五人）
軍事掛花輪求馬

本陣　総督河井継之助、其他諸役人

後軍　銃士隊長今泉岡右衛門（六十九人）
同　稲葉又兵衛（三十六人）
銃卒隊長内藤直記（四十人）
大隊長牧野図書
銃卒隊長河井平吉（三十五人）
同　横田大助（三十四人）
大隊長稲垣主税

この他に従僕らが加わっていたから、総勢七百五十人に近い人数であった。

長岡隊が本陣より繰り出したのは、七月二十四日の日も暮れた六ツ半（午後七時）からである。三番太鼓を合図にまず前哨兵が出発し、次いで十七小隊が軍容粛然として順次に進発した。兵の総勢六百九十人。他に河井総督をはじめ大隊長、軍事掛など諸役人並に従僕五十六人、というのが正確な人数である。

一行は小雨の中を進んだが、土地の老人の話では、この塩梅だと、一刻あまりであがるでしょう、ということだった。

小雨のうちに敵陣を突破することが大事だった。遅くなれば、雨があがる。雲が切れて月が出れば危険は倍加するのだ。

長岡勢は、市屋の船橋を渡り、熱田新町より四ツ屋、清洲等を経て、百束村の東端に出た。ここで暫時、休息したが、継之助は何度も天を仰いで、雲行きを案じた。雲脚が速く、小雨はさらに小降りになり、霧雨になって来たようであった。

「行こう、遅れてはならぬ」

ここから、一切の騒音を鎮めて、私語を慎しみ、黙行することを伝達した。そして、深更、四ツ時（午後十時）ころに八丁沖に差しかかったのである。

連日の大雨は、八丁沖を水浸しにしたまま引いてはいない。これが西軍を安心させていた。長岡の東北方一里余の地で、大沼沢をなしていた。〝湛水未だ減ぜず、尺余の径路、欠（決）壊断絶せる個所さへ多かりしかば、其の困難予期に幾倍せり〟とある。

だが、幸いなことに、先哨の任に当たった鬼頭熊次郎、森田金弥、武井三四郎、花輪豹之助、増井由之助らは、平生この地で漁をしたりしていて、方角や地勢に明るかった。

特に鬼頭らと須藤岩之助は、継之助の命令で、進撃前の四日間、ひそかに夜陰の偵察をとげて、道すじの修理をした上に、岐れ路には、目標を立てておいた。

そのために多勢の人足らを差配している。福井、百束から三十人ほどの人足に、稲舟二十艘あまり、松の一枚板や、からげ縄などを用意した。

目標というのは青竹に白木綿をつけて、夜闇でも、すぐ見えるようにしたのを、分岐点に立てて迷わぬようにしたうえ、一本橋をかけ、田井川には船橋を連ねて道にした。

四日間の夜々、熊次郎らは、同志五、六人と潜行して、逆川の辺から浅い所には草土を埋め、深い所は桟橋をかけるなどして、道を作ったのだ。

何しろ敵前である。四日間も、連夜、そうした作業をすれば、敵に発見される危険性は尠くなかったはずだが、かれらは、巧妙にそれをやってのけたのだ。むろん、発見されたら、生きては戻れない。

明らかに攻撃の準備で、西軍はこれを外堀のつもりでいたのだから、人足らも利敵工作ということになり、斬首は自明であった。

それを敢行したというのも、やはり長岡の者だったからだろう。

おかげで全軍、進路を迷うことなく、八丁沖を南進することが出来たのだ。

富島村についたのは、暁の八ツ半（午前三時）ころである。

沼沢のせいだけではなく、敵の眼前といってよい距離だけに、注意の上にも注意して、音をひそめ、ゆっくりと進むしかなかった。それが手間どった理由である。わずか一里余にすぎないのだから、常態なら九ツ（午前0時）ころまで、つまり二時間もあれば充分のところだった。

三

九ツ、子ノ刻はすでに廻っていた。雨は熄んで暗い夜だったが、八丁沖の深い泥田で手間どっているうちに、折悪しく月の出になってきた。

「しまった、月が出るぞ」

ぼうっと、森の上が明るんで来ている。先頭の者たちは、愕然となった。

この月の出は河井継之助の計算になかったことだ。いや、かれの計画では、月の出前に敵陣へ突っ込めるはずだった。月光に邪魔されるほどの時間がかかるとは思ってはいなかったのだ。

この齟齬は、もしも前回の轍を踏む失敗に終わっていたなら、戦略家として厳しい批判の対象になったかもしれない。

この八丁沖がいかに平坦さを欠いていたかは、〈槍隊戦争記〉が描写しているのを見てもわかる。

——八丁沖は長岡第一の大沼にて、真中に萱野生ひ茂り、無双の難所也。折節大水の跡にて、道の有る所も有り道の無き所も有り、所々に小川流れて、通路難成、所を梯子板を以て橋を掛け、進行候処、敵の番兵篝火を焚き、固守致居候真中を潜行する其心苦さ、言語に絶えたり……。

前述の鬼頭熊次郎らが深田に埋め板を渡して橋に掛け、岐路に目標の青竹を立てたりしたことの効果はどれほどあったのだろうか。槍隊の記録がそのことに触れていないのは、広範囲の上に、夜陰のためであろう。

——遥に真中迄進行候処、爰に大川有り、此川は猿橋川の源にて、両傍に萱野生茂り、心淋敷地也。夫より川端に至れば、此辺別て深田にて、泥は膝より上を過ぎ、艱難言語に絶えたり……。

こうしてようやく萱野を通り過ぎたころ、月が出て来たのだ。

その月光は、東軍の姿を所々にあらわにした。大黒口や田井口で激しい撃ち合いがはじまった。

——双方の飛玉の迸る事如流星、ラッパを吹き、敵の声は手に取る如く聞ゆ。尤敵明朝可致進撃に付て也。

西軍はただ守っているだけではなかった。明朝を期して進撃することになっていたのである。だが、八丁沖を進んだ主力の大川隊は、このとき戦闘を交えていない。

月がぽかりと顔を出して、広漠たる原野が白昼のように照らしだされるや、かれらはいっ

せいに身を伏せた。畦畔に伏して月の隠れるのを待ったのである。

黒雲が流れている。雨こそ降らなかったが、雲が月を蔽ってくれればいいのだ。祈るような心だったろう。

待つことどれほどの長さだったか。一時間ほどといわれるが、二時間ほどだったように書いたものがある。

ようやく、黒雲は月にかかり、すっぽりとこれを蔽った。

再び、八丁沖は、暗闇の帳のうちに鎮まった。

「天佑だ」

「長岡の恢復もはや成ったぞ」

かれらは勇躍した。

いつ月が雲に隠れるか、待つことは大変だ。隊士たちはいらだって、川島軍事掛に進撃をしきりと慫慂したが、かれは大事をとって、圧えていた。こういう場合の判断は難しく、一つ道をあやまると、全軍を死地に追いこむことになる。

「後軍まだ続かず、待て待て」

と、圧えていたという。河井継之助はこの間に後続の来会するのを待ったともいう。

いよいよ進撃の命令が下るや、かれらはいっせいに飛びだした。すでに、敵の姿が見える近くまで来ていたのである。

「撃つなよ、あいつらをひっ捕えるのだ」

篝火を焚いていた敵兵数人が、まず第一の獲物である。

闇の中から、突然、鉄砲と槍をふりかざして飛び出して来た東軍に仰天した西軍の兵卒は、逃げる間もなかった。

槍で足を払われ、銃口を胸に押しつけられて、真っ蒼になった。

「こりゃ、声を立てるな、この方の問いに答えれば、命は助けてやる。この陣所の守りは何人だ」

あまりのことにまだ顫えていて、声も出ない。

「こいつら、気付けに酒でも飲まさんことにはものが言えんぞ」

誰かが、低い声で笑った。それでようやく、一人が、答えることが出来た。この陣営内に詰めているのは十数人に過ぎないということだった。

「何、まことかそれは。では宮下の陣はどうだ」

「は、はい、やはり二十人足らずでございます」

僥倖というしかない。泥だらけの顔を見合わして、

「ますます、長岡が近くなったわい」

「進もう、夜が明けるまでに、奪いかえすのだ」

意気大いにあがった。幸先がいい。後詰めがけて、どっと雪崩こんだ。ここでも、見張りが鉄砲をとりなおして、引金に指をかけたときは、喊声とともに、東軍が飛びこんでいたのである。

狼狽して、あらぬところを撃ちながら、かれらは支える気もなく、逃走にうつっていた。

「敵だ、敵だ」

「撃て、退くな」

絶叫しながら、乱射して敗走した。

これまでは、東軍からの発砲はなかったが、ここに至って、なお軍令を固守させるのは難しい。血気の者たちは、応射しはじめていた。

先鋒の大川と千本木の両隊は、宮下の塁を抜いて火を放ち、鼓譟吶喊して進んだ。

この銃声と銃火を見て田井の陣営から烽煙があがり、次いで栃尾の古城址からもこれに応答するのが見えた。十二潟、押切、福井、大黒等の諸塁からも大砲小銃が火を吹き、炎焔天に漲り大地震撼して凄まじい暁天の修羅場を現出した。

長岡城恢復成る

一

河井継之助の秘策は完璧であった。むろん事が成就するには、天の時を得たことは否定出来ない。地の利はいうも更なり、長岡藩の意地と、屍となっても父祖の地を奪還せずんば、の強烈な意志が効を奏したのだ。

宮下の敵塁を奪った勢いをかって、前軍大川市左衛門（銃士四十一人）の隊はまっしぐらに突き進んだ。砲声が轟々と響き間断ない銃声と喚声で、夜は裂け、大地は揺らめいた。

千本木林吉の隊は、命令通りに浦瀬口の西軍を扼すべく、宮下に陣を布く。二軍の鬼頭六左衛門、稲垣林四郎、篠原伊左衛門、小野田伊織の率いる四隊は、大川隊に遅れじと追いついたので二百二十人余の軍勢になった。この血気盛んな隊が気勢をあげて亀貝から富島に出て、抵抗する西軍を破りながら、火を民家に放ちつつ、

「長岡武士が戻ったぞ」

「西国狐を追い出せ」

と、喚き進む勢いは、西軍もとうてい阻むことが出来なかった。戦さは勢いである。個々の士気の昂揚が、一つの火焔の勢いとなって地表を疾走するかのようであった。

途中から大川隊は小曾根に迫り、二軍の四隊は新保に出た。

東軍のこの進攻を最も悦んだのは、沿道の村民たちだった。かれらは、この反攻を待ちかねていたらしく、長岡勢の進んでくるのを見るや、各戸に灯を点じ、水桶を出して歓迎した。息もつかせぬ進撃で、誰しも咽喉に渇きをおぼえていたので、この水のふるまいは有難かった。

「悉けないぞ」

「何よりも有難いわ、やれやれこれで息がつけた」

長岡隊にとっては、水のふるまいもさりながら、すでに敵勢に占領されていた土地の人々が、かれらを忘れないでいてくれたという思いが嬉しかったのであろう。

稲垣の半小隊は城岡土手の三軒茶屋に出て、鬼頭、小野田の二隊はただちに喰違いを固めている。

この防衛体制がまだ固まらないうちに、長州勢が猛攻して来たのである。神田、石内方面からの長州勢は、東軍の一角を破らんとして来襲するや、土手を胸壁にして射撃を加えてきた。

だが、東軍は勢いに乗っている。瞬時にこれに応酬した。闇の中にはじける銃火で西軍が一小隊ばかりとわかると、小野田伊織は、

「あいつらを沈黙させろ」

と、鬼頭隊と連携していっせい射撃で応じている。夜陰の銃撃戦では、銃火と銃声の大きいほうが勝ちだ。西軍はたちまち数人を傷つけられ、ほうほうの体で退却した。

かれらが長州隊とわかったのは、その遺棄した品々に、一文字に三星の毛利家の紋どころの印されているものが多かったからである。

「あやつら、長州だったのか」

「それなら手加減するのではなかったな。もう一息で、全滅させることが出来たのに」

「悔むな悔むな、まだ先があるわい」

稲垣半小隊と、篠原の二隊は、逃げ場を失って窮鼠かえって猫を咬むの勢いで、必死に抗戦してくる西兵を蔵王に追撃して、安禅寺に火を放った。

松代藩兵は石内に陣取っていたが、東軍の急襲に立ちむかって、凄まじい白兵戦になった。相互に抜刀吶喊したのは、町中であり、意外に間近く相手を発見したからである。

銃声と火煙が距離の判断を誤らせ、敵の位置を正確に摑むのが難しかったのだ。

松代兵はしかし、士気において長岡兵の比ではない。薩摩や長州に尻を叩かれて、しぶしぶ参戦していたのだ。力を合わせ、銃弾を受ければ、敵愾心は湧くが、父祖の城地を奪還しようという意気込みの前には、敵ではなかった。

たちまち一角が破られ、恐怖の叫びをあげて背を見せる者が出るや、どっと、それにつられて、五人、十人と逃げ出した。

こういう際の心理というものは、平時においては考えられないほどに作用する。東軍の喚声は高くなり、松代兵は、蜘蛛の子を散らすように、思い思いに、横町や小路に逃げこむ。

「追え、一人も逃がすな」

勢いこんだ東軍は、眼を光らせて、四方にこれを追撃した。

陣地には、夥しい弾薬、銃器、戎服などまで松代兵は遺棄している。それを処分するひまなど、無論なかったのである。

そうした兵器ばかりでなく、軍用金まで遺していっている。

「あいつら、金持ちじゃのう」

「わざと残していったのではないか」

「そんな馬鹿な」

「いや、これだけ差し上げますゆえ、手加減して下され、というのであろう」

どっと人々は笑った。

「手加減してやる。松代までは攻めてゆかぬとも、越後から出てゆけば許してやるわな」

「そうじゃ、他国者が不埒なことじゃ」

分捕り品を前にして、しかし喜悦に相好を崩している場合ではなかった。

残敵掃討が急務だった。闇に潜んだ者は一人残らず狩り出さねば背後を襲われるおそれがあったのだ。

「煙でいぶし出せ」

極楽寺をはじめ石内町に放火して、一軒一軒、虱つぶしに捜索してゆくと、一軒の酒屋の土蔵に人影があった。

「何者だ」松明をかざして土蔵のうちを照らしながら、「出て来い。出て来なければ、蔵ごと丸焼けになるぞ」

「町の者なら、案じることはない。われらは長岡藩の者だ」

その声に誘い出されたように、男が一人出て来た。無腰である。一見、町民と見えたのは、丈高い若者ながら、刀も帯びず鉄砲も持たず、寝巻姿だったことだ。

火を除けるつもりか、手拭をかぶっている。

「何者だ」

「――は、はい」

「何者じゃと聞いている。この店の者か」

「はあ、そげなふうで、ごめんを」

と、長岡兵の傍をすり抜けて通ろうとした。無腰だけに、気を抜いたのである。

が、その頑丈な背の高さが、かえって禍した。手拭が夜風にあおられて、髷のない頭が見えた。男は、あわてて、手拭をおさえたが、はっきりと、ザンギリ頭が見えた。

このころ、村人も町人も、丁髷を切った者はない。むしろ、西国兵の新しがり屋が髷を切りザンギリ頭にしているのを、多く見かけている。一人が、素っ頓狂に叫んだ。

「ザンギリじゃア」

それは、〝敵だ〟というのと同義語だった。

「しまった」

男はふいに走りだした。

刹那、槍が閃いた。男はつんのめった。そこへ駈け寄った者が、片手斬りに首を打ち落としている。

「こいつ、やはり敵だったか。懐中を調べろ、何か素姓がわかるものがあるじゃろ」

寝ている間もほどかなかったのであろう、胴巻が出て来た。その中に守袋があった。れっきとした長州藩士で、振武隊の斎藤梅之進、二十四歳とわかった。

「馬鹿者が、いさぎよくないやつだ。刀をわざと隠して来たか」

土蔵の中から、差料の両刀と、鉄砲が見つかった。

二

この夜の松代兵の敗亡は、長く悔恨を残したが、それでも果敢に闘った者たちはまだよい。石内の大半の松代兵は急襲されたとき眠りの中にあった。かれらは銃声と喚声で飛び起きたものの、身仕度することも、鉄砲を執る閑もなかった。文字通り、帯ひろ裸で、逃げ出すしかなかったのである。

武士としても、兵隊としても、これ以上の醜態はない。だが、見苦しかろうと、卑怯だろうと、いのちを助かりたいという本能だけが、優先した。

周章狼狽、宿所から裸足で逃げ出して、喚声から遠くへと走った。ところが、信濃川の川岸に出て立ち往生した。船などそこにない。追われるものの恐怖が、夢中で川へ飛びこませた。業火を逃れる羊の群である。

泳げる者はまだよいが、泳げない者は、悲鳴をあげて、水を叩き、近くの同輩にすがろうとし、すがられる方はたまらないから突き放す。あるいは、武者ぶりつかれて、からみながら、急流に流されたり、呑みこまれたりする者も出てくる。内川を泳ぎ切って中島に潜伏、夜明けを待った者も多い。惨澹たる敗戦である。

稲垣隊は、石内を焼き払い、屋台小路から新町に出て、城岡土堤の三軒茶屋付近に築いた塁壁に拠った。これは西軍が築いていたものを占領して逆に防塁にしたのである。

三軍の小島久馬右衛門と奥山七郎左衛門は両銃卒隊士八十人ばかりを引き連れ、亀貝より永田産穢に出て、長興寺裏に進み、長町に屯集した西兵を打ち払った。さらに神田町の敵陣へ斬り込んでいる。

ここには前夜下向した西園寺公望が仮宿していると聞きこんだのだが、すでに風を喰って逃亡した後だった。

西園寺は東軍が宮下を襲ったときの砲声と放火に〝大狼狽〟して素足で逃げだしたと陣中日記にある。長州参謀らも同じだった。

かれらの遺棄した配軍帳面やその他の重要書類も東軍の分捕りになったところを見ると、

お公卿さまの西園寺の〝大狼狽〟ぶりがわかるようである。

北御蔵での分捕り品も多く、〝小銃、弾薬、戎衣、帯刀、其外品々分捕挙げて数え難し〟とある。

北御蔵の西兵も支えきれずして山田、草生津方面に逃れたのだ。

花輪求馬軍事掛は、隊長槙小太郎以下三十八人の銃卒と若干の兵をもって富島を守った。これは福島方面の敵に対したのである。

後軍の五小隊は永田から堀金通り地蔵町に進んだ。稲葉又兵衛と今泉岡右衛門、内藤直記らも、それぞれ三、四十人ずつを率いて付近を探索して神田中御門及び千手口御門を分守することになった。

総督の河井継之助は、後軍の横田大助とその三十四人をもって地蔵町より長倉に進み、激戦を重ねながら四郎丸口に至った。

この四郎丸村の先、長倉口に番兵小屋と胸壁があったが、これを焼き払って長倉に進入したのだ。

このとき、油屋先で胡乱なやつを見つけた。数人の男が重いものを担いで、煙にまかれてうろうろしていたのだ。

こういう混乱のときには、命知らずの火事場泥棒が多い。

「あいつを引っ捕えろ」

河井の命令で、銃士が威しに二、三発撃ったところ、足が竦んで動けなくなった。

早速調べてみると、藁を被せた千両箱だった。そして中身も間違いなく、小判がぎっしりと詰まっていたのである。これは松代の足軽だった。兵隊たちが逃げ出して、この連中は、金運びを命じられていたのだと白状したが、混乱を幸い、持ち逃げしようとしていたらしい。

「とんだ置土産だ。長岡城の修復にあてよという神示であろう」

と、河井継之助は笑った。

急襲が効を奏して、西軍が長岡城に放火しなかったのが幸いだった。だが、前回のときの破壊のあとがいたいたしく、その修復には、相当の時日を要すると思われた。

僥倖だったのは、当日、西軍は大攻勢に転じようとしていた、その矢先だったのである。河井継之助はそこまで見抜いていたわけではない。まったくの偶然で、幸運だったのだ。

この長岡恢復の様子を当時書いたものがある。

――八ツ頃より長岡一円放火、余煙天を焦し、焼音天地を震撼し、実に白昼の如し。此日、長州奇兵隊五百人余、長岡へ繰込、弾薬等汽船二艘にて高田へ着岸、夫より長岡へ運送の由。明日橡（栃）尾へ進撃、見附へ迫り、越後路大進撃の計画にて、八町（丁）沖往来の間、殊に橡尾、森立峠松火の往来見ゆ。橡尾へ弾薬、兵粮、餅等運送の松火も亦見ゆ。長岡に一千余繰込居り候由。

――宮下放火にて福島破れしを長岡進撃と心得、諸方人勢大狼狽、更に途を失ひ、新町通り馬にて逃去る者不引切、草生津へ大勢繰入りしも、急速に渡り兼ね、左近土手へ雲霞の如く逃去り、大小並に銃等捨去る者不知数、故に敵の死体味方に倍す……。

という有様だったのだ。

このとき、山県狂介は奇兵隊の本陣に在った。

その動静は本人の自伝に詳しい。だが、自分のことだから粉飾があるのは否めない。ことに不名誉な敗軍の中で、自分がどう行動したか、などというのは、ありのままに書けるものではない。前述の西園寺卿の醜態を見てもよくわかる。

山県は翌日の暁天に栃尾へ向かって進発することにしていたが、その前夜、森清蔵と酒を酌み交した。

森清蔵は、軍状視察のために逗留していた。いわゆる慰問使で、明朝は、京へ出発する。そこで本陣で別れの盃を交して雑談に夜を更したが、しかし、就寝が遅れたわけではない。

——余は独り諸子に先だちて寝に就きたり。

と、山県は書いている。

——然るに未だ幾もあらざるに、福田等は余の枕頭に来りて、呼び醒まして曰く、只今今町の方向にあたりて、火の手の揚がれるは、恐らく進撃軍が已に攻撃を開始したるものなるべし、我々も最早や出発すべき刻限ならん乎と。

因って時計を検するに、一時を過ぐること未だ多からざるのみならず、火の手の揚がると云ふが如き、頗る不審に堪へざるものあるを以て、余は蹶起して諸子を警戒し、急に斥候を萩原に命じて騎馬にて出でて模様を見せしむれば、豈に図らんや、敵は已に城下の町はづれに押寄せ居れりと云ふ。焉んぞ、驚愕せざること得んや。

寝耳に水であったろう。

（しまった、先を越されたかッ）

と、顔色が変わったに違いない。出鼻を挫かれた気持だ。山県のような男にとって、これが如何に衝撃的なことであったか。

この後の叙述には、作為が見える。

西園寺卿の周章ぶりや信濃川での松代兵の哀れな溺死ぶりなどこそ事実なのに、年月を経、天下を取ってからの回顧談は、名将らしく如何に冷静沈着に指揮をとったか、という修飾でカバーされてしまう。

山県は、こう書いている。

——形勢の不可なる、真に言語に絶えたりと云ふべし。因って余は諸隊に向ふて、夜中に於ける市街戦の危険を冒すことなく、取敢へず、妙見峠の方向へ退却すべき旨を伝令し、直ちに西園寺卿の宿陣に至りて、其所に詰め居たる長三洲に事の次第を語り、我々は長岡城外に出で、兵を集中して恢復を謀らざる可からざるにより、先づ妙見の要衝を守備するの決心なり。足下は此旨を西園寺卿に告げ、錦旗と卿とを擁護して速かに関原へ退却すべしと命じ……。

これなら、周章狼狽、帯ひろ裸の素足で、命からがら逃げ出したことが糊塗出来る。

西園寺卿は前線にいたのだから、そのときはすでに逃げ出していたのだ。山県の命を受けた長三洲が護衛にゆくまでに時間的余裕があったなら、兵器や大金を捨てて、身一つで逃げ出すはずがない。

西園寺卿をもかばい、おのれも立派に指揮したことにしなければ、恥をかく。山県のこの描写に嘘が感じられるのは時間的な辻褄の合わせ方が苦しいのと、アリバイ証明を強調するため、退却にまで理由をつけていることだ。

事実なら、事実ありのままを書けばいいので、退却に理由をつけることが、率直でないのである。

――蓋し前原（一誠）も亦、此の火を以て官軍の今町附近を攻撃するものと思ひ誤りしなり。因って余は、事の極めて急なるを報じ、且つ人数を纏めて一同に退却を為すの必要なるを悟り、約に従ふて妙見口の方に引揚げたり。蓋し長岡を取り返すには是非とも妙見の形勝を占め置かざる可からず、然らざれば敵の為めに重ねて榎峠の険を扼せられ、五月十九日前と同様なる困難に陥るべきを以てなり。

この夜襲の際にそこまで考えをめぐらす余裕があったとは、考え難い。後日の行動と結びつけたこじつけではないか。

――其中に、賊は早や城下の市街に入り込みて、火を八方に放ちたるが、滋野の一隊は道を失ひたるや、将た途を絶たれるにや、一向に引揚げ来らざるを以て、余は憂慮に堪へず、夜の将さに明けんとする頃、三吉六郎の一隊をして城下の裏手にまはり偵察砲撃を試ましめたるに、此隊も亦同じく行衛不明となりたり。

自分の恥にならないことなら、山県の記憶は鮮明に蘇るらしい。

この三吉の隊は、交戦中に道を失って、とうとう帰陣することが出来ず、激戦の末に大島から一里ばかりの上流を渉って関原の方に退却した。

また滋野謙太郎（後の清彦）の隊は、猛火のために道を断たれた。加州兵一小隊と松代兵の生き残り十人ばかりと共に、信濃川堤から逃れて中島の空砦の中にもぐりこんでいる。しかし、すぐに東軍に発見されて集中砲火を浴びることになった。もはや万に一つの僥倖を狙って脱出するしかない。

夜に入るのを待って信濃川べりで漸く舟を手に入れると、これに乗じて大島の方に退却することが出来た。

山県は信濃川で西兵が溺死したことは書いているが、自分は、これを慮って、分岐点でしきりに止めたのに、〝先きに疾く大島へ向って走りし者多かりし為めなり〟と、自分には責任がない、と弁解している。勝利者の回顧談は、功はおのれに、罪は死者に、である。錦旗の下に駆り出されて、不名誉な死に方をした兵卒に一掬の涙も与えようとしない。

継之助負傷

一

会津征討越後口総督府大参謀の西園寺公望が寝衣のまま蒼くなって動顚していたのを叱咤して、錦旗とともに逃がしたのは長光太郎である。長は豊後日田郡の合田村の生まれで、若くして広瀬淡窓の門に学び、熱烈な皇学派で三洲と号した。代々医者であったが、淡窓の弟旭荘が大坂に転じたのち都講となり、桂小五郎（木戸孝允）らと交わって、討幕運動に入っていった。長州で奇兵隊が結成されると入隊して、馬関戦争では前田砲台で負傷している。学者出身であることが西園寺卿の信任を得たのであろう。京都出発以来側近にあり、秘書のような役目をしていた。

この夜の西軍の周章狼狽は、実に醜態のかぎりで、各隊の報告書はその惨状を蔽うための苦しい言いわけに終始している。

山県有朋の回顧談では、前原一誠などは屋上に上がって、凄まじい火の手を眺めて、西軍が進攻したものと錯覚し、快哉を叫んでいたというから、その混乱ぶりがわかる。間違ったのは前原だけではあるまい。

信濃川が地獄の三途の川になったのは、長州の滋野謙太郎の隊や加州、松代の兵ばかりではない。着のみ着のままで河中に飛びこんで溺死する者も尠くなかったし、泳げない者や、逃げ遅れて自殺した者も多かった。

山県は長岡の南方一里ばかりの野中に寺を見て入った。数人の兵を連れただけであったが、近くに長州の報国隊がいたというのを聞くと、福原和勝を呼びにゆかせた。

数人の兵だけでは心細かったのだ。空腹だった。寺は万休寺である。そのときの山県にしてみれば、寺が何宗であろうと関心はなかった。休息が出来て、空腹が満たせればよかったのだ。

西軍の暴虐は野中の寺にも聞こえて来ている。敗軍になったかれらは、何をするかわからない。この越後から見れば、薩摩や長州の人間など遠い西の彼方から来た異人種なのだ。

「朝飯を食わせろ」

と、銃剣を突きつけて、山県の従卒は寺僧をおどした。

「朝餉と申しましても、御覧の通りの破れ寺のことで、皆様方の召し上がるようなものは何もございませんが」

こういう連中に休息されるだけでも迷惑なのである。

「こやつ、こちらにおいでの方を知らんか、会津征討越後口総督府下参謀という偉いお方だ。早々に支度しろ」

威丈高に、従卒は寺僧をおどした。

「はい、それはもう、どなたさまでも、仏のお救いはございますが、今すぐと申されても、韮粥くらいしか出来ませぬが」

「それでもよい、早くしろ」

聞いていた山県は、奇襲を受けなければ、数百俵の米が届いていたのに、と苦笑した。奇兵隊五百と、一千人の応援が到着する予定で一大進攻作戦を展開するところだったのである。僅か一、二刻の違いで、先を越されてしまったのだ。

熱い韮粥を食べているところに、馬蹄の音がし、庫裡の前で声がした。山門もかまわず乗り打ちして来たらしい。先に呼びにやった福原和勝だった。

福原は長府藩士で本姓村上、三男坊だったので本藩の福原保左衛門の養子になったのだ。足軽頭に用いられて、馬関戦争で戦ってから、自ら報国隊を組織し目付役となった。長幕戦には軍監として転戦している。この戦さには報国隊を再編成して隊長として参加していた。

福原はのちにロンドンに留学したものの、西南戦争では討死にすることになる。

「おう、来たか、粥でもどうじゃ」

と、山県は磊落に奨めた。

「腹は減ってはいません。それより、このあたりも安心ではありませんぞ、あいつらの勢いでは、こっちにも進んでくるおそれがあります」

「あわてることはないさ、ほしいのはあの城だろう。あんな役立たずの城でも、河井には何

よりの拠りどころさ、それにしても、奇襲にはまいったな。どうだ、兵を集めて、盛り返してはと思うのだが」

「さあ、それはどうでしょうか、打撃があまりにも大きすぎました。随分、分散していますから、集めても指揮をするには困難でしょう」

「だが、河井の軍は大したことはないはずだぞ、せいぜい、千五百くらいのものではないか」

「いまは人数の多寡ではありますまい。やつらの士気が上がった分だけ、こちらは下がっています。三千や四千の隊を編成したくらいでは奪還は無理でしょう」

「それもそうだな。意気沮喪しているやつらでは、勝ち目はないのう。だが……」

と、言いかけて山県は、唇を結んだ。

（両三日のうちには、奪還せねばならぬ）

と思ったのだ。応援の軍の力を結集するためにも、長岡城を敵に奪われていては、進みようがなかった。それに夥しい銃器弾薬を遺棄してしまっている。ほとんどが東軍の分捕り品になってしまったのだ。

槍隊の戦記にはこう記してある。

——敵の分捕品を見るに、大砲、小銃其外弾薬、器械、戎服の類如山積上置、其品を金に計れば何百万両と云ふべし。其内に旧地の人民酒肴を献じ、兵粮を用意して御再帰を相賀し、又敵の弾薬抔を持参り、敵の進退を注進す……市中の老若男女路傍に平伏し、

或は数珠を懸け、涙を流して父母に再会の思ひをなし、壮年の者は竹槍棒或は鍬鎌抔を以って勇進を加勢す、爰に於て初めて積日の鬱愁を散じたり……。

長岡城下の町民、城外の農民たちの喜びは大きかった。誰しも戦火を好む者はいない。況や、他国人に占領されて、顎で使役されたりした屈辱感は、胸に深い傷となって残っている。この長岡は代々牧野氏が領していただけに、つながりは深かった。その思いはひとしおだったろう。

西軍はことに乱暴で掠奪、暴行がはげしかったので、その敗走には狂喜した。西兵たちがあるいは寝衣姿で、あるいは半裸で髷を醜く崩したまま周章狼狽して逃げ惑い、撃ち殺されたり斬られたり、捕縛される姿に快哉を叫んだ。

かれらが乗り込んで来てからの暴虐に凝っと耐えていた人々である。この混沌の中で、しかし、町人たちが武器をとって復讐の刃を浴びせたとか、捕われた西兵を打擲したとかいう話は伝わっていない。

一年の半分を雪と寒気に埋められ、ひたすら耐え忍んで生きている人たちには、西兵の暴戻も天災と思うことで、許せたのだろうか。ただ春の来ることを悦ぶにも似た歓喜をあらわす素朴さで東軍を迎えている。

町々の軒下には、酒樽が持ち出された。味噌漬の樽や甕もある。握り飯や香の物などが皿に盛られて、飲み放題、食い放題の、まるでお祭り騒ぎだった。東軍の兵士たちは寝不足の眼を赤くし、煤けた顔に驚きを隠せなかった。

戦塵にまみれたかれらには、あまりにも思いがけないことだった。

「おめでとうございます。皆様方のお陰でございます。御苦労さまでございます」

町民たちは口々に声をかけ、酒樽の鏡を抜いて、柄杓で酒をふるまった。

「お飲み下され、祝い酒をたんと召し上がって下され」

西軍の占領下にあった間に、兵糧を徴発されたはずだが、その間、どこに隠していたのだろうか。あるいは長年の庶民の知恵が巧妙に目に触れぬところを作っていたのかもしれない。

この大盤振舞いに、東軍の兵士たちは疲れも吹っ飛ぶ思いだった。

煙硝に煤けた手で握り飯をつかみ、渇いた咽喉を酒で潤して、兵士と町民はたちまち親しくなった。酒は身分階級を超越させて、肩を叩き合い、唄いだす者もいた。

町人たちは、老人も女子供も、一家総出で歓待した。男も女もはしゃぎだして、手を振り足を舞わして踊りだしている。喜びを全身であらわすと、人は自然に踊りだす。陽気な〝長岡甚句〟が人々の口をついて出た。

〽お山の千本桜
　花は千咲く
　実はひとつ

町人にまじって武装の兵士たちが踊っている姿は、踊りの外にいる者をも感動させずにはいなかった。そこには長岡解放の喜びがあり、文字通り盆と正月が一緒に来たような歓喜があった。

河井継之助は町々を視察したが、この群舞の波に押されて、屢々、道を変更しなければならないほどだった。

長岡城は半ば焼け崩れていたが、まだ屋根や壁の使える建物も残っていた。そのあたりには西軍の遺棄したものが散乱していたが、殊に三ノ丸の武器蔵には弾薬なども多かった。幸いというか、神田口門と太鼓櫓際の門は夥しい銃弾のあとが生々しかったが、辛うじて焼失を免れているのが懐かしかった。

武器蔵の中の戦利品は多くは長州軍のもので、鮮やかな一文字に三星の紋章があらためて勝利を感じさせた。

その品々の中には、まだ新品の衣服が発見された。

「殿様方は会津に仮泊されて、着る物にも苦労なされておる。これらの品物を、何とかしてお手元に届けたいものだ」

と、河井継之助は言った。

部下の鬼頭某に命じて、その整理をさせたが、その他のものは中間小者などに配ってやれ、と言い添えた。

武器弾薬を捨てて遁走したのは、如何に狼狽し恐怖したかを物語るものだ。〈衝鋒隊戦史〉によれば〝大砲百二十余門、弾薬二千五百余函〟とある。もっとも大砲などは重く大きいから、がらがらと曳いて逃げるわけにはいかないが、これだけの準備が西軍にあり、これが未明を期して一斉に東軍に向かって繰り出されたら、と思うと、慄然とする。いまさらのように継之助は夜襲の敢行の時に遅れなかったのをひそかに悦んだ。

大砲弾薬が右のような有様だから、小銃刀槍その他の軍需品に至っては、積んで山をなしたという表現も大仰ではあるまい。

因に、夜の間に収容させた西軍の死体はおよそ二百ほどであった。したがって信濃川で溺死したり、西軍自身の手で運び去られたり始末されたりした遺体を数えると、六、七百に及ぶであろう、というのが東軍の考察であった。

この激戦の勝利は、もとより夜襲の成功にあり、継之助に督励された長岡藩兵の発奮と決死の行動によるものだが、精力を使いきったかれらの様子が、目撃者（本間むつ子）の回想にある。

――長岡取返しの時のことで御座いましたが、私共はおッかなびッくりで、城岡の土堤の方迄参りますと、長岡勢の方が二十人計りお出になりました。御印の五間梯子が見えましたから、その長岡様がお出だと喜び勇んで近寄ると、先様も非常のお喜びでしたが、疲れ切った御様子と云ったらお話にならぬ位で、お前達を見たら嬉しくってガッカリしたと皆様が尻餅ついて、コリャ此通だと、かくしの中から乾上った餅を出して噛ってお出なさるんだもの、此時に何とも言えない思いがして自然に涙が出ました……。

戦況報告など公文書からは、こういう人間的な姿は窺い知れない。長岡市民の一人、少女の眼に映じた東軍の姿である。

彼女はこう続けている。

——何分にも長岡勢の取返しだと云うので、市民の喜びといったら大したものでした。菓子屋でも、魚屋でも、酒屋でも、みんな山の様に積んで贈りまして、手を取らぬ計り、生き別れた親共に二度めぐり逢うた様な心持が致しました……。

この素朴な感動もしかし、一昼夜で潰れてしまおうとは、もとより情勢に昏い町衆たちの識るところではなかった。

継之助は藩の仮事務所を町下の坂の上町小島助左衛門の屋敷に置いた。城の中は焼け残りの蔵と門があるくらいで、本陣とするには不便だったからである。

二

山県が見抜いていたように、河井継之助は深追いするつもりはなかった。長岡城下から西軍を追い出せばいいのだという気持だった。それだけでも精一杯だったのである。少数をもって奇襲を行ない、これに成功したとしても、それ以上の勝利を期待するのは、勇み足になることを知っていた。

前記の長州、松代の隊を草生津方面で痛撃したときも、追撃せんとする味方を制して、この地を守らせている。

まず長岡城下を恢復して、要所に兵を配置した上で、次の作戦を展開すべきだとかれは思った。

長岡恢復戦でもっとも激しい戦いは新町口で展開されている。

新町口が要衝たることは、あらかじめ予期されていたことだった。福井、大黒、十二潟の諸塁を抜いて、ほっと息をついたとき、敗退した敵が新町口に集中攻撃をかけてくるであろうことが、地勢的に憂慮されたのである。

「新町口が敵の狙い目になる。おれが守ればよいのだが、本隊を指揮せねばならん、誰かいく者はいるか」

「私が参りましょう」と申し出たのは三間市之進である。「敵兵が来襲しても私が食い止めます」

「三間か、お前なら大丈夫だ。多分、お前がそう言うだろうと思うて居った。あすこはお前でなければならぬ。しっかりやってくれい」

河井の激励を受けて、三間は一隊を率いて新町口に向かった。かれは軍事掛だったが、この編成で大隊長になっている。むろん、自ら率先しただけに、決死の覚悟である。

三軒茶屋の塁壁では、篠原伊左衛門と稲垣林四郎が銃撃隊を率いて守り、鬼頭六左衛門と小野田伊織も銃士隊と銃卒隊をもって喰違いの防戦に当たった。

敵の反撃は朝の七時少し前からはじまっている。昨夜の夜襲に精根を費やしただけに、誰の顔にも疲労が濃かった。いつ敵がやってくるかが気にかかり、一睡も出来ない者も尠くなかった。攻めるときと、守る側に廻ったときは意気込みが違う。

夜明け間もなく敵の動きが斥候の報告でわかり、素破っとばかり台座にかじりついたが、

轟音とともに砲弾が唸って来た。

それが西軍の反攻のはじまりだった。

恨みを含んで敗退した昨夜の失点を取り返すために、凄まじい間断ない砲撃と大軍の喚声と執拗な突撃で前線を突破して来た。

新町口を守っていた三間大隊長から、急報が入った。

「下条方面の敵兵衆を尽くして迫る、我兵これを邀撃するも苦戦に陥れり」

と。

ただちに継之助は銃士隊の渡辺隊をして救援に赴かせた。この方面に進撃して来たのは十二潟から退却していた薩兵である。森立峠から来援した振武隊一小隊と合して城岡土手に逆襲して来たのだ。

その猛攻凄まじく、三間市之進は歯がみしつつも新町口にじりじりと後退するしかなかった。喰違いでも鬼頭らは苦戦に陥った。激戦一刻余に及んで昼前には、後退して新町に拠ったが、この戦闘で銃卒隊長の篠原伊左衛門は狙撃されて仆れた。稲垣林四郎、小野田伊織の両隊長も被弾している。死傷者は数えきれないほどだった。この新町口の戦闘は午後三時ごろまで及んだ。実に八時間にわたる凄絶なものだった。

篠原伊左衛門は鉄砲もまたよくしたが、その真骨頂は武士らしく剣にあった。かつて江戸在勤のとき飯田町練兵館の斎藤弥九郎に学び、小天狗と称された。その剣名は西軍の中にも響いていて、篠原の安否を問う者が多かったことが捕虜の口から洩れている。かれは被弾し

て苦しい息の下から、こう言ったと伝えられる。

「僕、平生自ら弱兵を以って任ぜず、然るに銃丸僅に腓下を貫ぬけば、則ち起つこと能はず、甚だ愧づべしと為す、然れども本日の戦、敵首、四級を獲たり、聊か以って主家に報ゆるに足らむか、唯だ恨む、衆殊死して戦ふと雖も、驕敵殆んど支ふる能はざらんとす」

と。

敗色は全軍を蔽った。

地蔵町を守っていた大川市左衛門隊は警備を千本木隊に委せ、栖吉川に沿って鼓譟しつつ稲垣隊の救援に赴いた。間断ない砲声銃声の中である。小太鼓のしらべはかれらを如何に力づけたかしれない。

継之助があらかじめ配布した手配書の中に〝――地蔵町を焼払ひ、大川、千本木の二隊は三之江川西土手を固め、新町の応援可心得〟うんぬん、とある。

継之助には新町攻防が予想できたのだ。あるいは、その乱戦の中で死ぬおのれの姿も夢の中に浮かんでいたのかもしれない。

大川市左衛門はまず新保に進入した西軍の勢いを見て、これに敢然と決戦を挑んだ。その北川土堤では篠原隊が苦戦を強いられたのである。そこへ望月忠之丞の半隊と継之助の差し向けた半隊が駈けつけたので、味方は勇気をふるい起こした。返戦奮闘して、一時は押し返したが、そこここに炸裂する砲弾の破片で傷つく者が多く、硝煙の中に怒号と悲鳴が飛び交った。

西軍の一隊は、午後になると蔵王を迂回し残兵を糾合して屋台小路に突出して来た。窮鼠の捨身の戦法で、歯を剝き、目尻を吊り上げて、狂暴な突撃を繰り返してくる。昨夜逃げ遅れて、諸所に潜伏していた西兵らが味方の進撃を見て、狂喜して出て来たのだ。

混乱してくると隊と隊との戦いではなく、個人的な判断と行動で、卍巴となっての血戦だった。

東軍の敗色はもう彼我に明らかだった。後に書くが、米沢藩の態度が煮え切らなかったために、切り抜けられるところも、押し潰されて、敗軍にならざるを得なかったと、長岡側では、憾みに思う声が強い。内藤直記が銃卒隊士四十人ばかりを率いて駈けつけたが、これも一時の防戦にすぎなかった。この方面の東軍は後背に敵を受け、進退意の如くならず、無念を洩らしながら城中に退くしかなかったのだ。

河井継之助は大手口にいたが、三間市之進の隊を救うにはどうしても自身が出掛けなければと思った。長町から足軽町を通り抜けて新町へ出た。銃弾が飛び交い、そこらの軒や柱を削っている。継之助は雪除けの長廂の下から往来へ出た。とたんに、一弾が脚へ命中した。継之助はうっと呻いてよろめいた。小者が駈け寄って支えようとしたが間に合わず、膝を抱えるようにして倒れた。

城、再び陥つ

一

河井継之助は残念だったに違いない。激戦の中で白刃を交えて傷つくのは武士の本分である。五間梯子の旗をかざして自ら敵陣へ躍りこんだほどの漢が流れ弾で倒れるとは、口惜しさも一入だったに違いない。それも充分に用心して、長廂の軒下を歩いて来たのだ。飛び交う銃弾の雨の様子を見ながら往来に出たとたんだった。狙撃でないことは弾丸が射程距離を越して力を失い、地上に落ちる間際に、たまたま左脚に命中したことでもわかる。

越後の長岡は現在でも豪雪地帯で知られている。町家の構造も、積雪に耐えるうだつや、屋根から雪を落としても下を歩けるように、暖地と異なって、廂が長く突き出している。これを〝雁木造り〟と呼ぶのだが、継之助が軒下から出るのが、一瞬早いか遅いかすれば、傷は受けずに済んだかもしれない。そう考えれば、まことに運命的だ。

河井継之助の負傷の際のことは随従していた寅太という男の話がある。この男は明治になって外山脩造と改名して県庁に出仕、のち実業界に雄飛して日銀理事や大阪貯蓄銀行、浪速

銀行の頭取などをつとめて、大正五年まで生きていた。かれの回顧談には、継之助の生々しい姿が彷彿される。

この激戦の中で、少しも戦争に犯されていなかった継之助の人物の大きさが、はしなくも描かれているのが面白い。継之助は長岡城恢復の作戦をたてるために大崎彦助と目黒茂助その他を探りに入れておいたが、この者たちが捕まって投獄されていた。寅太に命じて、混乱の中から助け出させる手配までしていたのである。

――牢の前で、彦助は居るかと尋ねますと、居る々々、君が来て呉れたかと大層喜びました。夫から内外で力を協せて牢を壊さうとして居る所へ牢番が鍵を持って来て呉れましたから、無事に両人を連れ出すことが出来て、一と先づ其頃橡（栃）尾の郷宿をして居った加藤脩造の所へ参りました。話は尽きないが、何分悠長なことをして居る場合ではないから、河井さんが草生津方面へ出張になって居るといふことを聞いて、後を追って参りました。所が戦の真最中とはいひながら、弾丸雨注ともいふべき有様で、味方は畳を楯に防戦して居る仕末、中々うかとは退れぬ。やう〳〵のことで山田の南裏へ出て見ると、花輪馨之進さんが見えた。そこで河井さんは、と尋ねますと、今分捕した馬で大手御門の方へ駈けて行かれたといふことでした。然し味方の砲戦の具合がどうも可笑いから、如何かしたのですかと尋ねたのに、河井さんから、「敵が逃げさへすれば能いのだ」と言付ったから唯だ訳なく打って居るんだとのことでした……。

戦さになると、誰もが血迷って残虐になるというが、長岡城奪回に全身を打ちこんだ継之助にまだこういう人間的な温かさ、無意味な殺人をしたくないという気持が残っていたのは驚くべきことである。

この寅太の語りの調子でもわかるように、継之助をたたえるための作りごとでもなければ、作意は片鱗もない。ありのままを素朴に表現しているだけに、かえって、継之助の人物像が浮かび上がる。

――それから私も大手口へ参りますと、丁度河井さんが石垣に腰を掛けて休んでおいでしたが、私の参りましたのを見て、彦助などは如何したかと御尋ねでしたから、もう牢から出て加藤の所に休息して居りますと答へますと、それなら連れて来いとおっしゃりましたので引返して彦助を同道いたしますと、河井さんはさも愉快さうに、瓢箪に詰てある葡萄酒を酌みながら、暫くの間、私と彦助や茂助を相手に四方八方の話をしておいでしたが、是から新町口の三間を援けに行くからといって、一同を連れて御出掛になりました……。

前述したが、三間市之進正弘が自ら進んで新町口の守りを買って出たものの、苦戦に陥ったというので河井が救援にいったわけである。河井の負傷は、新町口から戻って来てのことだった。

――偖て、長町、足軽町を通り抜けて新町へ出ましたが、随分丸が激しく来るので、河井さんも左側の雁木から右側へ移らうとして往来へ御出になった処へ、思ひがけなく丸が飛んで来て、河井さんの左足の膝下に中った。二歩三歩ヨロ〳〵として迸る鮮血と一

緒にお仆れになりました……。

これ以上、詳しい目撃談は他にない。目のあたりに見るようである。

この〝左足の膝下〟というのは、のちに、河井が会津の義兄の栁野嘉兵衛に寄せた書簡にある〝私スネ之中骨を折られ〟うんぬんの個所と符合する。

左膝下の中スネ、といえば、弁慶の泣きどころという、もっとも痛いところだ。

やはり河井の遺談で、

「死ぬのは覚悟の上だが、こんな痛いことは覚悟していなかった」

というほど、激痛がつづくことになる。その激痛をさえ、冗談めかすところに継之助らしさが見える。

もっとも、このときは、周囲の者も吃驚した。傍に数人いたのに河井だけに流れ弾丸は当たったのだ。

――一同（夏目貞五郎、三堀忠一郎等）はスハ一大事と、驚いて早速雁木の裡へお連れ申し、夏目さんが其所持せる白木綿で取り敢へず傷口を確かりと包み、夫から井戸の釣瓶縄を切って来て、戸板で急拵への担架を造ってお載せ申したら、「頭が北に向けてある、南へ向けろ」と御叱りになりました。

こんな急な時に、頭が北向きになっているなどと気がつくのは、並では考えられないことだ。

それだけ、継之助の気が確かだったといえる。平常心を失わなかった当人に比べて周囲の

方が動顛した。

最初、河井の担架を担いだのは三堀と夏目だという。

二、三歩あるき出したとき、河井は誰にともなく、

「血が沢山出たから顔色が悪くなったろうな。だが、いのちには別状あるまい」

と、自分で早くも負傷の程度を判断している。こんなところも、普通人には出来ないところだ。かれは続けて、

「――然し足は役に立つまい」

と、言った。

中スネに命中したのだ。肝腎の骨が折れた以上、とても恢復はおぼつかない。

そう、自分で判断してから、継之助は寅太を傍近く呼んでこう言ったという。

「人が聞いても傷は軽いと言って置けよ」

総督としての立場をかえりみて、士気の衰えるのを案じたのである。寅太は、はい、と返事したつもりが声にならず、思わず落涙した。

二

漸く奪還した長岡城の再びの落城は、必ずしも河井継之助の負傷のせいばかりではない。奇襲によって一時は敗走した西軍は、夜明けとともに、呼応し合って、軍を再編成し、猛

攻をかけて来たのだった。

七時前に城岡堤東西より来襲した大軍との間で死闘が繰り返されること数時間に及んでいる。〝後第三時に至る〟と〈長岡藩戊辰戦争始末〉にある。

午後三時まで激戦が続き、長岡軍は新町口などの持場を捨てて城内に撤退した。

長岡城は度々叙述しているように、防戦には不向きである。金城鉄壁なら、当初から籠城戦の策を立てている。継之助がこの城を一先ず捨てて、敵の長岡に集結するのを待って一挙に叩く、という考えで撤退作戦を行なったのもその故だ。

天守閣を持たず、城の濠も狭く浅く、石垣が殆どなく、たたきの土堤では防戦するのは難しい。歯がみしながら長岡勢らは、負傷兵を抱え、この城中に撤退するしかなかったのだ。

草生津を猛攻したのは、長州の三好軍太郎、薩摩の中井弘三らを主力とした大軍である。かれらは一気に突破せんとしたものの、河井継之助が急を聞いて派遣した竹垣権六らが、草生津の南方の左近村の堤上から横撃したために、支え切れずして一時、敗走している。

このとき、なおも追撃しようとするのを、継之助は止めたのだが、新町口への盛り返しがこの直後だったのである。

新町口から撤退して城内に入った長岡勢はさらに追撃を受けて、神田口御門が集中砲火を浴びることになった。長岡勢は、もはや袋の鼠となって、全員討死にの覚悟を決めている。

「長岡城を枕に死ねるのは本望でねゃ」

「長岡武士の最期を薩長どもに見せてやるべし」

にわかに壁を築き、濠際に鉄砲を並べて、徹底抗戦の構えを見せた。全員が死を覚悟しての戦いには、大軍で襲いかかった薩長兵らも、容易に抜くことは出来なかった。

金城鉄壁の籠城戦でも、しかし限度がある。籠城の目的は、外部からの呼応により、寄手を挟み撃ちして戦局挽回を謀ることだった。

河井継之助の計画では、長岡勢が城下を奪ったあと、米沢勢が応援に駈けつけ、西軍の盛り返しを防ぐということになっていた。

米沢勢は福井口にあり、緊密な連携行動をとる手筈なのが、一向に連絡が来ず、長岡兵の間に忿懣の声があがりはじめていた。

最も危険な前線を突破した勢いのときには、連携相手の優柔不断さは気にならないが、生死の境いとなると、盟約を無視された怒りが出てくる。

「米沢は何をしているのじゃ」

「武士の約束はどうしたぞ、こっちの情勢がわからんわけではあるまいが」

頼みの綱はまず米沢勢だった。新町口で西兵を邀撃している間に、米沢勢が福井口を突破して、その西兵の背後を襲う。つまり挟撃の策であった。

長岡勢の砲兵隊長由良安兵衛が、その呼応の約束を促す狼煙を何度も挙げたのだが、遂に米沢勢の動きはなく、涙を呑んで新町口守場を捨てざるを得なかったのである。

長岡の大砲隊は、この由良を隊長として、旋条砲司令士杉生梅次郎以下十一人、山忽砲司令士森広之丞以下十二人、同上陶山左右平以下十二人、臼砲六人という同勢だった。

陣中日記には、この激戦の様子が仔細に描かれているが、如何に米沢勢の来援を待って苦慮したかが窺える。

——昼時分迄討（撃ち）合候得共、敵（西軍）更にひるまず、米藩にては（攻め）飽ぐみ、一端攻口を緩む。

長岡大砲隊、予備隊、村松忠次右衛門残られ、福井敗れざる時は長岡惣勢皆殺の旨大に気を揉み、頻りに米（沢）へ催促す。

佐川（官兵衛）氏福井へ来る。依て同敷色々催促候……。

福井口を米沢藩が攻め取らない以上は、長岡勢は全員玉砕せざるを得ないという意味である。佐川官兵衛は砲兵隊を率いていたが、米沢の攻撃ぶりに歯がゆい思いでやって来たのだ。米沢にくらべて会津兵は少ない。大砲も鉄砲も少ない。

（せめてわれらに米沢くらいの砲があれば）

と、佐川官兵衛はいつも口惜しい思いをしていたのである。

会津領を守るために、藩兵だけでは足りずに社寺の神官や僧、農民、町民など義勇兵が加わって、広大な領地の峠に配されている。銃砲はいくらあっても不足した。シュネルから購入したくらいではとても全員にまわらない。そのため会津城下の湯川の畔に、兵器廠を設け、エドワード・シュネルの兄、I・ヘンリー・シュネル（平松武兵衛）が招かれて指導に当たったりしていた。

こうした泥縄的な生産では、完璧な銃は望めない。西軍の方は密輸で儲けた財に飽かせ、

あるいは巧妙な手形のからくりなどで、長崎のグラバー商会その他から新式なものをどんどん購入して前線に輸送して来ているのだ。とても同等に戦えなかった。夜襲奇襲は一時的で、日がのぼれば、対等になる。それからは軍勢と兵器の多寡がものをいう。

当時の兵器、殊に銃砲の発達は、古今を通じもっとも短時間に進歩を遂げている。一日の違いが、単発から連発への移行という時代なのであった。東軍には連発銃は殆ど入らなかったが、西軍には所持者が多かった。それだけでも、一人で七人の違いがあった。この差は加速度的に大きく開いてゆくばかりなのである。

米沢藩の方では、三十匁和銃隊六十人の新たな精兵を揃えて、福島、大黒、大口辺の胸壁を攻めていた。また三十匁和銃二小隊は大黒の胸壁をひるませて、進発すること二度に及びながらも抜けなかった。さらに三度攻め、漸くにして抜いたのだが、すでに時遅かった。

河井継之助と米将との約束では、

（遅くも二十五日の正午ごろまでに）

本道の西軍を破り、長岡勢と合する、というにあったのである。

だが、西軍もまた必死だったのだ。三十匁和銃といえば旧式の火縄銃である。上杉謙信以来の〝車懸りの陣〟と称する鉄砲隊で有名とはいえ、ライフルに対抗しての火縄銃では、期待するほうが無理だったろう。それにしては、米沢兵もよくやったといえる。ともかく、時間はかかったが、決死的攻撃で長州を撃ち破って大黒の陣場へ突入しているのだ。

三

米沢勢は大黒へ突入するや、ただちに空家に放火して潜伏した敵を燻り出し、これを撃ちながら進撃している。大口、猿橋の砦も、こうして次々と破った。西兵の方も、大黒砦では、三人だけ生き残ってなお果敢に抵抗していたという。〝実に敵ながら豪勇可賞〟と、陣中日記にはしたためられている。

この大黒口の討死には百人あまり。そのほかのところでは四、五百人の死傷が出たというほど凄絶な攻防戦だった。

米沢藩は高見、下条まで進入して西軍の大砲を十五門ばかり分捕った。そのほか弾薬、戎服など、数え難いほどの分捕品があった。

――翌朝自分隊人足又次右衛門見附より大黒村通り長岡へ参る、大黒の敵の死骸積重って山の如し、実に古語に血は流れて川を成し骸は畳て如レ山と。眼前に見レ之、死傷幾許ぞや……。

と、その酸鼻凄惨な戦場を描写している。

米沢藩の戦記に見ると、右の陣中日記とはやや趣を異にしている。こういう齟齬はあらゆるところに見られるのは、立場が異なればやむを得ないことだが、

――二十五日暁、寅牌を過ぎ、始て狼烟を見る、因て各方諸軍奮て進撃す。

今日や敵軍亦大挙進撃を期する際たり、間髪を容れず、我軍先づ之を衝く、河井果して長岡城を復す、我兵亦力あり、敵軍衆多、能く防ぐ。

星を見て戦ひ、日既に傾きて未だ勝敗を決せず、是に於て千坂（太郎左衛門）更に小隊長相浦三郎右衛門、山崎惣次郎をして精鋭を率ゐ、且つ家兵の内死士（決死の士）、六七輩を募り、直ちに弾丸雨注を冒し福井、百束等の敵塁を衝かしむ、敵支ふる能はず、退て南北を保す……。

とある。

決死の勇者にしても、六、七人で奪えるような、生やさしい大黒口ではなかったはずだが、後日の叙述となると、こうなるのか。

戦争中の行動の正誤は、屢々水掛論に終わってしまうものだし、錯覚もあれば忘却もある。この両者の言い分を裁するものがある。〈河井継之助伝〉を草した今泉鐸次郎は、〈思出草〉を引用して、この事実を明白にしている。

――福井口は米沢藩の総督千坂太郎左衛門殿の坂口に候得共、正午迄に相成候ても勝敗無之候に付、右場所へ出張致し、模様柄承り合せ候処、午前既に八町（丁）沖の方より多人数進撃致し候得共、敵の防禦厳重にして進み兼、中途より引返し候に付、猶又出撃吃度打破り可申との事に有之、其中に会津藩佐川官兵衛殿も被参、共に千坂氏へ進撃の儀頻に申勧め候処、暮合に至り、米沢勢の進撃、大黒土手へ取付発砲いたし候に付、夫を見て佐川氏を福井村宿陣所へ伴ひ、無程打破り可申と先祝ひの盃取交せ居候処、果し

て敵兵敗走し、七軒町に火の手揚り、之にて長岡の通路開けて……。

とある。

米沢藩が当初、攻めあぐんだことは否定できないようである。

米沢の砲兵隊は、時に遅れ、すでに挟撃の機を失った以上は、長岡城の守備兵を救うために西軍陣地を襲撃する以外にないとして、新保村に進んだ。また田井に在った別の一隊は、宮下で起こった火焔を合図に田井山上に応答の狼煙を揚げ、疾駆して浦瀬の西軍へ攻めかかったのである。

この浦瀬には、長州をはじめ松代、加賀の軍勢が屯集していたが、急襲に驚いて、ただちに反撃、亀崎の塁に拠って応戦をはじめた。

会津の朱雀四番士中隊の二小隊が駈けつけたのは、このときだった。

鮎川兵馬は、濁煙にまぎれて抜刀して近づくと、

「斬り込め」

と、大喝して、真っ先に躍りこんだ。側面からのこの斬込みである。彼我の凄まじい銃撃であたり一面暗灰色の硝煙に蔽われていたのだ。兵馬は目の前の影が、松代兵か加賀兵かも考えなかった。京、伏見、江戸、白河と会津藩士を目の仇にして暴虐を続けて来た〝敵〟だ。多くの先輩が、友人が、この鬼畜どもに殺されたのだ。許せぬ敵であった。かれは返り血を雨のように浴びて斬りまくった。

兵馬の阿修羅のような姿に隊士たちもふるい立った。

「この野郎」

「馬鹿！」

「死ね、死ね！」

怒号が渦巻き血と泥がはねた。

多勢をたのむ西軍も、この命知らずの斬込みには、応戦するどころではなかった。多数の死傷者をだして、敗走に移った。

浦瀬から比礼方面に遁走している。

栃尾に在った会津兵は、長岡大砲隊、米沢兵、村松兵らと前夜から潜かに進撃して、土ヶ谷、荷頃等の敵塁を奇襲している。

こちらの方は山間だけに、潜入が容易で、発見されることがなかったのだ。かねて合図の栃尾山よりする一発の狼烟で、一斉に抜刀して吶喊した。

会津の精武流は肉を切らして骨を断つ、勇猛な一刀必殺の刀法である。白刃が風に躍るすすきのように迫って、西兵は動顚驚倒、鉄砲どころか刀槍も捨てて潰走している。〝一兵も交えず〟とある。一戦することもなく、である。前日までに東軍が陥れた栃尾方面の敵塁は二十三塁を数えているが、肝腎の長岡城に退いた河井継之助らと挟撃するには時機を失してしまったのだ。

会津藩の本隊はこの日早朝から砲兵隊、青龍三番士中隊、衝鋒隊、水戸の筧隊など大山一の胸壁より元与板の敵塁に進撃している。

西兵の抵抗は激しく、東軍は苦戦のすえ敗退するしかなかったが、砲兵隊軍目付杉浦佐伯、同渋谷源蔵、佐々木八次郎、日向栄三郎、神指大三郎らはなお、留まって追兵を防いで奮戦し、巳の下刻（午前十一時）を過ぎるころになって、漸く、兵を一の胸壁に収容することが出来た。

会津藩だけではないが、下越の東軍を驚愕させたのは、北越同盟の一たる新発田藩の裏切りだった。

同盟を破棄するや、突然、西軍一千余を手引きして松ヶ崎に上陸せしめたのである。かれらは、抵抗なく新発田城に入ったので、中越と下越の連絡が断たれることになり、米沢藩などは、帰国の道を絶たれたことになる。こうしたことが、米沢藩から出張の兵の士気に影響したことは疑えない。

会津兵は寡勢でこれを撃ち破るのは不可能だった。わずかに新潟、水原に拠って防戦するしかなかった。新手の西軍一千余は、水原及び保田に主力を向け、一手は新潟に進み、また赤谷方面の会津領に向かうあり、三日市より中条、黒川にも向けて進発するという有様で、長岡攻防戦の東軍は腹背に敵を受けることになってしまったのだ。

西軍急襲

一

北越における東軍の敗戦には、いくつかの要因が考えられるが、長岡兵の米沢兵に対する不審が、かなり大きな部分を占めていた。戦況が不利になると、味方同士で不信感と憎悪が生じて、分裂を招き、戦力を自ら弱めることになるのは、古今幾多の例に見ることが出来るが、この戦線でも、その例に洩れなかったようである。

長岡奪還作戦のもっとも重要なときに、同盟軍が遅延すれば、苦境に陥った怒りが不信と憎しみに変わるのはやむを得ないが、長岡側に言わせれば、当初から米沢藩へは、不審を抱いていたという。

その理由の一つは、米沢藩が北越出兵するに際し、

「以て長岡を救う」

と号して、恩を被せる態度が不快だったという。河井継之助はこう言ったという。

「米沢は今般、西軍参謀の世良修蔵を斬った。奥羽連合の盟を首唱した存意は、専ら天下の

為に義を唱え、君側の奸を攘んと欲してのことだ。豈、我藩を救うためなものか」

その言辞と真意が乖離していることに、不信感を持ったという。

さらに配軍が終わったところで、米沢藩の隊長某（名前は判明しない）が来て、相談を持ちかけた。

「我軍が守るところの壁側に、小路があります。敵地に通じるのではないかと思われるのですが、はっきりはわからない。万一のために、ここに番兵を置こうと思うのですが、総督の考えはどうでしょうか」

たしかに河井は総督だから、最後の決定権は持っているが、そんなことで一々指示していては、全体の戦略の指揮をするひまはない。半ば呆れ、半ば、怒った。

「これはしたり、彼の地はすでに貴軍に守備を任せてある。番兵を置く必要があると思ったら、置けばよい。その要なしと判断すれば置かなければよい。何も遠路を来て、左様なことをわしに聞くことはありますまい」

河井としては、それでも礼を失しないように言った。相手は好意からの援軍なのだ。

ところが、隊長某の返事はこうだった。

「当方は、越後ははじめての土地です、されば、地理に暗い。それゆえ、伺ったのです」

ここに至って、河井は、かっとなった。

「この地を守るのにその地理を知らぬとは、何を以て戦さをなさるつもりか」

「はて、左様に言われても、知らぬものは知らぬ。それゆえ、教えを乞いに来たのに、怒鳴

られるとは心外だ」

「呆れた方だ。知らねば、なぜ知ろうとつとめぬ。斥候を出して調べればよいではないか、それをせずに、一々、道すじまで問いに来るようでは戦さは出来まい」

「だから、この地に通じた貴殿に聞きに来たのだ、教えてくれればよいのだ」

あくまでも、かれには、河井の怒りが理解出来なかったらしい。こうして、大激論になってしまった。

この激発的なところが河井の短所でもある。このときは、すんでのところで、米沢藩が戦線を離脱しかねないところまでいった。以前には、河井は会津の猛将佐川官兵衛とも激論している。

ところが、このとき仲裁に入ったのが、その佐川だったのだから面白い。

〈追考昔誌〉に曰く、

——遂に大激論横生す、河井氏終に辞を放て曰く、米藩常に我藩の援を為すと声言すれども、奥羽越の連盟を結ぶ者は、元と是れ天下の悪を洗はんが為而已、豈我藩の故のみならんや。卿等の如きは、実に天下の憂に任ずること薄しと。勢殆んど変を醸さんとす。会将佐川官兵衛間に居て之を和解す。之を以て我と米とは甚だ相親しからず……。

こうした経緯があるので、米沢軍の違約を疑ったのだという。〝我軍尽く米人（米沢藩士）の為めに売らるゝかと疑ふ〟とあるから、その不信感の強さが窺われる。

この不信感は、同じ越後の新発田藩にも向けられていた。新発田の場合は、はじめから態

度が灰色で、西軍にも通じていたのだから、米沢の比ではない。北越長岡の悲劇を決定したのは新発田藩の裏切りである。

この作戦の齟齬があったにも拘わらず、長岡城奪還はたしかに輝かしく、見事な成功をおさめた。これは河井継之助の戦略と指揮の賜物であることはいうまでもない。だが、これが成功するや、凶弾がかれに命中したことは、あまりにも象徴的である。

ただに河井の運命を決するのみにあらず、長岡城の運命をも暗示したものだったからだ。だが、その時点で、東軍も領民も、それには気がつかない。上下ともに盃をあげて勝利を祝っていた。

敵城を陥落せしめた得意さではなく、故郷へ還ることの出来た喜びだった。

――市人等も追々帰り、又々昨夜小屋に放火せられしも、長岡人の安穏なるを賀し、祝声聞ゆ。追々諸方より分捕の品、御作事場へ運送、御作事場に充満す、本丸土蔵へ移す、是亦充満す、内御蔵御櫓へ運ぶ。打入の節、何程狼狽せしにや、大小懐中挙て数へ難し。軍事方不残御作事場前松の木の下へ打寄候。四つ時前、会（津）横山（主税）隊神田御門先繰込、御城大手内へ案内、人数百余人、佐川（官兵衛）、甘粕（備後）外米（沢）軍事方城内へ来り、勝利を賀す。酒肴あり、諸国人数追々繰出す。

と〈陣中日記〉が勝利のさまを伝えているが、このときすでに、西軍の反撃は、はじまっていたのである。それも新手の大部隊が新発田藩の手引きで、上陸して来ていたのだ。

河井継之助は、むろん長岡城を奪還したあとの方策を考えていた。

すなわち、一軍を以て関原を奪い、長駆柏崎を衝き、一軍は小千谷を破って持久戦に出る胸算だった。

（この傷さえなければ……）

河井は繃帯をさすって、無念の歯がみをした。

これまでの戦略と指揮がほとんど、かれ一人の胸中から出たものだけに、かれが倒れて動けないとなると、もはや絶望的になる。

早急に統率者を指名しようにも、一長一短、河井に代わる者はいなかった。加うるに主力たる長岡勢は一昼夜にわたる激戦に大いに疲労し、諸隊長はじめ死傷頗る多く、追撃の余力がなかった。傷の手当てをし、疲れを休めつつ、防衛線を張るだけで精一杯だったのだ。

二

「西軍千余、海路より松ヶ崎浜に上陸し、新潟及び水原方面を襲い、その勢い破竹の如し！」

との飛報が入ったのは、二十七日の午後である。

これより先、二十四日暁天、西軍二千余の軍勢が柏崎を出帆していた。六艘の軍艦は、摂津、丁卯、大鵬、千別、萬年、錫懐である。最初の寄港地は佐渡の小木。二十五日朝には、阿賀野川河口付近に到着した。

これを阻止する東軍はいなかった。西軍の海路上陸を考えなかったのではない。新発田藩の陰謀であった。

新手の西軍を手引きしたのは新発田藩である。

薩摩の吉井幸輔（友実）が長州の大村益次郎に宛てた書翰の中ではっきりと書いている。

――官軍北越松ヶ崎より致揚陸候処、新発田人数早速相応じ、官軍を迎へ候に付、無人境を行く如く沼垂迄占め候間、其地滞陣の新発田兵隊三百人、早々帰国候様御沙汰可被下候……。

新潟には東軍の二小隊が屯集していた。が、二千の大軍に仰天した。文字通り鎧袖一触、追い払われて遁走している。

この松ヶ崎では、西軍は思いがけぬ拾いものをしている。庄内藩の〝よほど身柄之者〟を捕えたのだ。〈北陸従軍日記〉では〝出羽庄内之大夫召捕、大によろしき捕者之由〟と喜んでいる。

喜ぶのも道理だ。その庄内武士は中老の石原内蔵右衛門。禄三千石というから十六万石の家中では筆頭である。

石原は、列藩同盟の重臣らと協議し、フランスから軍艦買入れの準備をしていた。

もとより一藩では賄いきれないので、会津や米沢などと合同で出しあう。会津・米沢・庄内が各一万両、酒田の本間家から四万両、そして新発田から二万両、しめて九万両である。軍艦だけでなく銃砲なども入手することになっていた。

石原内蔵右衛門は捕えられたとき、書類をかなり持っていた。これがかれの罪を決定的にした。

〝幕（府）より軍艦仏より買受之半代金相渡置くなどの引合書、加州へ使者を差遣し候様子などの書取も有之〟……庄内鶴岡の様子と同盟諸藩との連携の様子などがわかって西軍は小躍りした。

石原内蔵右衛門をただちに斬首したのは、冷血な処置である。これほどの大物を捕虜としたままにしておくのは、後で面倒になると思ったのか、一説に、新発田藩からの差し金だという。

新発田藩としては裏切りの証拠を少しでも隠したかったのだろうし、証言者は少ないほうがいいのだ。石原は恨みをのんで斬首の座に就いた。

石原内蔵右衛門の不幸は、死後も鞭打たれたことである。庄内藩は戦後、反逆の首謀者に石原を擬した。生きていたら斬罪にして天朝に詫びるとして、石原家を絶家とした。これが討死にだったら、たとえ朝敵であっても、藩内では名誉の死だ。少なくとも名誉は残る。その名誉まで奪われ、遺族らは石もて故郷を追われた。

このとき、石原と同道の庄内藩参謀も捕われている。

新発田藩は、藩内にも〝今後奥羽同盟軍に参加し粉骨出戦すべし〟と布告していた。その一方で西軍に通じていたのである。首鼠両端を持して、戦局を見ていた。優位のほうに付こうという狡さである。

隣藩の卑劣さを米沢藩の家老千坂太郎左衛門は見ぬいていた。かれは梶尾保助への手紙にこう書いている。

――新発田兵、ア、懸念々々、今更兵隊差出候とも欺妄之罪不可免、今日是迄に取調候ても、味方の気勢のゆるみ、皆彼のなすところ、金銀、米穀、弾薬を以て申訳候とも不可免、能く〳〵御勘考に候……。

これの日付は六月十三日だ。いみじくも、河井を慨歎させた米沢藩の士気の弛みの所以が窺える。

新発田藩の手引きと嚮導によって、新潟と水原に進んだ西軍は、最新の銃砲と精兵を擁して進撃した。新発田兵とともに赤谷方面に向かった一軍は、早くも会津国境いを目ざしていた。

新潟に向かった西軍は、二十六日には本所の対岸に進み、阿賀野川を隔てて東軍と砲戦を交えている。

薩摩と長州は高鍋藩兵を督励して阿賀野川の下流を渉り、海老ヶ瀬口よりその側面に迫った。

物量にものをいわせての砲撃に東軍は支うる能わず持場を捨てて新潟へ走った。薩長兵はこれを追撃して正午には沼垂に達した。

この援兵が戦局を一変したといってよい。長岡奇襲により敗退した当座の西軍は、〝恰も

驚雷に襲はれたるが如くに酷しく狼狽を極め、意気頓に阻喪し〟ていた。

長藩内でも〝人心恟々として措く所を知らず、中軍又議論紛々たり〟という有様だったのである。

薩摩出身の中井弘三などは仁和寺宮総督並びに西園寺、壬生両参謀に宛てて建白書を出したが、この要旨は、長岡城を再度奪還する難しさを説き、天皇の親征があれば平定するだろう、といっている。

それくらい、長岡を追い払われたときの衝撃は大きかったのだ。

だが実状は、東軍の方は疲労と負傷にあえいでいたのである。山県狂介は二十六日に馬を駈って妙見を発し、関原の本営に向かった。

関原に着して、馬を下りようとしたとき、東軍が信濃川を渡って進撃して来たとの報せを受けた。

「よし、わしが見てくる。各々は準備していろ」

と言って、馬を飛ばした。

信濃川畔に来てみると、大島の渡場付近で、数門の山砲とカノン砲を据えた味方が、対岸の東軍を砲撃していた。

東軍からの反撃は、きわめて弱く、渡河してくる様子はない。山県は不審を感じた。さっきの報告は誤りであったことを察したが、念のために、さらに下流に向かった。

およそ一里ばかりの川袋方面を偵察したが、やはり同じく東軍の進撃する気配はなかった。

「長岡を守って動かぬのか？」

これは反撃出来る、と山県はそのとき思ったという。

帰路、松代藩の渡辺驥に出逢った。驥は佐久間象山の弟子で、明治になって大審院検事長から貴族院議員になった男である。晩年には禅に深く入り、死期を予言し、自ら死後のことを書き残したほどであるが、当時は三十歳を一つ二つ過ぎたばかりで、元気にあふれている。かれもまた敵状視察に来たところだと言った。

「本営では長岡勢の来襲の噂に驚いて、柏崎へ遁走した者もいて、混乱しています」

「そうか、困った連中だ。わしもいま見て来たが、まったく異常はない。やつらの来襲なぞ、流言であろう。混乱を鎮める方が先だ」

と、促して、本営に帰った。

本営ではまだ騒いでいた。遁走する者が相次ぎ混乱をきたすほどだった。

「鎮まれ、敵兵は一兵も見えなかったぞ」と、山県は大音に叫んだ。「徒らに騒いでは、かえって敵に乗ぜられるぞ、流言に惑わされるな」

山県はのちに、当時の光景を回想して、

（笑止といへば笑止なるも、一敗将の士気、往々此の如きものあり、富士川に水禽の羽音に驚きて敗走せる平家の軍勢のみ笑ふべきに非ずと思ひたり）

といっている。

情勢の判断力を持たない兵卒のみではなかった。前述の参謀吉井幸輔も、退却を進言して

いる。

「弾薬も欠乏していることだし、急速に長岡城を恢復するのは困難だ。ここは一旦、兵を高田と三国峠との両方面に引き揚げ、援兵の来るのを待って、おもむろに進撃の策を講ずべきではないか」

というのがその意見だった。夜襲に狼狽して、銃器弾薬を遺棄して来ただけに、たしかに反撃は難しい。

だが、山県はこれをはねつけた。

「弾薬はわれらいささかの余裕がある。これを薩摩軍に供給する。いまが反撃の機会だ。この機をはずせば、かえって、長岡奪回は難しくなろう」

と、まくしたてた。

他の者はいずれも、この弁舌にのまれ、〝議は終に急撃に一決し〟たと山県は回顧している。かれの得意顔が目に浮かぶ。

ここで、一時、関原に退いた高田、松代、尾州、上田の諸藩兵に、取りあえず草生津の対岸本大島の塁を占領させて、反撃の準備にかかった。

翌二十七日の夜になって、海軍の参謀山田市之丞がやって来て、新潟や水原の戦勝を齎したので、本営では長岡へ急げ、という声が沸き上がった。

主力を以って、妙見方面から攻撃前進をはじめたのは二十九日暁天のことである。

沼垂を占領した徴兵十二番隊などと呼応しての進撃だった。こちらは午前三時に出発して

いる。

一番に小舟で信濃川を渡った右小隊が東軍の待ち伏せを喰った。対岸の蘆荻の中から砲撃を受けたのだ。だが、隊長の岡村喜兵衛が大声で号令をかけて銃撃した。左小隊一、二分隊は下の渡しから長州兵と渡河し、半隊三、四分隊に追いついて、銃撃戦に加わっている。薩摩の一小隊が来合わして、新潟に進んだ。

市中に入ると、米沢隊と会津隊が反撃して来て凄まじい戦いになったが、西軍が勝って陣屋を奪い、屯所に放火し、また長州兵と合流して追撃に移った。左小隊一、二分隊は長州兵と関屋に進んだが、三、四分隊は平島辺の東軍を撃って二手に分かれ、一手は高鍋兵と合して関屋に向かい、寄井村には、米沢兵若干と、会津の青龍二番士中隊がいた。青龍隊は壮年である。果敢な銃撃戦のあと斬り込みをうったが、急を聞いて長州兵が大挙来援したことで、逆転した。青龍隊と米沢兵は、七人の死屍を残して敗走している。

徴兵十二番隊の届書では〝七賊を斃し〟となっているが、高鍋藩の届書では〝米沢兵二十人許に出会、奮戦遂に六名を斃す〟と違っている。

混乱の中だから六人と七人の違いくらい止むを得ないかもしれない。ところが、こちらのほうが些か詳しく、米沢藩の討死にの姓名が二人判明している。一人は〝士官山口謹之助と申者之由〟とある。

〝数名を斃す、内一人隊長と見受候者、有之、軍曹新井陸之助指揮して打留候処、従賊其首を斬去候に付、死骸相改、米沢重臣色部長門之確証を得〟うんぬんとある。

色部長門は千坂に次ぐ米将だ。米沢藩は大変な損害を蒙ったといわねばならない。

二十九日の西軍の進撃は一斉に行なわれた。

濃霧の中を、長州・薩州・尾州・小浜・加賀・上田・高田・岩村田・富山の諸藩兵のほかに総督の宮の親兵も加わっていたから大部隊である。

本道にあった長岡藩の花輪隊は浄土川の堤に拠ってもっとも苦戦したが、隊長花輪彦左衛門以下、死傷続出した。

銃士に桜町安之丞という者がいた。傷ついて敗走する途中、水田の中で呻いている男に気がついた。白刃を杖にして身を起こそうとしていたが、重傷らしい。駈け寄って助け起こしたところが、父親の彦左衛門だったのである。

「もはや、わしは深傷を負うている。これでは助からぬ。お前の足手まといになるだけじゃ、ここで、介錯をいたせ」

と、頼んだ。安之丞はかぶりを振って、

「父上、そんなことは出来ませぬ。さ、肩につかまって下され」

「いや、倅。何を遅疑しているぞ、遅れれば父子もろとも、やつらの手にかかるだけだ。斬れ！　お前の手にかかれば、幸いじゃ、さ、早くやれ」

安之丞は逡巡した。

が、その間にも、飛弾が雨あられと来て、安之丞の肩を掠めた。彦左衛門は声を励ました。

「父の言葉に従わぬは不孝者ぞ、やれ。わしの首をやつらに渡すな」

この言葉に、安之丞は刀をとりなおした。涙を揮って父親を介錯したのである。血まみれの首を抱えて、よろめきつつ泥田の中を遁れた。

会津への道

一

七月二十九日昧爽、反撃を開始した西軍は先夜の雪辱を計るとともに、一気に長岡城を恢復するべく、下越上越の新手と呼応して、各方面から攻撃して来たのであった。彼我の人数からしても、長岡城の運命はこの日限りとなったことが誰にもわかった。河井継之助の負傷はあまりにも象徴的な出来事といえる。

この長岡攻めの様子は、高田藩や尾州藩の届書に詳しい。後者はことに、〝官軍追々繰込、廿五六小隊と相成、臨期二、三百人前、或は五、六百人前兵粮……官軍猶又繰込、三十五六小隊と相成……〟と軍勢が増員される様子が窺われる。〝廿九日長州干城隊一手東方山上より十日町の際へ押出、官軍東西三方より一時に進撃候処、賊徒敗走す、官軍勝利〟とある。

また小浜藩届書を見ると、〝廿九日早天、尚亦砲戦中討死等有之候処、長岡城進撃依御達、同所堡塁守衛隊川上を渡り、河原にて烈敷砲戦、草生津村へ進軍、益々砲戦仕候内、川下塁守衛の兵隊も渡り、合併追々進撃、遂に長岡大手口へ攻入候処、賊兵散乱、已に本丸は放火、

火勢盛に付、二之丸へ第三番乗入〃とある。

この本丸は放火、という文章では、誰が放火したか判然しない。高遠藩の届書を見ると、〃弊藩の戦士共先魁賊塞へ乗入候処、賊徒悉く敗走、直に及放火、一時に灰尽（燼）〃となっている。

これでは乱入した西軍が放火したようである。

だが、〈鬼頭少山自叙伝〉には、こういう記述がある。

――敵軍四面より圧迫し来る、親戚安田氏負傷して戦ふこと能はず、余に邂逅して、速に本陣に至り援兵を出さんことを請はしむ。走り至れば、兵士の差遣すべきなし。余意ふ。勢、已に此に至る。長岡終に守るべからざらん、三ノ丸の弾薬を敵の軍用に資せんは惜むべし、如かず余自ら火し去らんにはと、武器庫に向って馳す。兵学所の同僚三、四人至るに会し、協議して火薬を装置して火を点じ、躍りて壕を超ゆ。薬爆発（数百箇の銃丸と砲薬）して天を震はし、地を動かし、余勢傍近の廈屋を簸りて空に飄せり……。

と。

二十九日の早朝から激戦となったが、東軍の敗色が決定的となったのは、十時ごろだった。今泉隊と会津の横山主税の隊は長倉口を守っていた。長岡藩大隊長の山本帯刀は、河井継之助の負傷を知るや、後継総督の責任を感じて、各所の敗兵を糾合して要衝、喰違いに扼戦したが、すでに大勢は如何ともならなかった。小島、奥山の両隊も草生津に拠って防戦したが、西軍の大軍と猛攻の前には支えることが出来ず、数刻の激戦ののちに、遂に敗走するしかなかった。

一面は長倉口より栃尾方面に走り、一面は新町口より見附に走るに至った。

大島口、飯島村より一時に渡河して来た西軍の主力は、山県狂介に指揮された長州奇兵隊である。これに加州、上田、高田、薩州、小浜、岩村田、富山の藩に御親兵まで加わっていた。

草生津に火を放ち、間断ない銃撃と大砲の猛攻であった。山手よりは金倉山、村松より勢いに乗じて進み、また半蔵金の別隊は花笠峠、萱峠より下り、撃って来たのだ。

この様子を奇兵隊の報告書は〃三面急撃〃と書いている。

――城下悉く火となり、賊の弾薬迸炸し、猛声如雷、我兵打鼓吶喊、奮進長駆……。

その歓喜、昂奮ぶりがわかる。勝ちに乗じたときの兵士の勇躍昂揚の気持がそのまま、報告書にあらわれている。

西軍は長駆、筒場、十二潟、浦瀬、桂沢辺まで追撃している。薩兵らは槙下からも渡河し、与板からも兵を渡し、沿江の村家に放火し進撃を助けた、と書かれている。

福井、百束、寨所などの砦はすべて破られた上に、水門、大黒などの東軍の砲台は長州第十三番小隊に奪われている。さらに栃尾の守りも破られ、長沢、八十里越に敗退している。

この栃尾を奪ったのも十三番小隊だった。

この凄絶な死闘は、小雨の中で行なわれたが、特に早朝は〃烟霧朦朧、彼我弁じ難し〃と

いう状況であった。

再度の長岡城陥落の主因を、山県はこう回想している。

――想ふに爾来敵兵（東軍）の抗力痛く減退し、廿九日に至りて、予期の如く再び長岡を我手（西軍）に恢復し得たるは、海路進発の官軍、松ヶ崎附近に上陸して、敵の背面に出でたるが、その主因たるに相違なきも、河井の重傷に斃れたるもの、与かりて力ありといふべし。

河井継之助の戦傷は、流れ弾丸が不幸にも命中したにすぎないのだが、

（河井負傷！）

の叫びが、風のように東軍内を駈けめぐって士気を沮喪せしめることになったのは、疑いを容れない。敵である山県がそう判断するだけのものがあったのである。

その影響力がその後の戦況を左右したことについても、八月一日以後の交戦は、次のようであった、と書いている。

――敵に於ては首帥河井継之助を失ひたる為もあらん、新発田藩其の他の離叛して款を官軍に納れし為もあらん、人心沮喪しては、熟地に在りても亦思ふ儘に働きもならずと見え、次第々々に戦線を縮むばかりなり。

と。

それほどまでに存在の大きかった河井継之助の悲劇は、流れ弾丸が傷つけたのが左足の膝下（中スネ）だったことである。同じことでも左胸を貫通していたなら、かれの苦悩はきわめて少なく、死んで行けたのではなかろうか。

二

長岡抗戦軍の総督となったときから、河井継之助は死を覚悟していた。死ぬ覚悟でなければ一藩の運命を左右する采配はとれない。武士としての意地と北越譜代の藩という宿命的な立場が戦さに突入することになった以上、おのれの身を無事に切り抜けられるものではないことを充分に自覚していた。

だが、武士の死には、名誉がつきまとう。この対語として犬死にがある。死を名誉で飾るには、討死にしかない。戦場で刀を握って死ぬことである。継之助は、当初、中スネを砕かれたとき、再び立てないであろうことを直感し、口にもしている。だが、これが、そのままじりじりと死につながって行くとは思わなかった。そんなことは思いたくもない。たかが、脚の傷、という気持がある。そこに継之助の不幸があった。

戸板で急拵えの担架を作り、従者の寅太や松蔵などがそれへ載せると、

「頭が北へ向いているではないか、南へ向けろ」

と、叱ったのも、その故である。かれはさらに、出血が多いが生命に別状はなかろう、と言っている。また、軽傷だと人には言っておけ、とまで注意を与えたのも、たとえ脚は不自由になっても、みんなと共に戦うつもりだったのだ。

だが、もはや事態はそうしたことでは済まなくなっていた。
御引橋の脇の土蔵造りの建物が焼け残っていたので、河井は一時、そこへ運ばれた。
応急手当てがほどこされたが、思ったよりも傷は甚だしかった。中スネを少しでも外れていたなら、貫通しただけで済んだろうが、スネに命中したので、骨が砕けていた。
脚の重要な骨というだけではない。からだを支えるところだ。杖を突いても歩けるようになるかどうかわからない。
その上、出血が止まらなかった。仰向けになったまま、少しもからだを動かすことが出来ない。
この状態で、敗戦を窺っているのは、さぞ辛いことであったろう。
「様子はどうだ」
と、何度も、かれは言った。顔を僅かに動かして、寅太に偵察してくるように命じた。
「このままでは、やつらに城を奪われてしまうぞ、そうなっては、数倍の人数が要る」
敗戦の様子は誰もが口に出しかねた。だが、まさか勝っているとはいえない。夏目も三浦も、苦渋で継之助の眼を見ないようにしていた。
かれらの様子で、しかし継之助にも察しがつく。
「敗け戦さだな」
と、呟いた。
さすがに、誰も、そうだとはいえず、頷くことも出来ないでいた。張りついたように、顔

をこわばらせているだけだった。
継之助は微笑した。
まわりの緊張をときほぐすように、
「どうした、まだ葬式には早いぞ」
と言った。日ごろ冗談の好きな継之助であるが、さすがに、誰も笑えない。
夕方になって、土蔵の中が暗くなった。大崎彦助がどこからか折れた蠟燭を捜しに来て、立てた。
敵の砲弾が近くへ落ちてくるたびに、土蔵が揺れ、一穂の灯が消えそうになる。
継之助がここに臥せていると聞いて、次々と、諸隊がやって来たが、そのたびに、戦況がわかった。これは隠しようがなかった。敵が近づいて来た、とか、味方は大半城に引き揚げたとか、声高に饒舌って入ってくるのだ。寅太たちははらはらしている。
その切迫した形勢を知りながら、しかし、継之助はつとめて明るくふるまって見せるのだった。
「なんだ、おみしゃんらは。しっかりせい、びくびくしてもどうにもならんぞ、酒はないか酒は」
酒などこの砲弾の下では手に入らない。そうと知ると、ではおれが詩吟をやる、と言いだした。
寅太の回想録では、そのときの情景はこうだ。

――随分形勢も切迫したやうに聞えましたから、河井さんは、刀をよこせ、首だけは敵に渡さんでなァ、といって長刀を胸の上に横たへ、杜子美の紈袴不餓死、儒冠多誤身……といふ平素愛誦の詩をお吟じになったが、私の感じたのは、其吟声が如何にも朗々として、平常酒席などで興に乗じて詩吟なさる時と少しも変って居らぬ一事でした。常々、生死を度外に置くとか、生死岸頭に立って惑ふやうではいかぬ抔とおっしゃったが、此時には成る程と感心しました。

翌日、河井は四郎丸村の昌福寺に運ばれた。ここは長岡軍の軍病院にしていたところである。

三間市之進と川島億二郎の両軍事掛は、いたく傷を案じて、詳しい戦況は報告しないほうがよい、といって、概況しか話さなかったが、継之助は、皮膚感覚で、敗退の様子を案じていたように、敢えて深く問い詰めることをしなかった。

「ここでは、充分にお休みになれますまい、見附へお連れ申します」

と、三間が言ったときも、

「そうか、手間をかけるのう」

と、頷いただけだった。

見附に運ばれたが、しかし、ここも安全ではなかった。その日のうちに、さらに杉沢へ逃れ、文納、人面を経て、葎谷の村へ入った。

こうした敗走は、河井継之助にはたまらない苦しみだった。

「どこまで逃げるのだ。どうせ、立ち直って戦うことが出来ない以上、逃げてもしかたがない。ここでおれは戦うぞ、止めろ、止めろ」

と、担架の上で暴れた。

担架に付き添っていた根岸勝之助は、継之助の腕を抑えてなだめようとしたが、その手をふり払って、

「刀をよこせ。戦わせぬのなら、おれは、立派に死んでやる。刀をよこせ」

と怒鳴ったりした。

見附に移ったときから、継之助は自殺を考えだしたように見えたので、根岸は、担架の上では邪魔だろうからと刀を取り上げていたのだ。

継之助はもともと言いだしたら、あとへは引かない男だが、このときの決意は、ことに凄まじいものだったらしい。根岸はとても抑えきれないと思って、急遽、村松忠次右衛門を呼びにやった。

村松の手記によれば、八月二日に外葎谷の河井のところへやって来ている。

――其以前より河井氏看病の為め、姉聟の続にて根岸勝之助附居しに、折々発狂の如く、自殺可レ致旨被レ申、今日は是非当処に於て覚悟を極め候旨申張り、手分に及び兼候に付き、参り呉候様申来り候に付、立越え、種々温言を以て申候に、承知せりとは不レ被レ申候へ共、気分穏に相成……。

と、ある。

この参知したとは言わず、自殺をとりやめる返事をしない、というあたりが、如何にも継之助らしい。

きさまがそれほど止めるなら、一時、やめておくが……と不承々々の様子がわかる。

周囲の者たちは、継之助を会津へ運ぶつもりだった。

会津若松には、先に長岡城決戦となったとき落とした藩公父子とその一族が保護されている。

また、家臣の家族たちも、越後の領内で匿ってくれる知人もいないところでは、

「お殿様のお傍へ」

と、いって会津を目ざす者が多かった。

会津に入りさえすれば安心だという気持が老若男女の胸にあった。

会津藩と庄内藩が西軍の憎しみの対象ではあったが、長岡七万石から見れば、会津二十八万石は、安心の出来る大藩であり、大国であった。

ことに会津人の気質は、人情厚く、心が温かい。またその地勢も、越後のようにどこからでも、海陸、自由に攻め込めない。四囲を高い山で遮られた広大な盆地で、さながら、母の懐へ入るような安心感があった。

譜代の牧野家中にしてみれば、徳川御家門の会津松平家は、奥羽では唯一、徳川将軍家に近い。牧野氏は、幕府の老中をつとめた家柄である。その密接な関係も、長岡藩主従の気持の中にあった。

だが、河井継之助は、吉ヶ平に運ばれると、頑強に会津入りを拒んでいる。

「おれは会津へ行かぬぞ」

と、言い張った。

吉ヶ平も盆地であるが、ここは会津と北越をつなぐ八十里越の要衝にあたる。八十里越の入口ともいえる。

このほかに、六十里越もあるが、すでにそちらの方は、西軍が道を扼していると聞いて、一行は吉ヶ平経由を考えたのだ。この道は継之助たちばかりでなく、三々五々、老人や女子供が、竹の杖を突いたり、槍の折れたものを杖にして辿っていた。

継之助には担架で運ばれるというだけでも恥辱という意識がある。それに、敗戦の責任者という自覚が、かれを責め苛んでいたのだ。

吉ヶ平で一晩すごしたが、朝まで、継之助は眠らなかった。そして、しつこく、

「おれはここで死ぬ。会津へはいかぬ」

と、言い張った。

根岸と村松は、枕頭につきっきりで、こもごも、そんなかれを慰めた。

「そのように仰せなさらず、われらにお任せ下され、必ず、御無事に、会津へお連れいたします。会津若松には、名医がいると聞いております。お怪我の方も必ずや、治癒いたすでござりましょう」

「何を気休めをいうか。中スネが折れたのだぞ、継ぎ木をするようにはいかぬ。脚の折れた

男が、総督として戦さが出来るものか」
「かの御仁は、松本良順とか申し、天下の名医という評判でございますから」
「良順殿なら知っておる」
「それは好都合でございます」
「何が好都合だ。名医ではあろうが、脚を継いだという話は聞かぬぞ」
駄々っ子のような継之助の説得が大変だった。
「会津へ行けば……」
という期待が、将士以下、家族たちにもある。そのことが、継之助には、歯痒い思いだった。
会津鶴ヶ城は、長州にとっては最後の怨みをぶっつけるところだ。あの猛威を以って、完膚なきまでに叩き潰しにかかるだろう。それは長岡城の比ではない。
実際、長岡藩のように恩讐のない城とは違うのだ。それでも、あの敗戦の惨禍が領民たちの上にのしかかっている。
これが会津鶴ヶ城となればどんなひどい目にあうか。継之助には見通しがついている。
おそらく、会津藩主従と長岡その他の人々との区別もつかぬほどの仕打ちを受けるにちがいなかった。
そう思うかれの気持が、人々に通じない歯痒さなのだ。
敗戦の痛みが冷静な判断力を失ったように、人々は、会津を目ざしている。根岸や村松らがそれを疑わないのが不思議だった。

「会津へ行ったとて何のよいことがあるものか、おれは行かない、ここへ置いてゆけ」
継之助は断乎としてかれらの忠告を斥けたのだ。
置いてゆけといわれても、家老であり総督である継之助を置き去りには出来ない。
ともかく、かれらはかわるがわる、口がくたびれ、声が出なくなろうとも説得するしかなかった。
継之助が承知しなかったにも拘わらず、従僕の松蔵は、黙々として、山駕籠を工夫していた。
担架では、急坂をのぼることが難しい。坂の角度もさまざまであるし、道幅も一定していない。
八十里越は街道ではない。国境いの間道である。越後と会津を結んでいるが、南会津の只見川沿いの小路も、会津若松に通じているというだけで、整備はされていない。重傷の継之助を運ぶには、尋常の山駕籠では無理だった。
「松蔵、おみしゃんはそんなものを作ってどうする。おれは会津には行かん、無駄なことをしやんなや」
継之助はやめさせようとしたが、松蔵は聞き入れようとはせず、錆び鋸をひいたり、板を集めて箱様のものをこしらえたりしていた。
また根岸勝之助は、村松と相談して、継之助が会津入りを肯じない以上、藩公からの上意

で動かすしかないと考え、会津若松に使者を走らせることにした。

一方、継之助の行方を捜索していた西軍は継之助の妻女を捕えれば判明するに違いないとして、知辺を虱つぶしに当たりはじめていた。

夫人すが子と母堂貞子は数人の従者に守られて古志郡の村松村に隠れていたが、危険が迫って来たので、夜陰のうちに濁沢村に遁れた。濁沢村は、桑名藩の預り地なので、西軍の目を眩ませられようと思ってのことである。だが、八月に入ると、この村にも捜索の手は及んで来た。

八十里越

一

長岡城を攻略した長州の山県狂介らから見れば、賊の首魁は河井継之助と山本帯刀であった。藩公牧野父子はすでに五月の落城の際、会津へ逃れ去っていたことはわかっている。河井と山本を捕えて誅戮することが、この北越戦争の勝利を明確にすることであった。そのためにも負傷した継之助が何処に潜伏しているかを捜ることだった。継之助の家族を捜し出せばわかるに違いないと思われた。

夫人のすが子と、母堂の貞子は、数人の従者に守られて村々を転々しているという情報が入った。最初の潜伏地は古志郡の村松村であった。西軍がその農家を突き止めて踏みこんだときは、すでに藻抜けの殻であった。農家の者も姿を消していた。後難を恐れたのである。

すが子と貞子が潜行した先は、同じ郡内ではあるが、桑名藩の預り地になっている二十村の濁沢であった。

ここでは、農家は目立つので、村の小高い丘の上にある阿弥陀寺に隠れることになった。

住職の神田月泉が義気に富んだ人物で、心を尽くして庇護してくれたのである。

月泉ばかりでなく、村人たちも、領分は違っても河井継之助の家族と聞いて、

「お気の毒なことじゃの」

と、親切にしてくれた、と貞子はのちに語っている。

「――殊に月泉和尚は、何くれとなく気をつこうて下されましたが、官軍方の捜索はそれはもう、草の根を分け、地を掘るばかりの執拗さでございまして、とうとう阿弥陀寺にものぼってくるという話を耳にいたしました。こうなっては、足弱のわたくしどものこと、どうにも逃げおおせるものでありませぬ。そこで月泉どのは、これより官軍の屯所へ自首するゆえ、お覚悟のほどを頼み申す、と事理をわけてのことでございました。私どもも、これまで匿って下された恩誼もあり、継之助の行方も知れねば、これまでと諦めたことでございました……」

月泉は自首して出たが、河井の家族は罪なきものゆえ、かまえて苛酷な取り扱いをされぬようにと、身を賭して西軍の隊長に頼んだという。

当時の勝利に酔った西軍の隊長を説得するのは容易ではなかったろう。岩村精一郎の横暴驕慢なふるまいを見ても、推測に難くない。

逮捕の状況は貞子自身の言葉をかりると、優遇とは程遠かったことがわかる。

「――それから一族は忽ち官軍の手に引渡され、青竹の唐丸籠に乗せられ、刑場へ引かるる罪人の如き惨忍なる苦痛を受けつつ、先ず小千谷に引かれて行き、それから段々、長途高田

へ護送されて拘禁されました。継之助の親であり、妻であるが故に、官軍から御覧になったら、謀叛人の家族として斯る虐待を受くるも無理からぬことかもしれぬが、婦人共までかかる苦しみを受くるかと思えば、実に落涙を禁じ得なかった……」

と。

妻と母がそうした目にあっていたことは、継之助の耳にはむろんまだ入っていない。

継之助は、そのころ、八十里越の要衝・吉ヶ平で会津入りを拒んで自殺することばかり考えていたのだ。

牧野藩七万石の家老の家族となれば一般の下士とはわけが違う。身分、階級制度の重んじられた時代では、たとえば馬に乗ったり駕籠に乗ることにも制限があるほどだ。たとえ入獄しても、一般牢と揚り屋との違いもある。また責任が身分につきまとうのはいうまでもない。

母の貞子は男勝りの気丈さで、継之助を育てるのにも頗る厳格なものがあり、腕白の少年継之助も、この母上を恐れていたという。

その家に十六歳で嫁した嫁のすが子はよく出来た女性だった。

同じ藩士の棚野嘉兵衛の妹で性質は温和で背が高く面長の美人だったが、〝高慢ぶるとか、しゃれるとかいふ風は少しもなかりしと〟とある。継之助も短気者で、妹の牧野安子の回顧談では、かっとなると、すぐに叱りつけたりしたというし、貞子は口うるさい姑だったから、嫁としては大変な苦労があったはずだ。すべて耐えて、河井家のきりもりをして貞節であり〝婦人の通有性ともいふべき愚痴の風は更になかりしが如し〟と、証

言がある。

この証言をしたのは親類の森源三という、翌年、釈放後に夫人たちが身を寄せたところだ。後の話になるが、この源三の三男茂樹が河井家を継いでいる。

継之助が駄々をこねている間に、越後路の戦さは絶望的な状況になっていた。

長岡城の陥落と継之助の負傷と敗走が、越後戦争の敗北を象徴しているといってよかった。長岡城が西軍の手中に帰したのは七月二十九日だが、新発田藩の離反も東軍の士気を喪わせることになったとみえ、その後の戦況は西軍の一方的なものになっている。

河井と東軍の不運は、この戦さの勝敗の分かれ目が実に戦力の僅差にあったことだ。

西軍の方でもいったん奪った長岡城を取り返されて、再度の奪取には必ずしも自信がなかったことは、山県狂介の回想録の行間から読みとることが出来る。

山県は、なあにすぐに恢復するから、と豪語して京への報告を取り止めさせたと書いているが、西軍各藩の諸将は悲観的だったのだ。

薩摩と長州がおのおの肩をそびやかせて、味方同士で、冷たい闘いが行なわれていた。

長岡城が東軍の手に落ちた日、柏崎に上陸した薩摩の参謀吉井幸輔がやって来た。城攻めの配軍の打ち合わせのためだったが、そこへ、息せき切って、入って来た者がいる。

長州振武隊の隊長竹本多門だった。

「山県さん、ここにおいでしたか、早く報告しようと思って、あちこち探したんだが」

傍に人がいることなど、まるきり眼中にない竹本だった。短気で思慮の浅い男だった。長

州奇兵隊上がりにはこの種の輩が多い。

「昨日のことは、実に遺憾千万だ。これというのも、薩摩のやつが、阿呆だからだ」

聞いていた吉井が、眉をひそめて、竹本を見た。が、竹本は気がつかない。口から泡を飛ばさんばかりだった。

「おれは長岡が賊の手に取り返されたと聞いて、森立峠より下りて来て一戦をこころみたが、賊軍は思ったより人数は少ない。ちょうど、十二潟から薩兵がやって来たので呼応して賊兵を鏖殺しにしようと思ってな、本陣に出兵を頼んだのだ。ところが、あいつら、なんのかんのとごたくを吐かして、共同作戦がとんとまとまらぬ。それでとうとう退かざるを得なかったのだ」

一気に早口にまくしたてた。山県は制して、傍にいるのが、その薩摩の参謀だと知らせようと思ったが、まるで、口をはさむ隙がない。

「もしもおれの作戦通りにやっていたら、城は昨日のうちに陥ちている。わからず屋の薩摩芋のせいで、この戦さは長引くぞ、それもじゃ、おれの申し込みを断ったのは、参謀の吉井というやつらしい」

その吉井本人が目の前にいるのに気がつかない。山県は途中から匙をなげた。

竹本はひとりでまくしたてると、それでも、いくらか気が済んだか、ようやく、山県に口をひらかせた。しかし、吉井の名が出てしまった以上、いまさら、紹介するわけにもいかない。

「貴公の気持はわからんではないが、薩摩には薩摩の考えがあってのことじゃろう、責任ある者には、自ずから別に意見があるわけだ。一隊長の身を以って、みだりに非難するのはどうか」

竹本は何か言いたそうだったが、初めの昂奮もいくらかさめていたので、仏頂面をしたまま出ていった。

「驚きましたな」

と、吉井幸輔はこわばった笑顔を見せていった。

「威勢がいい、何という人か」

「振武隊の隊長で竹本某だ。彼奴の失言は、わしから詫びたい、短気な男なのでどうも」

「いや、わしの方も、弾薬の不足を説明して納得して貰えばよかったのだが。そうですか、あの仁か」

竹本多門はその短気が禍したかどうか、翌二十七日の十日町の戦いで負傷し、それがもとになって、のちに死んでいる。

二

長岡再度の落城が、東軍各藩の士気を沮喪させたことは、八月一日以降の戦況にはっきりとあらわれている。

三日には三根山藩（一万一千石、長岡藩牧野氏と同族）が降伏し、四日には村松藩が開城降伏。

長州奇兵隊の報告書を見ると、進攻の速さが、その間の消息を物語っている。

八月朔日の未明、長州報国隊、徴兵、薩州砲兵隊が本道より赤坂を攻撃し、一方、明石、芸州兵が山間の間道を経て進み、長州五番小隊、新発田一小隊が山上より赤坂の背後に廻った。

辰ノ刻（午前八時）前、赤坂の砲台七ヶ所を破り、草水村に放火し、砲塁を築いて諸藩の兵がこれを守った。

東軍は石間に拠って抗したが、長岡口の西軍が敗走する東軍を追撃して見附に至り、今町からさらに大面の塁まで奪った。

こうなると、連携の防衛陣も寸断されて、連絡はつかなくなり、敗色はもはや覆せなかった。与板口でも東軍は支えきれずに走り、これを追って長州六番小隊と諸藩兵が追って金ヶ崎、地蔵堂に入った。

また長州二番小隊と諸藩兵は出雲崎口より進んで日ノ浦、木芽峠の塁を破り、栃尾口、徒谷、大納、長沢を次々と奪った。

翌二日の戦闘は五十嵐川を隔てて、大崎を死守せんとする東軍と砲戦になった。薩兵の苦戦を見て長州一番小隊が救援に赴いたが、広い川原には屏翳なく、大いに苦戦となった。

が、日没とともに東軍は防戦をやめて退き、見附を守っていた新発田兵六小隊が降伏した

のは思いがけないことだった。

すでに新発田藩の大勢は寝返りを打っている。これをいさぎよしとしない連中が、東軍と行動をともにしていたのである。だが、かれらは、自分たちだけが浮き上がった存在になったことを馬鹿らしく感じるようになったのかもしれなかった。

三日には、長州兵は五十嵐川を渡河して三条に入り、地蔵堂の六番小隊も来会した。

四日の戦いは加茂新田で、東軍は必死になって防いだが、日暮れまでは保てなかった。長州軍が加茂に入ったのは翌五日のことだが、この日には、村松藩が降伏したのである。

むろん、抵抗は激しかった。新発田口の西軍が五泉（沼津藩の飛地）に入ると、前から内通していた五泉の兵二小隊がこれを迎えて先鋒となり、ただちに村松城を攻めている。

本道市口よりは五泉兵を長州五番小隊、左の裏手よりは五泉兵と薩州一小隊、山の後口よりは報国一小隊、薩州一小隊が進んで戦い、午後になってようやく村松城は陥ちた。

城といっても三万石で陣屋のようなものだ。長州兵はこれに火を放って、五泉に引き揚げている。

村松藩もまた新発田藩と同じく、西軍に媚を売る裏切り者が百七十とも二百ともいい、これは藩公堀直賀の義叔父に当たる貞次郎直弘を擁して叛旗を翻す時期を狙っていたが、西軍の進攻とともに、城を出て蛭野村滝谷の慈光寺に立てこもった。

この一味の近藤安五郎というのが、ひそかに長岡に入って前記の吉井幸輔に会って、帰順を申し出て、内応先陣を申し出ている。

直弘は当時、わずか八歳。西も東もわからぬ。利用されただけである。文字通りの傀儡だ。こうなってはしかし、東軍に同盟した主従は、城を捨て、難を避けるしかなかった。家老の堀右衛門三郎が指揮をとって、兵四小隊をもって、藩公を護り、会津に走った。

この日、八十里越口まで迫った西軍は、吉ヶ平へ向かって進んでいた。

河井継之助を守っていた人々は、もはや猶予は出来なかった。むずかる継之助をなだめて、忠僕松蔵の考案した駕籠に乗せて八十里越の難所へ向かって出発した。

継之助が絶望のあまり自殺したがるのを、根岸勝之助とともになだめるのに苦労した村松忠次右衛門は供を諦めて会津へ出発した。それきり継之助とは会うことが出来なかったのである。

八十里越は、越後から会津へ抜ける全長八里（約三十二キロ）に及ぶ坂道である。一里を十里に数えるのも、急坂や崖っぷちで難所が続くからであった。

足弱の老人や女子供は、朝暗いうちに吉ヶ平を出ても南会津の只見村の番所へ着くまでには、夜に入ってしまう。八里といえば、平坦地の街道では常人の一日の行程になっている。だが、山道では容易ではない。したがって、越後から会津へ入るには、阿賀野川流域を辿る西会津の越後街道をゆくのが普通であった。

しかし、新発田藩が裏切ったいま、この街道へは廻れなかった。

継之助は重傷だった。左脚の中スネを砕かれていて、杖を突いても立つことが出来ない有様だった。

この重体を担いで八十里越を抜けるのは、本人もだが供の者も大変だった。忠僕の松蔵は苦心して、継之助のために駕籠に工夫を凝らした。

松蔵は、のちにこう語っている。

「――駕籠に就いては色々と考へましたが、足をお動かしになっては能くあるまいと思ひまして、繃帯などを取替ふる時にも足を動かしにならなくとも済むやうに、底の板の抜き差が自由に出来る箱に拵へ、敷ておいでになる敷物は、分捕のケットが沢山ありましたので、それを何枚も重ねて、傷をお受になった片足の当る所と両便をなさる所だけはソックリ切り取り、足をお動かしにならなくとも何のご不自由もないやうにし、全体は恰ど辻駕籠風に拵へました……」

八十里の最も高い場所は鞍掛峠である。標高およそ千メートル。陰暦八月初旬の越後の山はすでに秋だった。峠道を吹く風は涼しすぎるほどだったが、継之助の額には、拭っても拭っても冷たい汗が吹き出た。

傷は化膿している。激痛が続いていたが、継之助は弱音を吐かなかった。

化膿して臭気を発するために、やたらと蠅が飛んで来たが、根岸勝之助はこれを追い払うのに、団扇では間に合わず、竹に襤をつけて蠅をとった。

継之助は苦痛で顔を歪めながら、

「根岸は蠅捕りの名人だな、皆伝を取って居るのであろう」

と、笑った。

八月一日付で会津城下に在る義兄の棚野嘉兵衛に宛てた継之助の手紙が残っている。長文で筆の勢いも衰えていない。

その中で、すでにかれは、

創傷重くして険山を越え難し。

と、いっている。会津への脱出逃亡を自ら諦めていたのである。

――私は最早御奉公仕候て御用を可為道も絶、苦痛之余り、迚も嶮山を越候訳には不参、脇にては色々申候得共、死生は私には不仕候間……。

八十里越に二日を要したのは、継之助のからだを慮って、休息を多くとったからである。四日に吉ヶ平を発足し、同夜山中に一泊、翌五日に会津領只見村に着いた。

いくらゆっくり歩いても、狭い道の急坂などでは揺れが烈しく、創傷はますます重くなっていた。誰の眼にも継之助のからだが弱っていることがわかった。

「しばらく、休養したうえで、会津若松へ参ることにいたしましょう」

根岸は、この辺りで治療に適当な家を捜させることにした。幸いこの先の塩沢村に、矢沢宗益という村医者がいるという。

しかし、隣村の塩沢村に至るのに、一行は更に旬日を要している。

継之助が矢沢宅に運びこまれたとき、目撃した老婆が明治の末に語ったところでは、戸板の上に厚く蒲団を敷き、その上に臥して居り、長岡藩医吉見と阿部のほかに二名の弟子がつ

いていた。さらに、武士が数十人この家と近傍に寝起きして恢復を待った。

——河井氏は負傷重かりしと見え、身体更に自由ならず、只寝られたるままなりし、最も感じたるは、臨終まで言語爽やかに、精神変らず、一度もうめきを聞きたることなし。と。

だが、実際には苦痛が烈しかったらしい。

この地に滞留することになった前後、継之助は、側近に、

「初めより死ぬことは覚悟していたが、こんなに痛いことは覚悟していなかった」

と、苦笑して洩らしている。

松蔵の考案した駕籠と戸板との違いが気になるが、波多野伝三郎の母堂の話でも、戸板で運ばれたことになっている。

——八十里越附近でありましたが、御家老の河井様が負傷なさったといふて、戸板に乗せて、白い晒木綿に足腰を包んで担いで行くのを見ました。其時武士が三人で戸板の側に立って、『私共三人だけでも残って居る内は踏み留まって戦ひます。皆一しょに城を枕にして死にます』河井様は『何分頼みます』などといふ問答を聞きました……。

とある。

松蔵の工夫した駕籠と戸板と、場所によって、交互に用いたのではなかろうか。

継之助がこの八十里越で会津入りを嫌がったのは、武士としての醜い姿を気にしたことと、同じ死ぬなら、越後で死にたいという気持のあらわれであろう。

こうした際でも、継之助の磊落な気性は、おのれを自嘲して一句を詠んでいる。

八十里
　こしぬけ武士の
　　越す峠

こしぬけ、とは、越路から脱けることと、足腰のたたない自分を諷したのだ。

継之助の病状は逐一、会津若松の藩公父子へ報告されていた。会津領の只見に入ったことを知ると、老公雪堂（忠恭）は、幕府の御典医松本良順に診療を依頼した。

良順は快諾して即日出発した。只見川沿いの道を、只見村に向かって馬を走らした。八月九日のことである。

継之助の死

一

長岡城が最初陥ちたとき、藩主牧野父子は会津へ逃れた。老公雪堂（忠恭）と養子の当主忠訓である。会津若松では容保以下、厚遇して、その宿舎に建福寺を提供している。継之助は長岡城を恢復すると、槙吉之丞を報告に会津へ走らせている。槙の報告を受けた雪堂父子は大いに喜び、長岡へ戻る日近し、と欣喜した。雪堂はただちに感状をしたためて槙に届けさせた。

だが、槙は継之助に会えなかった。事態は急変したからである。槙が津川口に向かったときは、すでに継之助は負傷し、長岡は再び陥落を目前にしていたのである。西軍別働隊の意外な進攻ぶりに狼狽した槙は、途中から若松に引き返している。すでに道を塞がれたと聞いたからだ。

継之助の負傷と再びの落城の悲報は、すでに雪堂のもとに届いていた。入れ違いになるほど、この間の転変は早い。雪堂は、引き返して来た槙を召して言った。

「河井は重傷と聞く、まことに心許ない。一刻も早く若松に入って充分な治療を受けねばなるまいに、会津へ入るのは面目ないと申して一同の奨めも聞かぬそうじゃ。そのほう、河井のもとに参って、詳しく余の意を伝えよ。我を張らずに会津入りし、若松へ参れと。名医もいることゆえ、速やかに治療すれば本復も早いであろうと」

槙は翌八月五日、倉皇と若松を発った。六十里越のほうは、すでに西軍が逆に進んで来ている。険岨な八十里越だけがいまは越後との唯一の交通路といえた。馬を飛ばした槙が只見村まで来たとき、若松に向かっていた牧野市右衛門と出会った。只見川沿いの一本道である。

槙は河井の病状を聞いた。重傷だとは知っていたが、その後の経過が気がかりだったのだ。

「このままでは難しい」

と、市右衛門は言った。

「何せ、村医者だからのう、やはりしかるべき医者に診て貰わんことにはの。おぬしは、このまま若松に引き返してくれぬか、名医を遣わして頂くように御老公にお願いしてくれい」

「承知した。老公からの直書がここにある。これを河井どのに渡して貰いたい。何よりの励ましになるだろう」

槙は寸刻を惜しんで馬首をかえした。老公の直書は河井個人に宛てたものではない。河井総督をはじめ、長岡藩の諸将への激励書である。継之助がまず披見し諸将に見せるなり、写しを廻すであろうことを予測しての内容であった。これに別紙が副えられていたが、これも

〝組頭初め頭々……〟とあって、誠忠感じ入るという褒状になっている。

継之助には、老公の直書を披く勇気がなかった。前述したように、かれは建福寺に扈従している義兄棚野嘉兵衛に宛てて長文の親書を寄せ、その中で〝私は最早御奉公仕候て御用を可為道も絶〟といい、追記にも曾根十蔵によってもたらされた老公の直書を〝先大切に預置候様申聞、終に拝見不仕恐入候〟と書いている。これは八月朔日付だから、槙の持参したものとは違うが、継之助の心情は日を追うごとに落ちこんでいっているので、おそらく、二度目の直書も、とうとう披見しなかったものと思われる。因に〈扈従日記〉を見ると、会津若松に長岡城を再度失ったとの悲報が齎されたのは八月三日のことだ。

〝当御藩之仁（注・会津藩士）、長岡より早打にて着、長岡又々賊江取戻され候よし〟と書かれている。

その前日の分を見ると、三春藩が降伏したこと、二本松藩の藩主が米沢へ落ちたこと、その家中家内は猪苗代へ逃れたことなどが記されているから、敗色を痛感することが深かったに違いない。

河井継之助は長岡藩筆頭家老であるだけでなく越後における東軍の総督でもある。藩公に代わる全権を持たされていたのだ。その負傷は長岡藩の運命を決するものであった。

如何なる手段をもってしても恢復につとめなければならなかった。

会津若松在住の松本良順に白羽の矢が立てられたのはこの故である。

松本良順の名は夙に高かった。幕府の御典医であり、将軍家はじめ幕閣の要人たちの診療

に当たってきていて、名医の評判が高かった。

佐倉藩医の家に生まれ、のちに幕府の官医松本良甫の養子になったが、若年より漢洋の医学を修めてその俊才を認められ、安政四年（一八五七）、抜擢されて医学練習頭取として長崎に赴いた。単なる遊学ではない。病院のみならず学校を創立し、オランダ軍医ポンペに就いて医学七科を学んだ。江戸へ帰った後、十四代将軍家茂の侍医に任じられ法眼に叙され和泉橋に医学校を総理したが、彰義隊の上野壊滅後、東奔して会津へ来ていたのである。

長岡藩老公からの依頼と、会津藩重役からの口添えもあって良順は只見村へ急ぐことになるのだが、前記の〈扈従日記〉を詳細に読むと、継之助の診療に出発することになっていたのを、取りやめ、再び、出発となっている。

出発を一たんとりやめた日時は八月五日だから、このときは、只見ではなく、八十里越を逆に越えて吉ヶ平の継之助のところへ行くのが当初の予定だったらしい。

継之助が吉ヶ平を出発したのが、その前日の四日だから、連絡の時間を考察すると、継之助が会津入りをやむなく承知したことで、あらためて良順は只見村へ九日に出発することになったのだ。

――松本良順様明日（注・六日）御出立之様相願図りの処、急に継之助殿此方へ御呼寄之図りに相成り、松本様御出立は御断りに相成候。良圭（小出）罷越す。継之助殿御呼寄に付御直書御下げ、槙吉之丞早打にて急に出立致す。御用状遣。

と、なっている。

九日になって槙吉之丞が戻って来て、〝迚も継之助殿御出有之間敷申来〟ということで、それでは、ということで、またまた良順に出立を頼むということになった。

継之助が〝腰抜け武士の越す峠〟と自嘲しながらともかく、只見村に着いたのは五日だから、右の〝御出有之間敷〟という文章は、会津入りのことではなく、若松城下まで辿り着くのは難しい重態、という意味であろうか。

松本良順に頼んだり取り消したり、又々頼んだりと、牧野の重役たちの恐懼周章ぶりが行間に見えるが、良順はこうしたことにもこころよく応じてくれたらしい。

九日には疋田水右衛門が使者となって丁重に頼んだ。万端相談して急遽出発ということに決まった。吉田兵右衛門が引き返して、道案内をして只見にやって来たのだ。

八十里越をようやく越えた只見村の入口に叶津の番所がある。叶津川が伊南川に合流するところで、現在もこの番所の建物はほとんど当時のままに保存されているが、継之助はここに一泊して疲れを休める間もなく、翌日は、同じ村の目明し清吉の家へ泊まった。

この家も先ごろまで残っていたが、当時は街道沿いの一軒家で、もとよりいぶせき陋屋であった。一説によると、ここには一泊しただけだというが、終焉の地となった塩沢村の村医矢沢宗益の家に入ったのは十二日というから、その間、五日の空白になる。距離的には十キロたらず、平地だし駕籠で運ばれてゆっくりいっても半日あれば充分だ。清吉の家から、いくらかましな家にでも移ったのだろうか。それとも清吉の家で松本良順の診察を受けたのだろうか。

只見村とあるだけで、判然としない。寅太の回想では松本良順はすでに小出良圭の報告などで、継之助の傷の様子を察知していたようである。かれの治療経験と照らし合わせても、本復は難しいと見たのであろう。

寅太の回想によると、〝松本氏は供をも連れずに遣ってこられた〟とあるが、前記の吉田兵右衛門が供をしていたはずだし、寅太の記憶違いであろう。

――河井さんは大層喜んで、一見旧知の如しという体で、直ぐ話を仕掛けて上機嫌でした。松本氏も傷など碌々見もせずに、戦争の話やら世間話やらして、相互に愉快さうに見えました。其時松本氏は、土産だといって西洋料理風の肉のタタキを持ってこられたが、河井さんは喜んで御喰りになりました。松本氏が帰られた後で、河井さんは「久しぶりで豪傑の顔を見た」とおっしゃりました。松本氏は帰らるる際に、起ちながら「上手の医者が幾人も居るから、会津へ遣って来たまへ、会津の壮士も君の来るのを待って居るから」といはれた……。

只見村は会津の内である。良順の言葉は若松城下という意味であろう。このとき良順は、傷所を一寸見て、繃帯だけを巻き直し、後の手当ては吉見や阿部など長岡藩医に教えていったという。継之助の傷の悪化は、当初の手当ての悪さと八十里越に無理をした結果だというから、この阿部某らの医術が未熟だったと思われる。

一説によると良順は、片足を切断すれば治る見込みがある、と奨めたが、継之助は武士が片足を切ってまで助かるなど恥だ、といって拒んだという。

それでも良順の言葉で会津若松城下に行く気が起こったのか、十二日には塩沢村まで運ばれた。

矢沢宗益は、医者といっても、このあたりの馬医者である。継之助の弾丸傷の治療など、自信のある手当てが出来るはずもなかった。だが長岡藩の家老と聞いて、寝食を忘れて治療に尽くしたが、効果はなかった。当時宗益は四十八、九だった。

矢沢の家に在ること四日。とうとう一歩も出ることがなかった。

二

継之助はすでに旦夕に迫った命運を悟っていた。それだけにおのれの死を超えて、長岡人士の後顧を案じていた。花輪求馬や寅太などにこれからの行く道を示唆していたのである。

会津も遠からず落城するであろうし、仙台も保全は期すべからず、と言い、長岡藩公一家の今後の生きる道として、シュネルに頼んでフランスへ亡命するしかない、と教えた。

「今日あるを慮り、シュネルに三千両預けてある」

継之助はエドワード・シュネルを深く信頼していた。長岡藩の苦境を知るシュネルなら、渡航から彼地の滞在まで面倒を見てくれるのではないか、と思ったのだ。

フランスで世子が勉強しているうちに日本の情勢も変わり、いつまでも、戦争責任を追及されることはあるまい、と見たのである。この見通しは確かに、正しかった。明治政府は、

薩長土肥だけでは逸材に乏しいので、降伏人にまで頭脳をもとめることになる。榎本武揚の登庸などがそれだ。

さらに継之助は、寅太にもこう言ったという。

「世の中は大変に面白くなって来た。寅太、何でもこれからの事は商人が早道だ。思い切って商人になりやい、己もおみしゃんの事に就いては能く花輪にも話して置いたでや」

寅太がその忠告にしたがって実業界で立身したことは前に述べた通りである。継之助の先見の明を立証する逸話だ。

継之助はまた忠僕の松蔵にも目をかけていて、その請いに応じて、生前から、遺髪を遣っている。

松蔵としては言い難いことだったろう。死ぬことを前提としての話になるからだが、奥方から頼まれていたので、どうしても遺髪が必要だった。そうした忠僕の苦衷を継之助は察するのが早かった。

十三日の夜を過ごしたあとから容態は悪くなった。〈扈従日記〉にはこうある。

――継之助殿、十二日塩沢駅迄被レ参止宿。翌十三日朝五時前から少々フサギ気味にて、熱出、ウハコト抔有レ之、夕前に可成小水之通じ両度有レ之処、追々快、十四日朝は先無二別条一候得共、地盤之疲労も増し、迚も若松迄被レ参候も六ヶ敷、継之助殿之御口上も有レ之に付、両殿様に申上候上、松本様江両人罷出、継之助殿御口上之通申上候……。

若松城下から三浦文卿、名倉皆春の両医が早打でやってくることになった。が、これは間

に合わなかったようである。

十五日の夜になると、継之助はいよいよ死期が迫ったことを自覚したとみえ、松蔵を枕辺に呼んだ。

「松蔵や、永々厄介して呉りゃって有り難かったでや」

「勿体ない、殿様、どうぞ、そのようなことを仰有らずに、お気を強くお持ち下さい」

松蔵は涙があふれて、励ましの言葉がもつれた。継之助はしかし、自分のからだの始末まで、指示している。

「おれのからだはおれが一番よく知っているでや。多分、明日が死ぬときだろう、よいか、おれが死んだら、火葬にせよ。それに津川口の形勢も、どうやら危なくなって来たようでや。火葬にしたら、すぐ出立できるよう、いまから支度をととのえておけ」

「そんな、殿様、何を仰せられます。いつもの殿様らしくありませぬ、心弱きことを仰せられずとも……」

「わからんやつだ、さあ、おれの言う通りにしろ、用意しろといったら用意しろ」

継之助は語気荒く叱りつけた。

継之助らしい調子だった。妻女や母の遺談でも、継之助はかっとなって叱りつけるが、すぐ、けろりとなって、忘れてしまう。その爽やかさが男らしく、後に嫌なものが残らなかったという。継之助の魅力の一つである。

松蔵は叱りとばされて、涙を拭き拭き、火葬と出立の支度をはじめたが、思えば、これが継之助の最後の叱咤だった。

その夜、徹宵、松蔵はお棺を作った。それが完成すると、次に平形の納骨箱を二箇作っている。

これらは松蔵自身の考えだった。前に山駕籠を工夫したり、誠実な僕としての発案だった。一つは遺骨を収めるが、もう一つの方には土塊を入れて置いて、もしも途中で西軍に見咎められた場合には、偽物のほうを渡して誤魔化そうというのである。平箱にしたのは、背負うのに便利なようにという松蔵らしい考えからだった。

翌朝、継之助は目ざめて、それを見ると、喜んで、しばらくは平日と変わりなく談笑したという。

死期の前に、ふと訪れる小康であったろうか。

昼すぎになって、

「一ねむりしたいでや」

人を近づけぬようにと言って、目を閉じた。それから昏睡状態になった。夕方になっても眼をあけず、そのまま、五ツ刻（午後八時）ごろになって、継之助の息は絶えた。

後年、矢沢宗益の未亡人の話では、矢沢宅でも、継之助の蒲団は戸板の上に敷かれていたという。終始戸板の上にいたのは、少しでもよくなれば、すぐに若松城下へ舁いでゆくためだったという。

本富栗林という人が、明治二十九年（一八九六）に只見、塩沢村を訪れて宗益の未亡人に

親しく当時のことを聞いたことが紀行文にある。

——最も感じたるは、臨終まで（継之助は）言語爽やかに、精神変らず、一度もうめきを聞きたることなしと。

継之助の遺骸は遺言通りに、ただちに荼毘に付された。松蔵は泣きながら、後始末をした。

——旦那様は、平素厳い方でいらっしゃいますから、若や一ツ片でも骨の拾ひ方が足りないで、此の世に生れ替ってお出でになってから、「松蔵や、貴様の骨の拾ひ方が粗忽の為に此の通り已の骨が一本足りない」などとお叱りになっては大変だと思ひまして、ヤレ津川口が敗れたの、官軍がどこそこまで来たのと注進櫛の歯をひくやうな場合ではありましたが、一生懸命に、一ツ片も遺さないやうに拾ひました……。

「河井様当十六日八ツ七分時頃死去」

の悲報が早打で若松城下建福寺に齎されたのは、八月十八日昼時前である。

が、その日、雪堂老公と藩主忠訓は坂下にいっていたので、両君が詳細を吉見雲台と片山兵左衛門から聞いたのは翌十九日の夜であった。

河井継之助に抱いていた期待が大きかっただけに、雪堂老公の失望落胆は甚だしいものがあったに違いない。

翌々二十一日に遺骨が届くと建福寺和尚へ葬式の儀を頼んだ。同夜は藩公父子をはじめ一門ならびに藩士の重立った者や継之助に由縁のある者で通夜をした。

二十二日、墓地に埋葬して、盛大に葬儀が営まれたが、鶴ヶ城から松平容保をはじめ会津藩の重臣らも参列して、その死を悼んだ。

河井継之助の死は、北越戦争の敗北を象徴するものだったが、会津藩主従にとっても、これを悼み、涙しているひまはなかったのである。

そのときすでに四隣は西軍の囲むところとなって、国境いでは熾烈な戦いが行なわれていたのだ。息もつかせぬ進攻ぶりであった。

むろん、継之助の死は、まだ西軍の知らぬところだったが、重傷を負って敗走したことは、敵味方とも知らぬ者はない。それだけ継之助の存在は大きかったのだ。

長岡城がふたたび陥ちたとしても、継之助が健在であったなら、東軍の士気は必ずしも落ちなかったろう。

だが、落城と総督の重傷と重なれば、敗色は一段と濃く彩られるのである。さらでだに継之助には一種のカリスマ性があった。長岡藩兵を中心にした東軍の兵士の多くは、継之助の名声に魅力を感じ、その指揮に信頼を寄せていたのである。反動はそれだけに大きかったといえる。

だが、長岡藩兵の士気沮喪に比べて、佐川官兵衛などに率いられた会津藩士は、容易に屈するとは見えなかった。当初から長岡とは立場も違い、意気込みも違っていたのだ。

長岡の藩論は、右するか左するか、長い間迷っていた。慈眼寺において継之助が岩村精一郎に歎願を一蹴されてから抗戦に決定したのだが、その迷いの分だけ、心の準備が遅く、軟弱だったといえる。

会津藩士はすでに日光口や白河で戦い、越後でもかなりの死傷者を出していたが、しかし、二十八万石の本領には一歩も踏みこませていない。その意味でも、まだ前哨戦であり局地戦でしかなかったのである。

会津藩士たちは越後でも各地に散在して抵抗戦を続けていた。すでに敗北感に萎えた長岡兵とは心身ともに、相違があった。

就中、鬼の官兵衛こと佐川官兵衛は継之助が倒れた上は、乃公出でずんばの意気であったろう。

白虎隊出陣

一

北越新発田藩の内応の噂は、会津藩兵にとって暗い予感の的中を感じさせた。河井継之助のもとに一丸となった長岡藩などと違い、当初から薩長に通じる一派がいたことで、戦局如何では、裏切る可能性は充分にあった。

松ヶ崎に西軍を手引きして上陸させた新発田藩は、ただちに嚮導して、要所へ向かった。松ヶ崎は阿賀野川の河口東岸である。松浜の地名が残っているが、川を挟んで、対岸には、現在、新潟空港がある。

一隊は新潟に向かい、一隊は水原に向かい、さらにもう一隊は赤谷に向かった。これが七月二十五日で、河井継之助の長岡城奪還も水泡に帰すことになったのである。

会津藩にとっては、もはや長岡城の争奪どころではなかった。必ずしも、長岡に気をとられていたわけではなかったが、河井継之助の協力要請を拒める立場ではなかったのだ。だが、赤谷の危機は、会津若松のほうが敏感だった。二十八日には赤谷を守備すべしとの命令を受

けて、遊撃隊が急行している。

水原は天領で代官陣屋もある要所だが、水原は捨てても、赤谷は守らねばならなかった。現在の新潟県から会津地方へ入るには、南の方から、六十里越、八十里越、沼越峠、九才坂峠とある。しかし、新潟からの鳥井峠と梅木峠越えが、阿賀野川に平行した街道として、津川を経由する若松街道でもっとも利用されたらしい。これは会津領内では、越後街道と称されていた。

この津川のてまえ、三川村へ新発田から南下する街道がある。これが新谷川沿いに赤谷を抜ける道で赤谷街道または新発田街道と呼ばれていた。因に、当時の会津領は津川町、鹿瀬町を包含していた。

したがって、新発田藩が先導して、西軍を侵入させる道は、水原と赤谷にほかならなかったのである。

遊撃隊頭三宅小左衛門は朱雀一番中隊頭であったが、遊撃隊が白河方面に在ったとき、隊頭遠山伊右衛門が討死にしたので、その後任として派遣されたのだ。

組頭には樋口仲三郎と赤埴平八が選ばれた。赤埴は東方で力士隊を率いて活躍していたが、越後の急によって移ったのである。

赤谷の守備隊は、鎮将隊砲兵軍士原栄二郎、鈴木粂三郎、吉田常三郎を指揮官として近在の猟師なども六十人ほどが参加していた。

赤谷付近は山中に入ると小径がわかりにくい。日ごろ、鳥獣を追って山歩きに馴れている猟師が頼りになる。実際、境川を挟んでの戦いに大いに役に立っている。

遊撃隊と白虎一番寄合組隊が赤谷の戦いに馳せ参じたのは、八月二日である。すでに長岡城は陥ち、東軍は全般に士気沮喪したのにひきかえ、西軍は勇躍している。新手の援軍が到着したというだけでも力が出る。

だが、会津藩士には絶望は許されなかった。戦わねばならない。暴虐な侵入者を血をもって防がねばならなかった。

白虎隊の中隊頭原隼太は三百六十石で三十七歳。隊士は十五、十六という少年だが、中隊長としての責任ある地位には身分のある壮者が任じられていた。

この白虎中隊に鮎川兵馬の弟で十七歳の才次郎が加わっていた。

本来、少年隊である白虎隊は藩公護衛の隊としてあくまでも後備えのはずだったが、西軍の赤谷接近が急報されたことで、急遽、防軍の応援に駈けつけたのだ。

四境の警備に分散配置された藩兵は手一杯で、赤谷に向ける兵員がなかったのである。

白虎隊士たちは誰もが昂奮を圧えきれなかった。初陣では誰しも緊張と不安が錯綜して落ち着きを失うものだが、少年たちは、ことにこの出張に抱いた光栄と期待が大きかった。

赤谷の街道を扼して待機することになったのだが、彼我の銃声を遠近に聞いて半日を過ごすと、昂揚する血の騒ぎに凝っとしておれなくなる。

「おい、いつになったら出撃するのだべ」

同輩の池田勇太郎がいらいらして足踏みした。勇太郎も十七歳である。

「早く命令が出ねえかな、弾薬が湿ってしまうぞ」

岸彦三郎が言った。熊谷治兵衛の二男で母方の家へ養子に入って岸姓を名乗っていた。

「馬鹿こけ、火縄じゃあんめえし、撃てなくなることがあるものか」

と、才次郎が打ち消した。かれらが支給されたのはミニエー銃であった。

「そんでもあんまり濡れると発火しねえことがあるんだべ、いつか隊長が言ったぞ」

蒼い顔に唇の色をなくしていた遠藤嘉龍治が、ぼそぼそと独り言のように言った。遠藤嘉内の二男で、十六歳だった。

「そんだことねえ、そんだことねえ、その鉄砲がやくざ物だったというだけだべし。あんまり馬鹿えこと吐くなって」

同い歳の鈴木五郎が怒鳴った。自らの不安を打ち消すような怒鳴り方だった。嘉龍治は黙った。唇は顫えていたが、これは雨で寒かったせいかもしれない。風邪でも引きこんだような蒼い顔が才次郎の気にかかった。

五郎は兄の三郎（二十九歳）が朱雀隊付属で小森一貫斎の指揮下にある。三郎は七石二人扶持にすぎないが、精武流をよく使う。

因に同姓同名で同隊士がいるが、二百五十石で軍事方の鈴木丹下の分家の源之助の弟である。

雨は降ったり止んだりした。ただでさえ、うっとうしい雨の中で、濡れそぼったまま、凝っと命令を待っているのは、かなり忍耐力を要する。少年たちは、藩校日新館で学問ばかりでなく、精神修養もしているが、やはり戦場という特殊な状況の中では、日ごろの鍛錬を活かすのも容易ではなかった。

彼我の銃声は近くなったり遠くなったりした。それは少年たちの緊迫した感情を苛立たせるだけのことだった。

少年たちの気持は、原隼太にもわかる。

「待っていろ、遊撃隊のほうに聞いてくっがら」

隼太は才次郎一人を連れただけで、遊撃隊の本陣に出かけていった。

本陣には樋口仲三郎がいた。軍事奉行並の一柳幾馬と何やら激論を交わしているところだった。

樋口は入って来た原と才次郎をちらりと見たが、そのまま話を続けた。

「このまんまでは、五体が冷て鉄砲も撃てなくなるべし、それに敵はそこまで来ているというではねか、戦さは士気が揚がっているうちに始めるのが鉄則だ。何時までもこうやっていては……」

「わからぬ漢だな、戦さは徒らに進めばよいというものでもない。拙速は愚の骨頂。勝機を握ることがあるかもしれんが、失敗するかもしれん。失敗しだらどうする。たとえ進撃は可能だったとしてもじゃ、後備えの兵が足りん。寡勢で猛進し、もし敗れでもしたら、わしは腹を切らねばならん」

責任をとることが嫌なのか、怒鳴りたい思いをぐっと咏えている樋口だった。原隼太は口

を挟む機会を失った。

「汝らは知らんじゃろうが、わしは若松を出発するとき、君命を拝した。御家老よりくれぐれも軽率に戦うなかれと釘を刺されておる。御家老はかように申された。一国の兵を以て天下の大兵に当らんとす、事重大なり、熟慮して断行せよ、とな」

「し、しかし……」

「御家老の言葉だ、熟慮だ、わがったか」

樋口は拳をぶるぶる顫わしていた。命令に抗弁は許されない。条理はわかっても、感情の制馭は容易ではなかった。

一柳幾馬は、じろりと原たちを見た。

「何の用だ」

「はあ、その、敵の様子を、知りたいのだげんじょも」

「待っておれ、必要があれば使いをやっがら」

幾馬には原の用向きがわかっていたようであった。原は脇の下に冷汗を感じた。樋口が肩を振って立ち去るあとから、急いで、雨の中へ出た。

「鮎川、こりゃ埒やかんな」

「残念です。後備えは来ないのですか」

進撃したいというよりは、戦況を的確に知りたいという気持だった。敵がどれくらいの部隊で、どのあたりに屯集しているのか、距離はどれくらいなのか。そうした状況が皆目わからない。一切の説明もなく、ただ待機を命じられているだけなのだ。

軍事奉行や監察の情報蒐集に欠けるところがあったのは事実だ。この日、北越の東軍はすべて敗退し、西軍の前衛は袋の網を絞るように、会津領界へ迫っていたのだ。

二

軍事奉行並一柳幾馬が、遊撃隊に出動命令を出したのは、その夜、深更に至ってからである。

子ノ刻（午前0時）を期して、組頭樋口仲三郎は隊士数十人を率いて出発した。行先は常盤新田ということであった。

すでに石間口、三月沢口、中ノ沢の間道などに、ひしひしと西軍が迫っていた。監察の太田彦右衛門、原嘉平治らと鳩首相談した一柳は、西軍の一翼を破ることで、形勢の逆転を謀るしかないという結論に達したようであった。三宅小左衛門の意見も大いにとり入れられた。目的は西軍を新発田に退け、胸壁を大月辺に築こうというものであった。

翌四日には、遊撃隊の力士隊五十人を赤埴平八が率いて常盤新田の山上に向かった。崖上のやや平坦なところに布陣することにした。

ところが西軍は翌五日、乙山をはじめ近傍の高い峰に陣を構え、築いたばかりの赤谷の胸壁に向かって砲撃してきた。

西軍の方の陣地が高いために、砲弾の命中度はよく、力士隊の損害が尠くなかった。

「このままでは全滅させられるぞ、裏へ廻ってあいつらを撃ち攘え」

各隊の軍士が協議して、山内から背後を襲うことに決めた。山内とは上赤谷より一里（約四キロ）ほどの新発田街道である。だが、陣将の上田八郎右衛門がこれを覆している。

「援軍の来ないうちに無謀な進撃は敵の乗ずるところとなるぞ」

上田は朱雀三番士中隊の隊頭だった。太平方面の守備に就いていたが、若年寄に任ぜられて、赤谷口の陣将に派遣されて来たのだ。因に朱雀一番士中隊の隊頭小森一貫斎が辞任し、一番隊と三番隊を合併し、原田主馬が隊頭となっていた。

新発田藩にとっては、会津藩は比較にならぬ大国であり、寝返りの後ろめたさがある。西軍を手引きして、うまく嚮導の役目を果たそうとしたが、会津藩の津川・赤谷の防衛線は、容易に抜けるとも見えなかった。

これは薩長の西軍にしても、ある程度、予期されたことだった。長岡の攻防で舐めた苦い思いが慎重にしていた。

赤谷と津川を一気に突破するためには、地勢に通じていなければならなかった。西軍は会津を三方から包みこみ、呼応して一気に雪崩こむ戦法をとるらしかった。

赤谷口を守る会津軍には一向に援兵が来ないのに、西軍は着々として戦線を充実させていた。

遊撃隊の望月辰太郎が津川の軍事局に駈けつけたのは、十三日である。津川に設けられた軍事局は越後からの西軍を防ぐための本陣とされていた。

望月は渓流沿いの道を津川にやってくると、会議所に日向左伝を見つけて、赤谷口の危急を告げた。

「一体、いつになったら援軍がくるのか。西軍の人数は倍や三倍ではききませぬぞ、このままでは赤谷口は早晩突破されてしまう」

「なんだ、弱音を吐きおって。汝らが死守せんでどうする」

「弱音ではござらん、だが、寡勢に多勢では如何ともし難いのだ。何としても援軍を……」

「わからんやつだ。援軍と申しても、若松にも何人も残っとらんのだ。いくら汝が喚いても」

どうした、とそこへ清水作右衛門が入って来た。

「望月、まだじくねていっのか。危ないのは赤谷口だけではねえ、四境全部だ。どこも兵が余っているところなどはねえ」

清水は頑固で聞こえている。声も大きい。望月はかれらに訴えることの無駄を悟った。

その足で陣将の上田学太輔のところにゆくと、赤谷の危急を訴えた。

「軍事局では口を酸っぱくして説いても、耳を藉そうとせぬ、かような有様では、今日にも、やつらが攻めこんで参りましょうぞ」

「援軍のあてはないのか」

「一人もいないだと」

「そのようなはずはない、一小隊でも役に立つじゃろう」
学太輔は早速、朱雀四番足軽隊を派遣することにした。
「明日にでも一斉に進撃して、敵を松ヶ崎に追い落とせ」
十四日の丑の下刻——といえば午前三時ごろである。月があるはずだったが、雨を催した夜は暗く、時々、冷たいものが顔にかかった。本営に集合した会津兵は、三百五十人を数えた。ただちに遊撃隊を二隊に編成して、本隊は二百人。中隊頭三宅小左衛門がこれを率い、残りは組頭樋口仲三郎が指揮して榎平へ向かった。因に赤埴平八の力士隊は本隊に編入されている。
暗い夜の、二手に分かれての奇襲である。かれらが恐れたのは同士討ちであった。合詞が定められた。
「味方か」
と聞けば、
「敵」
と、答えることにした。
これは熟慮の上のことであった。味方か？　と聞く者に敵と答えるのは、敵であるほど難しい。奇襲の場合となればなおさらである。
遊撃隊本隊は小雨の中を息をころして進んだ。小径を避けて山腹を木の幹にすがるようにして這いのぼっていったのだ。雨に濡れた小笹や草が草鞋の下で軋む。刀の鐺や銃の台尻が木の幹に音を立てるのに気をくばりながら、峰に辿りつくと、敵陣を透かし見た。
もう夜明けが近いはずだったが、まだ東の空も暗い。闇の底にうごめいている人影もおぼろだった。
三宅小左衛門は、はやる者の気を鎮めて、
「急くな、最初の一発が肝腎だぞ、命令を待て」
揃ったところで、ようやく、小左衛門は命令を下した。
「撃て！」
轟然と暁闇の山を揺るがす銃声が、西兵を驚愕させた。
ためにためたうえでの一斉射撃である。林は一瞬で暗灰色の硝煙に包まれ、寝耳に水の西兵たちは、地震か落雷かと思った者も多かったという。
見張りの者もいたのだが、小径のほうにばかり気をとられていて、山腹を這って来た会津兵に気がつかなかった。本隊が出発したのが寅ノ刻（午前四時）だから、夜襲にはいささか遅い。初秋とはいえ夜の明けるのは早いから、丑ノ上刻から下刻が夜襲にもっとも適しているのだが、この暁闇の昏さは雨が幸いしたのであろう。
西軍は仰天した。一斉射撃で傷ついた者もいるが、大半は思いがけないことに動顚して刀や銃をとり直すことも出来ずに遁走している。
「それ、斬り込め」
会津兵は、銃を棄てるや、抜刀してどっと躍り入った。

「斬れ、斬れ、斬れ！」
白刃が唸った。
血臭が小雨の中に立ちのぼる。硝煙の中での凄まじい白兵戦である。敵陣へ躍り込んでの初太刀は同士討ちの危険はなかったが、剣戟とともに、体が入れ代わったり、転んだりすれば、もう敵味方の区別がつかなくなる。
「味方か、味方か」
会津兵の叫びに、狼狽した西兵は、あわてて、
「味方だ」
と、答える者が多かった。
半ばは何も考えずに答えた。すると言下に、白刃が落ちた。味方だ、と答えることは、一種の安心感があり、そこを斬られると、避けようがない。
雪崩をうって遁走する西兵の中から、身を翻して、走ってくる者が三人いた。
遊撃隊の酒井伝治は、一瞬、勇み足の味方かと思い、
「味方か」
と、怒鳴った。
すると、
「味方だ」
と、三人が一様に答えた。

敵だ、と思ったが、念のために、
「どこの藩だ」
と、重ねて聞いた。
すると、さすがに、口ごもった。一人が咄嗟に答えている。
「側戦隊じゃ」
苦しまぎれの答えだった。
「おう！」
酒井伝治は同じように大声で答え、近づいて来たやつを、ばさっと斬った。
側戦隊など聞いたことがなかった。藩の名を聞いたのだ。それを隊名で答えるというだけでも、敵に違いない。
その判断は正しかった。とって返した勇者ではあるが、機転が利かなかったのだ。噴血とともに倒れるやつを蹴放すようにして、別の男が斬りかかって来た。その歯を剝いた顔が目前に野獣のように見えた。
伝治はよろめいた。そのとき、背後から駈けぬけるようにして出た者が、これを斬った。
高倉虎之助だった。
「おう、助かったぞ」
虎之助はにやりとしただけで、もう一人の者に斬りかかった。二人を仆されて、残っただけに死物狂いに刀をふりまわしたが、伝治が一息ついて、

「虎、おれに任せい」

と、下から掬い上げるように、峰で打ち上げた。白刃と白刃が凄まじい火花を発した。鋼の灼ける臭いが、鼻先を掠めた。猛然と伝治は鍔ぜりになるばかりに斬り込み、二人のからだは足がからんで、抱き合うようにして倒れた。

「伝治、やっだか？」

虎之助は闇の底を透かし見た。

赤谷の戦い

一

西兵はどこの藩かわからない。ただ味方でないことだけは確かだった。いや、津川の本営に属する会津藩士でないことが確実なだけで、あるいは、長岡藩兵か、米沢兵かそれとも桑名か、今井信郎らの衝鋒隊か、その区別は判然としていない。会津藩兵たちは闇夜の同士討ちを避けるために、合詞を用いたが、他藩の味方へ連絡するひまはなかった。出発前に定めた合詞なのである。

赤谷付近の戦線を捜った結果、西軍しかそこにいないという報告が、拠りどころになった。味方でなければ敵。北越の東軍の敗色が津川の本営に緊張を強いての逆襲であった。

榎平の西軍陣地へ斬り込んだ遊撃隊は、酒井伝治や高倉虎之助の果敢な活躍で、士気があがった。奇襲に成功し、優勢だという意識は、勇気を百倍するのである。斃るる者あっても屍を乗り越えて猛進した。白刃をふるい、銃撃しての突進に、西兵は悲鳴をあげ、胸壁を棄てて逃走した。

「いまじゃ、火を放て、追撃しろ」

組頭の樋口仲三郎は声を涸らして叫び、真っ先に進んだが、突然、山崩れのように、山の狭間から、伏兵が銃撃してきた。

これは敵が逃げると見せて、反撃の伏兵と思ったが、実は救援の新手の大軍だったのである。

会津兵は、闇を焦す一斉銃撃の火勢と飛弾に出鼻を挫かれ、狼狽して地に伏した。そこへどっと、喚声をあげて斬り込まれた。

「退くな、ここで退いては、総崩れになるぞ」

赤埴平八は仁王立ちになって、浮足立った者たちを鼓舞するや、

「力士隊、つづけ」

と、先頭をきって走った。かれの刀は、何人の血を吸ったのか、刃こぼれが凄まじく、鋸歯のようになっていたという。

力士隊の奮戦で、一時は盛り返したが、西軍の鉄砲は連発銃が多いとみえ、間断ない銃撃で、会津兵の死傷は尠くなかった。

「くそ！　会津武士の死にざまを見せてくるるど」

中隊頭三宅小左衛門は、歯がみして、大身の槍をふるいながら突進した。その勢い、さながら、手負い猪の如く、猛虎の如しという。生還を期さないだけに、銃火も剣尖も恐れるものは何もない。かれの大身の槍は、あるいは叩き伏せ、あるいは薙ぎ倒し、あるいは掬い斬りに刎ねて、その縦横の働きは、鬼神も面てを背向けるばかりだったと、西兵の日誌に描出してある。

その勢いに畏れて崩れ去ったなかに、数人は踏みとどまって反撃してきた。小左衛門の槍がその一人の腹を貫いた。

のけぞりながらその男は、槍の千段巻きを摑んだ。必死の凄い力である。小左衛門は素早く引き抜こうとしたが、その手は摑んで放さない。刺された衝撃と恐怖で動顚したのか、こういう場合の行為は、理屈ではない。反射的なものだ。

小左衛門は苛立った。引けども、押せどもいっかな放さぬ。乱闘である。槍にこだわっていると他の敵に斬り込まれる。かれはぱっと槍の柄から手を放すや、抜き打ちに踏み込みざま、その肩から斬り下げている。

さすがに噴血のなかにその男は槍を放して崩れた。だが、敵は一瞬の隙を見逃さなかった。横合いから、新手の敵が槍をふるって突っ込んでくるのが見え、隊士の小池滝江が、危ない、と叫んで駈け寄ったが、寸前、穂先は小左衛門の腹を貫いていた。

小池は、怒り心頭に発したように、奮迅の勢いで、群がり寄る数人を仆したが、狙い撃ちの弾丸を浴びて小左衛門のからだに折り重なるようにして倒れた。

組頭の赤埴平八もまた、この乱闘の中では死ぬしかなかった。かれは背に白絹の幣帛をまとって徽章とするや、

「会津藩遊撃隊組頭の赤埴平八」

と、叫んで斬り込んでいった。西軍の鉄砲にとって、この勇猛な男は、恰好の的でしかなかった。それでも、十数発の弾丸を受けて倒れた平八の手は、刀をしっかり握ったままであり、前述のごとく、その刃は朝からの奮戦を物語って鋸歯のようになっていたという。

同じ組頭で、百五十人の別働隊を率いた樋口仲三郎は、榎平方面に向かったが、本道を南に距ること半里。暁闇と急峻の小路で、隊伍が乱れた。強健な者と、足弱との間で差がついたのはこの条件の下ではしかたがない。そして、この闇のなかの行軍で脱落者や道に迷う者が出ることになった。

榎平の敵陣を目前にして、点呼した仲三郎は、二人の隊士がいないことにはじめて気がついた。

能見武一郎と北原三郎だった。

「どうしたのだ、二人は」

「遅れていっのか、ひょっとすると道に迷ったのかもしれねげんじょも」

だが、いまさら捜しにゆくことは、戦略の妨げになる。二人のために全軍を危機にさらすのは避けねばならなかった。

「そのうち、追いついてくるか、何とかするだろう」

と、仲三郎は自分に言い聞かせるように呟いた。いまはもう納得するしかなかった。

本道の方で、雷鳴のような砲声が聞こえていた。

仲三郎は西軍の築いた胸壁に向かって射撃をこころみた。胸壁は、木を切りこれを組んで

土俵を積みあげてある。銃撃ではびくともしなかった。前面は木株を残して展けていて、身を隠す何物もない。ただ頼みは暗がりだけであった。その暁闇もしだいに東の空が白んできて、人影をあらわにするばかりであった。

時が経つほど不利になるのだ。二人の捜索を諦めた仲三郎の選択は正しかったといえる。

「これは大砲がなくてはとても破れねえ」

絶望的な悲鳴をあげる者があった。仲三郎は叱咤して、

「弱音を吐ぐな、高みに登って撃ちまくれ」

数本の巨杉に、鉄砲を背負った者がとりついた。樹上から胸壁内を撃とうというのである。胸壁は急坂の上に作られている。その高さに達するには梢の方まで登らねばならない。これを掩護する射撃がくり返された。

樹上から転落した者もあり、あまり効果はなかった。迂回して側面から攻撃をかけたが、これも失敗した。そのうちようやく、本道から来た友軍からの大砲が、胸壁の一部を破壊したのに力を得て、三面から攻撃をかけ、どうにか一の胸壁を奪ったが、ほっと息をつくひまもなく、背後の山上に集結した大軍が、文字通り〝雨注〟の間断ない乱射で、遊撃隊の過半が死傷し、坂を転げ落ちる者が続出した。

せっかく奪取した胸壁も、捨てるしかなかった。

仲三郎は、負傷者を扶けしめ、数町退却して、態勢を立て直すことにした。林間を弾丸に追われて走るかれらに無情の雨が降り注いだ。が、雨の幕が追躡の敵の目を眩ませてくれた

のがせめてもだった。

本道の残兵が曳いて来た大砲が一門。これで頽勢挽回だと仲三郎は思った。

「あの山の上から撃ちおろすのだ。距離も丁度よいぞ」

八方山と呼ばれている頂上に大砲を引き上げた。砲手とも二十人ばかりだった。

だが、西軍はもう胸壁に依存してはいなかった。東軍の殲滅を計って大挙して攻撃に出ていたのである。夜が明けてからわかったのだが、赤谷の主力は長州で、先鋒として新発田藩と芸州の部隊が督励されていた。長州の隊長の一人はのちに萩の乱を起こす奥平謙輔で、会津藩の槍隊の強かったのが忘れられない、と、後年、会津出身の秋月悌次郎（胤永）に語っている。その場にいた高須梅三郎という者も往時を回顧して、会津藩の槍隊の前には、長兵も逡巡して、いくら鼓舞しても進まなかったので大いに困ったものだと話している。

明治になってからのことで、長州人は官界で栄達し、零落した会津藩への同情と憐愍もあって、勝者の寛大さで、敵を讃えたのであろう。ほとんどこの十四日の赤谷の戦いは五分で、西軍も得るところがなく、遂に兵を収めて新発田に引き揚げた、と語っているが、会津側の記録では、五分というより四分六で敗色が濃かった。

この山上からの砲撃もさして役に立たず、むしろ、山下に迫った大軍を防ぎきれず、大砲を曳いて赤谷に退却したほどだ。この八方山を奪われたことは、さらに味方にも不利を齎している。はじめ一角に防壁を築いた白虎一番寄合隊は榎平の敗報を聞くや、晏如として居られず、これの救援に赴くべく、陣を捨てて本道を進んだところ、八方山をすでに奪っていた

西軍から銃撃を浴びている。

中隊頭原隼太は、すぐさま応戦したが、上方からの銃撃に支えきれず、赤谷に応援をもとめた。

赤谷の本営には、佐川官兵衛の率いる朱雀四番士中隊がいた。

敗報はすでに届いていて、津川へ救援の使いが出されていた。津川には横山伝蔵の朱雀四番足軽中隊がいたのである。

「かれらが来るまで、待ってはいられぬ。直に出かけるべし」

と、鮎川兵馬は弁当を捨てて言った。

「そうだなし、舎弟の身が心配だべ」

と嚮導の円城寺岩五郎が揶揄するような調子でいった。悪気ではなかったろうが、兵馬には棘があるものに聞こえた。

「弟とは関係ねべ」

「そうだべか」

岩五郎はにやりとした。

白虎一番寄合隊には弟の才次郎がいる。いま苦戦していると聞くと、兵馬はいても立ってもいられなかった。

岩五郎は、初対面のときから、兵馬に対する目が冷たかった。いわゆるウマが合わないのであろう。

鮎川兵馬の隊が息せき切って駈けつけたときは、東軍は雪崩をうって敗走にうつっていた。

「なんだなんだ、皆、しっかりしろ、加勢に来たのだぞ」

兵馬が怒鳴ったが、銃声と混乱の騒音にかき消されて、殆ど、耳を貸す者はなかった。敗走で惑乱している。何人か、顔見知りがいた。かれらの眼は血走り、額から血を流している者もいたし、友人の肩にすがってくる者もいた。

「鮎川さん、駄目だ。相手が多すぎる」

「それに大砲がな、狙いが正確だぞ、ともかくここは一たん引き揚げで、捲土重来にすべ」

「馬鹿な、おれは退らんぞ」

兵馬は、続け、と隊士に叫んで傍の小山の急坂を駈け上った。灌木の枝や根方に手をかけて登ると、崖端に銃口を揃えて、追撃してくる敵を待った。

「いいか、敵が近寄るまで、きっとしてろ、一斉に撃つんだぞ、一人先走っだら、悟られっがら」

こういうときの心理は、一呼吸でも早く引金を引きたくなるものだ。一分が十分にも三十分にも感じられる。敵が近寄ってくるのを待つには相当な心理的葛藤がある。

敵の姿はまだ見えなかったが、砲声が近づいて来、近くの藪の中で爆発したり、高い木の梢が雷に打たれたように大音響を発して折れたりするたびに、隊士たちは、あるいは立ち上がったり、顔を蔽ったりした。

誰もが一年前までは戦場で殺し合いをやるようになるとは夢にも思わなかったのだ。武士

道はこの銃火の近代戦とはあまりにも違った。多くは初めての出陣であり、耳を聾するような銃砲の戦いに呆然たるものだったのである。

兵馬はかれらに比べれば、大変な経験者ということになる。かれ自身、この一年たらずの間に、自分が他人のように感じられるほどの変わりようをしたことを知るのだった。

人の死に対しても、おのれの手で、人を傷つけ、死に至らしめることも、殆ど苦悩を感じなくなっている。感情が渇いたというか、繊細な神経が太く厚くなったのか。どんなむごたらしい死にざまを見ても、腐臭に顔をしかめることはあっても、吐き気を催すようなことがなくなっていた。この変化は修羅の炎を潜って来たことの変化であろう。かれは半年の間に十年も歳をとったような気がしていた。

（死ねばいいのだ）

すべての結論がそこに帰した。

戦場で生還を考えていては、武士の道は全うできない。城下で療養しているときは、断ち難い生への執着が若者を揺さぶったが、この地獄の戦場で、砲声と炸裂の火柱と濁煙の渦の中に身を置くと、死は意識の外になる。会津武士の本分だけが脳裡にあった。

「いよいよだぞ。狙いは正しく、落ち着いて敵を狙うべし。あわでると失敗ねっから」

しかし、一団が雪崩てきたと思うと、これは白虎隊だった。

白虎一番寄合隊の少年たちは、泥と血にまみれていた。ひどい敗軍だった。傷ついている者も多い。急造の担架で運ばれてくる者があった。仰向いたまま、死んでいるかのように、

目を閉じていた。

崖の上から見おろしていた兵馬は、

「才次郎か？」

と、思わず叫んだ。

弟の才次郎のように見えた。兵馬は愕然とするとともに、立ち上がった。

そのとき、

「来だ、敵だ」

円城寺岩五郎が大きな声を出した。

その言葉をぶち切るような砲声が響いた。かれらが拠っている崖鼻が地震にあったように揺れた。

敵の先鋒が疎林のかげから飛び出して来た。

「撃で！」

待ち兼ねたように一斉にヤーゲル銃が火を噴いた。狙い撃ちの効果で、敵兵が面白いように倒れる。

兵馬は、才次郎のことが気にかかっていた。兄弟の情は立場を超えて、兵馬を動かした。

だが、その逡巡をぶち切るように、突然、左後方の高みから、銃撃が加えられたのである。松林の中に銃隊があらわれたのだ。朱雀四番士中隊の二小隊は、腹背に敵を受けたことになる。

「こら、たんまげたぞ」

「みな殺しにされるぞ、退け」

兵馬は退却を命じた。

数人がいち早く、灌木の坂を転げるように駈けおりる。みんなが走るまで、兵馬がとどまったのは、小隊頭としての役目からである。

「早ぐ、急げ」

最後の一人を促した。その男は、袴の裾が木株にひっかかって動けなかったのだ。

「あ、鮎川さん」

救いをもとめるように見えた。

兵馬は咄嗟に刀を閃かした。袴の裾を断ち切った。反動でその男は、転倒し、そのまま、ずるずると転ってゆく。

兵馬も、漸く、そのあとを追おうとした。

刹那、目の前が真っ赤な火に包まれた。つーんと鼻を刺す硝煙と、火と爆発音と——。

兵馬の目の中で天地がひっくり返った。かれのからだは、傍の杉の幹にぶつかり、一転して灌木の間を転り落ちた。すぐに起き上がった。五体がばらばらになったような痛みがあったが、幸い、大きな傷はなさそうだ。

会津兵らは、赤谷に火を放って、南方一里ばかりの綱木へ退いた。しかし、ここでも休む間がなく、執拗な攻撃を受けた。綱木は新発田街道に沿う集落で、新発田藩兵に地勢を熟知

されていた。綱木にもとどまれず、ふたたび火を放ってさらに半里ばかり退いて、ようやく新谷に足を休めることができた。

敗報は津川へも届いていて、救援隊が駈けつけてきた。横山伝蔵に率いられた朱雀四番足軽隊である。赤谷の重要さを考えてのことであろう。陣将の上田学太輔もやってきた。

会津兵らは上田の激励を受けて、敗北の衝撃から立ち直ることができた。その日のうちに負傷兵を後送し、残りは編成替えして、明日の攻撃を謀った。だが、この夜、秋雨蕭々として冷気人を襲い、露営の将兵たちはまんじりともできなかった。

二

西軍は長岡城の再度の奪取と、河井継之助重傷との噂で、意気軒昂たるものがあった。難関を突破したうえは、一日も早く会津領に侵攻すべし、と、総督府の命令が将士をふるい立たせていた。北越戦争ははしなくも薩長の確執を露呈することになり、薩摩も長州も会津への一番乗りを競っている。

この競争心が、容赦ない急進となった要素の一つだったことは疑いない。

薩摩の西郷吉之助が越後柏崎に入ったのは八月十日だった。

山県狂介は新津の会議所（本営）にいたが、西郷が到着したと聞いて片野十郎とともに馬を飛ばしていった。

すでに山県は会津侵攻の作戦を決定している。北方から会津への道は峠越えが幾つかあるが、六十里越や八十里越は難所が多く、大軍を進めるのに難く、また敵からの奇襲攻撃を喰いやすいこと、それに南会津へ入ってから、会津若松までの道すじにまた問題が多い。遠いことと只見川沿いの道が狭い。すでに山王峠や燧岳越えで南会津へ入る進路は決まっているし、北越軍としては、赤谷経由の本街道たる新発田街道が最良だという判断によるものであった。

これには新発田城に会議所を置くという合意が優先している。長州の山県は返り忠の新発田藩を目一杯利用する気になっていた。

西郷吉之助は、五月の江戸平定（上野の彰義隊潰滅）につづく関東平定を見届けたのち、いったん、鹿児島に帰郷している。

これは長州に拮抗するためにも、もっと多くの薩摩勢力の奥羽投入を必要としたからである。先頭争いは、結局は、人数の多寡が勝敗を決定させる。薩摩は、長州に比べて、その分脈が少なかった。

長州が高杉晋作による奇兵隊を始めとする諸隊のおぼえきれないほどの多数さに比べて、薩摩は藩士による一本に絞られていた。禄高からいえば、倍近い薩摩が、長州に牛耳られることは我慢ならなかった。

薩摩は陋習の強いことでも知られている。家庭の内でも男尊女卑の甚だしさは、女性を人間扱いしないほどの厳しさだ。それは士分と三民との差をもまた際立たせていた。

長州奇兵隊その他諸隊は、農工商のみか無宿の無頼者まで包含していて、人数もさりながら、命知らずの強みを発揮している。その点が戦闘部隊としては薩摩に欠けたものだった。

西郷吉之助は薩摩で人員を募集し、長州兵力を上回るものにしたいと思ったのである。汽船に薩兵を満載してやって来た西郷に再会するのに、山県は長岡城を陥した得意顔で対することができるのを嬉しく思った。

「薩兵は何人くらいだ」

「西郷が率いて来た連中ですか。さあ、春日艦というやつは大きいから」

「満載して来たというの、三百人は超すかもしれんな」

「はあ、来るのなら、半月も前に来てくれればよかったのですが」

「なに、それでは、長岡攻めが面白くなかったろう」

山県は豪傑笑いをした。あやうく全滅する不安におちこんでいたことなど、一切忘れたように口を拭っている。むろん、西郷の前でも、当初から成算があったような顔をするつもりでいた。

思ったとおり、春日艦で運ばれて来た薩摩軍は三百余人。柏崎で長岡落城のことを聞き、ふたたび出発して、新潟に回航して来たのである。

西郷はあの巨きな身体で、山県を迎えた。

「長岡では、大変でごあんした」

「いや、大したこともなく」

と、山県は澄ました顔で言った。

「河井継之助も、評判ほどの男ではなかったな。いまごろは、山の中でもがき死んでいることじゃろう」

西郷は太く濃い眉を一寸、ひそめるようにして、

「まだ生きているのでごわすか。会津へ入ったとなると、これは手強いこつになりもそう」

「いや、わが方の鉄砲に脚をやられたということですからな、おそらく会津へは入って居りますまい。峠で苦しんでいるか、すでに死んでいるか、どちらかでしょうな」

四月以来の再会である。両者の間にはぎごちないものがあった。お互いに薩摩と長州の間で、軋轢が行き交っていることを知っている。

直接そのことは口にしたくなかった。腹の中にお互いに一物ある。西郷は、嘘を吐くことが巧みでなかったし、山県は巧弁の方だが、西郷の大きな眼玉には、腹の黒いところを見通されているような気がする。

山県が、いま西郷へ言いたいことは、三百余人の薩摩勢は、もはや会津攻めに必要ない、ということだった。

ここで三百余の新手に加わられては、長州勢の会津若松一番乗りが望みうすになる。巧弁でもって、薩摩勢を他所へ追っ払わねばならなかった。

「長岡が落ちると、米沢などは、素早く引き揚げたので、これからは、庄内攻めが難しくなりましょうな」

と、ちらちらと、西郷の眼をぬすみ見ながら山県は持参の葡萄酒をあけた。

「まあ、西郷さんのことだ、米沢がいかに防衛陣を張っても、一思いに踏み潰されるだろうが、しかし、やつらも、何しろ上杉謙信以来の家柄じゃ。それに、あそこの鉄砲隊は強い」

「聞いています。じゃけんど、上杉の鉄砲は火縄銃での、何じゃら車懸りの陣とか、大層な名前がついちょっても、火縄銃では、ウィンチェスタにはかないもはんど」

「むろん、そうだ。だが、御藩は、何がなんでも庄内に攻めこまんことには、武士の面目が立ちませんな。江戸では、三田のお屋敷を焼討ちされたそうだが、その怨みが」

「私怨ではありもはん」

西郷は突然、割れ鐘声を出した。戸口に控えていた番卒が、驚いて飛びこんで来た。西郷はこれに、手をふって、よかよか、なんでんなか、と退らせると、

「私怨ではごわはんが、庄内を討たんことには、二才共が、おさまらんごわんそ。そこで願いがありもす」

「如何なことですか」

「もはやこの越後では、加勢の人数を必要とせんように見受けもす。されば、このまま、庄内に向けるつもりでごわす」

山県はほっとした。かれは弛む頬をせいぜい引き締めて言った。

「それはよいお考えだ。庄内藩は手強いから、生半なことでは……」

「ついては、なお当地に在るところの兵どもから若干、お借りしたい。もはや、こちらでは

残敵を掃討するだけでごわそ」

「そうでもないが、まあ、宜しいでしょう。荒ヶ関の方へ行かせましょう。会津若松を陥すのは、それほど人数がなくとも大丈夫ですからな。もはや会津の手並みは知り申した」

山県は腹の底から揺り上げるような笑いを吹き上げた。

西郷が庄内に向かってくれれば、たとえ、戦さが困難なものに直面しても、山県の知ったことではなかった。

山県が薩摩との微妙な関係について、多々考えていたことは事実らしい。両者が敵になることはお互いにうすうす察しながら、目的の前には、やむなく手を握っているという気持があったのは否めない。

山県はこう書いている。

――従来とて、余は勉めて薩長の軋轢を避けんとし、長州の隊長らに向かひて、注意を加はるに怠らざりしも、西郷に面会して互に杞憂を叙べたる後は、一層此点に注意することになれり。

去れば壮年血気なる長州人の中には、余の隣人に譲歩すること多きを慨し、窃かに不平を抱きたる者も少なからざりし由。余は後に至りて、始めて之を聞きたり、思ふに左もありしことわりなり、然れども当時薩長をして互に相軋轢せしめたらんには其の結果は果して如何なりしたるべきや……。

と。

西郷とともに心配したのは、国家のためだと、のちに書いているのが、とってつけた感じだ。薩摩と長州は、おのれの勢力の伸長だけが、気がかりだったのだ。山県にしてみれば、いまごろのこのこ来やがって、いいところを攫われてたまるか、という気持だったろう。

十五日、長州勢は、新発田藩兵に先導させて赤谷から新谷へ殺到している。

若松城下

一

この慶応四年（明治元）の夏は、会津若松の人々には特に暑いように感じられた。二月に藩公肥後守容保が帰国して以来、日増しに危機感が盛り上がり、緊張を強いられるようになったためだろうか。上方や江戸からの帰国の人数で城下が膨れ上がったせいもある。会津藩士とその家族ばかりでなく、敗戦の他藩士の流入もあった。幕府の旗本なども総野の戦いに敗れて逃れて来たし、大名とその家臣たちが会津藩を頼ってやって来た。

かれらの多くは、会津藩の立場を理解していたし、共に闘うことを望んでいた。薩長の狙いが会津藩の潰滅にあることを知るだけに、同情とともに、城を枕に討死にするには武士としてふさわしい場だという認識もあった。

彰義隊などは、上野の山に籠っても、そこは寛永寺の境内であって城ではなかった。諸国寺院は城を模し出城などの役目をなすように工夫されていたが、江戸ではその必要がなかったのだ。敗残の旗本たちは、〝城〟に拠っての闘いに信仰に似たものさえ抱いていた。それ

は祖先の三河武士の誇りと意地の再現があったかもしれない。会津を頼ってきた佐幕派の大名たちも、同じような心持が窺われるのである。

だが、会津藩では慎重だった。頼ってくる者を、誰かれなしに受け入れたのではない。ことに当初は恭順の姿勢を崩せなかった。錦旗に対して抗戦する気は主従ともになかったからである。

薩長に牛耳られているとはいえ、奥羽鎮撫総督は節刀を受け錦旗を掲げている。天皇の命令による東下なのである。これを撃攘する気はなかった。鎮撫とは叛乱に対するものであり、叛乱のないところに鎮撫はない。会津藩としては罪を犯した意識はなかった。したがって、冤罪を雪らすのが先決だった。そのためには、敗兵を召集しているという誤解を受けてはならなかった。

旧幕府の古屋佐久左衛門や今井信郎に率いられた衝鋒隊に対しても、領内にとどめることを憚った理由はそこにあった。かれらは三月上旬、野州梁田の戦いで敗走して若松にやって来た。登城を許されて容保に拝謁。城下の興徳寺で同志の戦死者の追悼会を行なったのち、信越方面へ向かっている。

鎮撫総督府下参謀世良修蔵の真意が〝奥羽皆敵〟とするにあることが露見して、仙台藩士らがこれを斬ったことで講和が絶望となり、決戦態勢に入ったのだ。

就中、扱いに苦しんだのは、徳川慶喜の実家である水戸藩の人々である。

天狗党の内訌がまだ尾を引いていて、一律に扱えなかった。藩内が二つに分かれて反目抗

争すること仇敵のごとくであり、どちらに与するわけにもいかなかった。

まず、結城（諸生）党と呼ばれる朝比奈弥太郎や市川三左衛門らに率いられた七、八百人の水戸人がやって来たとき、応援の心情は有難いが、恭順の意を誤解されるおそれがあるので、退去して頂きたい、と厚謝温言をもって頼んでいる。

朝比奈らは、その意を諒として、会津領内にとどまることなく、越後に赴いたのである。

それから程なく、反対党がやって来た。いわゆる藤田党である。かれらはこの動乱の中で藩内抗争しか眼中にないもののごとくであり、「やつらは何処に在るか」と、いきまいて押しかけて来たのだ。国境いを守っていた会津藩士はこれを領内に入れなかった。藤田党はやむなく勢至堂口に屯集して、代表として、重立った者六、七人が陣営を訪れると、「われらは藩命を受けて参った」と、私怨私闘ではないことを強調した。「結城党の連中をお引き渡し願いたい」

「当領内に水戸藩士はいない」

と、答えたが、かれらは納得しない。

「会津応援と称して参ったはずだ。たしか七、八百人はいたはずである。われらは藩命によって追討に参ったのであるから、このままでは戻れぬ」

と強硬だった。勢至堂口の責任者は木村熊之進だったが、生憎と不在だった。一応、水戸藩士たちには引き取ってもらい、後刻責任者より返事をする、といって帰した。

熊之進は連絡のことがあって、御霊櫃峠に行っていたのだが、急報によって戻って来ると、

数人の部下を伴っただけで水戸兵らの屯集する勢至堂口の村へ降りていった。

村では水戸兵らが炊事をしたり酒を飲んだりして、気勢をあげていた。

木村熊之進は本陣に連れてゆかれた。

「結城党は謀叛人どもである。貴藩の立場はわかるが、お引き渡し願いたい」

言葉は丁重だが、御三家を笠に被た威嚇的な態度だった。すでに御三家の威光はなくなっているのだが、前将軍慶喜の実家であり、肥後守容保が慶喜の勘気を蒙っているということが、かれらを威丈高にしているのかもしれなかった。慶喜の立場を苦しくしたのは、容保だという非難さえ一部ではあった。

だが、会津藩士にしてみれば、いまこそ挙藩一致して、敵に当たらねばならないのに、藩内抗争に終始している水戸家中の態度こそが、徳川幕府の弱体化を招いた一因でもあるという思いが強い。

慶喜は一ツ橋家に養子に入っていて、それから将軍になったのだが、十四代の後嗣争いのときには水戸藩が大きく動いている。周知のように紀州の家茂に敗れたのだが、これも家中の結束が足りなかったからではないか。いつまでも内部争いを続けている愚に気がつかず、あまつさえ、その尻を持ちこんでくる。

木村熊之進は怒りを抑えて言った。

「仰せられるとおり、たしかに朝比奈どのをはじめ一行が参った。当家への応援ということであった。だが、そうであれば尚更のこと、他藩の兵を入れたとなれば恭順の意志を歪曲さ

れても申し開きは利かぬ。されば、事情を申して領外へ退去してもらった。したがって、会津領内には、かれらは一兵たりとも存在しない」

熊之進としては、正確に納得いくよう説明したつもりだが、かれらの表情には疑惑が濃い。会津藩がその士道からしても、意気地なく恭順開城するとは思えない。当然、薩長を相手に闘うにちがいない。とすれば、味方は多いほうが有利になるのだから、どういう事情でも、やってくる者を拒むはずがない、という見方をしていた。

七、八百人といえば、大部隊である。たしかに大いに戦力になろう。だが、それを拒むところに会津の士道があるのだ。それがこやつらにはわかっていない、と熊之進は思った。

「もし、だ。もしも戦さということになれば弊藩の立場を理解して一臂のお力を藉して下さるとあれば、受け入れるに吝かではあるまい。だが、藩公も王師に抗するの意なきところを太政官に建白なされておる。もしも他藩の兵を入れたとなれば、この歎願書が嘘になるのではないか」

縷々として説明したが、まだかれらが納得する様子がなかったので、とうとう熊之進はこう言ってしまった。

「かように申してもお疑いなれば止むを得ぬ。領内に入って、かれらを捜索なさるがよい。それがしが御案内仕ろう」

こうまで言われると、さすがに疑い深い水戸人も納得したようだった。

「なるほど、事情はよくわかった。貴殿の申されるところはわかったが、われらも藩命によ

って罷り越した者、このまま、帰国は出来ない。一応、御城下に参りたい。さすれば、御領内に朝比奈らがいないことを確かめたことになろう」

かれらの立場も同じ武士として、熊之進には理解出来た。藩命は果たせなければ切腹ものである。

重立った者数人と一隊の兵を伴って熊之進は若松城下に来た。むろん、城下にも郊外にも結城党の姿はない。得心がいったように、水戸兵たちは引き揚げていった。

会津若松を経て越後に転戦した諸藩の将士は尠くない。前記の連中のほかに、桑名藩の松平越中守定敬とその家臣たちがいた。定敬は容保の実弟である。牧野氏に代わって京都所司代の任にあったために、長州や討幕派浪士たちの恨みを買い、東征軍によって桑名の城と城下も焼き討ちされてしまったのだ。

城を失った主従数百人が目ざしたのは越後の柏崎である。ここが桑名藩の飛地だったことも因縁めいている。会津若松にいったん入った桑名主従は越後街道を抜けて柏崎へいったのだが、長岡戦争の敗北は、主従をふたたび会津へ呼び戻すことになった。

定敬主従のために会津藩では郭内の興徳寺を宿舎として用意した。

長岡藩の牧野公一族は鶴ヶ城の東南郊外青木村建福寺を宿舎としていた。河井継之助が只見の塩沢村で憤死しなければ、建福寺に来るはずだったのである。

二

会津若松城下を経由した大名は他にも多い。老中を辞任した小笠原壱岐守長行もその一人である。長行は肥前唐津六万石の主殿頭長昌の妾腹ながら長子であったが、長昌が逝去したとき、わずか二歳で病弱でもあったので、養子が嗣いだ。小笠原家は不運というべきか病弱な人が多く、次々と死んで、四人も養嗣子になっている。

幕末の長国などは、むしろ長行よりも二つ歳下だった。長国の養嗣子に迎えられた長行は、のちに認められてとんとん拍子に老中まで出世したものの、とうとう唐津六万石の主人にはならぬままに終わった。幕末の人材登庸で檜舞台に躍り出たのだが、それが流亡の原因となった。ここに長行の不幸がある。養父の藩主長国は、長行を西軍に売り渡すことで保身を計ろうとさえした。

長行は危険を察知して江戸屋敷を夜陰脱出して会津へ奔った。唐津から長行引き戻しの命令を受けて来た老臣は藻抜けの殻になった津川高橋の下屋敷で切腹している。長行は妻と妾を本所の名主に預けて江戸を脱出した。

長行は文字通り孤影であった。従者を三、四人連れただけで白河の間道より入って来たという。前閣老ともあろう者が、この零落の姿には、会津藩でも同情を禁じ得なかった。長行は三好寛助とか山中静翁とか変名して追捕の手を逃れて来ている。徒ノ町の御薬園を宿舎と

したのだが、尻が落ちつかず、米沢を抜けて仙台へ奔っている。

桑名定敬とは違い、かれは闘う気はなかった。ただ逃げるだけだった。

同じ老中だった板倉伊賀守勝静も慶喜の大坂脱出の供をして東帰したために、備中松山の城へ帰ることもならず、そのまま漂泊の身となってしまった。小心で我儘な慶喜は、大坂脱出の際、容保や定敬のほか勝静その他閣僚らに供を命じていながら、江戸に着くと掌を返したように容保に登城を禁じるなど無責任なふるまいだった。忠誠を尽くした揚句に、古草履のように捨てられてはたまったものではない。

伊賀守勝静はその子兼之助とともに江戸を脱出して日光へ奔った。なぜ日光を目ざしたのかわからない。東照宮に立て籠る肚裡だったのだろうか。だが、西軍総督府は水戸人で西軍の手先となった香川敬三を軍監として彦根兵三小隊に大砲一門を率いさせて日光を襲い、伊賀守勝静を捕えている。この隊には旧幕府の寄合岡田将監の兵が若干加わっていたのだから、元老中たる身がほとんど身内から刃を向けられたようなものだった。

伊賀守は宇都宮藩へ幽閉され、家来は壬生藩へ預けられるという憂目を見た。かれが脱出できたのは、四月十九日、大鳥圭介の軍と桑名兵や土方歳三らの連合軍が宇都宮を襲撃して勝ちをおさめたからである。

伊賀守は日光警備の会津藩家老萱野権兵衛と五十里駅で会い、会津若松へ案内された。日光山の管長大楽院が神輿の護送を頼みに来たのも、このころのことである。山王峠の南口には陣将として若年寄山川大蔵がいて大鳥圭介らの会津入りに便宜を計っている。

ともあれ、こうして会津入りした伊賀守勝静は、若松城下の天寧寺町浄光寺を宿舎として与えられた。家来とては従者だけの身で、会津藩にとっては、単にお荷物でしかなかった。伊賀守は会津では徳山四郎右衛門または安井八郎と変名している。前記の小笠原長行にしても変名していることを考えると、元閣老という身分は、西軍にとっての狙い目であり、それだけに必要以上に身の危険を感じていたのであろう。

そのほかにも、元白河十万石の城主であった阿部正外（退隠して葆真）父子が徒ノ町願成就寺にいたし、上総請西藩主の林昌之助や幕臣で若年寄並をつとめた竹中丹後守なども会津へ来ている。

こうした人々には、それぞれ立場が微妙に違っていて、西軍への対応の仕方にも差があった。西軍の方ではどういう基準で追討の対象にしているのか、佐幕派としての貢献度の如何によるものというのが客観的には考えられても、私的な薩長の憎悪の程度が本人たちにはわからないのだ。

その不安が、会津にとどまるべきか、さらに北へ逃避するかで、かれらを落ち着かせなかった。

会津盆地の命運は旦夕に迫っているといってよかった。どの峠が最も早く破られるかが、関心事だった。

白河が奪われ、三春が寝返り、二本松が陥ち、福島までが一度も闘うことなく開城したとなると、東方への出口は完全に失われたのであった。

関東各地での佐幕派諸隊は七月末までにあらかた敗北し、わずかに山川大蔵が五十里近傍で布陣しているくらいだった。ために南会津への侵入は阻まれてはいても、四囲の防壁は一ヶ所が破れれば奔流のように西軍が雪崩こむことは明らかだった。

八月半ばすぎの暑い日だった。鮎川の屋敷に親類の飯田兵左衛門がやって来た。兵左衛門は剛毅で一徹な男である。四十二歳で軍事奉行の要職にあった。

「兵馬、工合はどうだ」

と、心安く庭の方から入って来た。重そうに丸いものを抱えている。

「どういうことはありません。そろそろ出陣を願い出ようかと思っています」

北越戦線で傷ついて兵馬はふたたび城下へ戻っていた。爆風で飛ばされただけで、若い体力が、治癒を早くしていた。

「それは何です、まさか敵の首級ではありますまいが」

「ははは、みんなそう言うぞ」

「長州の山県か誰かの首だったら祝盃ものですが」

「こいつが、いつから、そのような冗談を申すようになったか。鮎川の兵馬は堅物で冗談口一つないとうちの女どもが申しておったが、越後で大分変わったの」

「そんなことはありません、変わったとすれば上方でしょう」

「こいつは首ではない。大筒の玉だ」

「破裂弾ですか」

「そうだ、破裂すると、赤い実が飛びだすぞ」

兵左衛門は風呂敷を解いた。中身は見事な西瓜だった。

「ははは、それ、瞞されおった。ははは、見舞いじゃ、一日も早くよくなるようにな。冷やして喰え」

「忝けのうございます。わざわざお見舞いまで頂いて、申し訳ありません」

「なに、ついでじゃ。十八倉にゆく途中じゃ。道ついでに、おぬしのことを思いだしたのでな。はじめは手ぶらでくるつもりだったが、途中で八百屋が車を曳いてくるのに出逢うたのさ、西瓜ももう末成りじゃろというと、不味けりゃお代は要らんと申すで、貰うて来た。喰うたあとで美味かったか不味かったか、知らせい」

それだけ言うと、忙しげに腰をあげた。笑い声だけが後に残った。

兵馬は言われた通りに西瓜を井戸に吊るした。こうしておけば半刻ほどで冷たくなる。

八月の声を聞いたというのに、暑気が甚だしいのは、湿気が多いからかもしれなかった。この年は、特に雨が多かった。梅雨の入りも明けもわからないほど、雨が続いた。はじめこの陽気では、すり傷が化膿するおそれがあると医者に言われたのだが、手当てがよかったのか体力のせいか、思ったより治癒が早かったのは有難かった。

前に白河で傷ついて帰郷しており、今度で二度目だ。恥ずかしい思いがつきまとっている。いさぎよく死んだ方がどれほど気楽だったか。その一方で、四辺の西軍が会津に迫ってくる

ことを考えると、早く復帰したかった。

才次郎も爆風でやられて、一時的に失神していたのだ。それでも暫く、耳が聞こえなくなっていた。本復すると、勇躍して、また出陣している。

その若さが、兵馬には羨ましかった。

「くれぐれも、気をつけろ。白虎隊は、殿さまの護衛ということに決まったのだべし」

「寄合白虎はなじょな気持でいるんだべか」

一度戦線に出ただけに、才次郎はみんなの気持がわかっている。

西軍は早晩、城下に迫って来よう。その時に死に働きしなければならないのだ。兵馬は大きく手を振って、庭の中を歩きだしたが、少し外へ出てみようと思った。

医者はまだ数日は大事にするようにと言っていたが、少しでも足を馴らした方がいい、と思った。その方が体力もつく。

兵馬は浴衣を軍衣に着替えて外へ出た。ギラギラした陽に、一寸眩暈をおぼえて扇子を頭の上にかざした。なるべく日陰を選んで歩くことにした。腰の刀が重く感じられるだけ、体力の弱まりを感じた。

兵左衛門のいった十八倉というのは藩の米蔵である。城南外郭内にあった。米蔵は五ノ丁にもある。

戦さが迫ったので、米蔵には米俵がぎっしりと詰められている。何よりも兵糧のことが大事だったのである。

兵馬が歩いてゆくと、この米蔵から盛んに米俵を運び出して運搬していた。景気のいいかけ声をかけて、人足たちが運んでいる。

兵左衛門が嗄れ声を張り上げて盛んに指図しているところだった。

「さきほどは忝けのうございました」

と、兵馬は近よって声をかけた。

「西瓜は冷やして来ました。戻ってから頂きます」

「なんだ。大丈夫なのか、まだ気をつけた方がよいのではないか」

「いいえ、足馴らしをしなければいけませんから。それにしても、この米はどちらへ運ぶのですか」

「城内へな。前々から申していたのに、頭の悪い連中が、何のかんのと申して、邪魔をしおる。考えてもみよ、もし籠城ということになれば、ここの蔵に米を入れておけば敵の食糧になるだけではないか」

その万一の心配ということが、人々には、大げさに感じられるらしかった。なかには、兵左衛門を誹る者があるという。籠城などの事態になるはずがない。国境いで敵を防げばよいのだという。籠城の心配を言いたてるのは徒らに軍の士気を沮喪せしめるものだというのである。

「馬鹿どもは、背中に火がつくまで、わからんのじゃ」

軍事奉行の権限で城中へ運びこませているのだという。兵馬は心配になった。

たしかに米俵をどんどん城中へ運びこめばまるで城下に敵が迫っているような錯覚を起こす向きもあり、不安が広がる。この様子を見守る人々の表情にその不安がある。

町筋をものものしく武装した修験者の一隊が通っていった。異様な感じだった。これは一種の義勇兵で、領内の修験者たちが申し出て、一隊を結成して国難に当たるというものであった。修験者はもともと山谷を獣の如くに走り、冷寒飢餓に耐えて修行することで常人以上の力を持っている。戦さとなれば役に立つかもしれない。義勇兵は修験者ばかりではなく、神官僧侶にも及んでいた。

農兵隊結成

一

幕末の世情不安は、民衆の意識を変えるようになった。きっかけは黒船の出現にあるのだが、幕府の弱体化に伴う無法者の横行が、乱世への危惧を感じさせた。農民の間に剣術の一手二手は習得しなければという機運が、各地で盛り上がっていたのは事実である。

多摩地方の新選組の母体となった天然理心流の近藤道場などの殷賑ぶりもその典型であり、長州における奇兵隊に大勢集まって来たのも、侍になれる、という憧れが情熱をかき立てたのだ。各藩でも危機に備えて農兵を起用したところが多い。幕府の郡代などは積極的に農兵を組織している。

動乱は士農工商の垣根をとり払う作用をした。侍になれる好機だという思いが、鍬や鋤を捨てさせたのだろう。

四境に敵を受けることになった会津藩が庶民の協力を求める布告を出したのは、むしろ遅い。遅すぎたくらいであった。会津武士の誇りといさぎよさが、それを阻んだのは疑いない。

敵が城下へ攻め込んで来てからも、婦女子の戦線参加を頑固に拒む人々が多かった。

白虎隊ですら、その資格を当初の十五歳から十六歳に引き上げて、年少の者を危険に近づけまいとしたのである。むしろ、それを不服として年齢をいつわってまで入隊した者も二、三にとどまらない。

会津に生を享けた者の誰もが、危機を感じ自ら進んで義勇兵を志願する者が尠くなかったことが、いわゆる庶民の敢死隊を結成させる原動力になった。

「農工商といえども、智略あり勇壮にして士分に劣らぬ者あり、登庸して士族に加えるの途を開かれんことを」

と、提言したのは、土屋鉄之助であった。

鉄之助は六日町御門の御番所に隣接した屋敷で生まれた。父親は百五十石（のち二百石）を頂戴する藩公御側医師の一座で、すでに七十古稀に達しているが、矍鑠たるものだった。鉄之助の壮軀もこの父譲りで、かれは医師になるより槍の腕が自慢だった。

長く京都に詰めていて、鳥羽伏見でも活躍した鉄之助は、帰国後、新しい軍の編成で新練隊の隊長に任ぜられている。五月以来の白河口の攻防戦でも新練隊を率いて戦ったが、衆寡敵せず、敗退せざるを得なくなったことは前に述べた通りだ。

仙台藩やその他の同盟軍との共闘で敗退したのだ。会津藩兵のせいでも、況や鉄之助と新練隊が特に弱かったわけでもない。だが鉄之助には、おのれの指揮と部下の間に齟齬を感じた。結果から見れば、士気沮喪で充分の働きがなかったといえる。

土屋鉄之助の建白には、

「――戦に臨んで挺進し、死を顧みざる者凡そ千人を選抜して士分に登庸……」

とある。鉄之助は、新練隊の指揮を副将に頼んで帰城し、八月三日、特に目通りを願い出て、建議したのである。

肥後守容保は、伝統に固執しなかった。いまは苦境の打開策があれば逡巡するときではなかったのだ。発令は翌四日であった。

――急御用ニ付敢死之士御募リ町在ノ者タリトモ士中ニ御取立御知行百石被下筈、鉄砲刀槍有余之者暫御借上。

というものだ。知行百石とは思いきった高禄である。本来、会津藩では家老も含めてすべて御蔵取り、という現米支給で、知行地は持たない。知行高とは旧来の習慣で家禄のことをさしている。

原則として千石の知行に対し、四公六民の割合で、米四斗入り千俵の支給になるわけだが、幕末になって財政が窮乏してくると、千石に対して六百俵余、他に金数十両で我慢しなければならなかった。

これは実質的に三割余の減知なのだが、〝借知〟（お借上げ）と称し、何れの藩でも財政の破綻を救うために恒常的に行なわれるようになっていた。前に述べたが、河井継之助の思い切った食禄改正（上下を百石に近づける）などは、他にあまり例を見ないことであった。

「士中に取立てて知行百石」というのが魅力的であったのはいうまでもない。

すでに農兵の制度は実施されてはいた。これは当初の目的が、工兵輜重兵の養成のためで、橋梁や胸壁、弾薬食糧の運搬などの必要からである。もっとも、その適任者や、よく働く者には帯刀を許し、鉄砲の練習をさせたりした。

この農兵らは、領内各郡より男子二十歳より四十歳に至る強壮の者二千七百人を募り、四郡各組に分けた。各組農兵の上に各村の郷頭、帳書、肝煎などを置いて統制し、これには帯刀を許し、さらにその上に支配役、帳付およびその見習いを置いて指揮させた。これらを管するのは藩士たる代官であり、役員の数は三百八十人いた。

このときは、〝農兵〟だから対象は農夫にかぎったのだ。在所にいて、農業に従事しながら、閑を見て操銃の練習をする。

ただし、操銃などのために農業を抛棄してはならないと厳命している。さらに動乱を幸い浮浪の徒や暴徒が村に入ってくるが、それらの者に煽動されないようにと、注意を与えている。

土屋鉄之助の建議による新規募集の対象は、したがって農民だけではなかったのだ。修験者、山伏の徒が集まって組織された修験隊のほか、相撲取りや力自慢の者ばかりを集めた力士隊も出来た。力士隊は五月の白河戦に出たが、生き残りは転じて越後でも戦っている。

また、山野の跋渉と鉄砲に熟練した猟師をもって猟師隊というのも作り、これは四、五月のころ野州の戦いで活躍している。かれらの所持する鉄砲が火縄銃や燧石式の旧式のもので

あり、西軍の持つライフルの前には、効果が薄かったのはしかたがない。

また、領内の各寺院から僧侶も衣の袖を絞り、襷がけ、あるいは腹巻など小具足を着込んで参戦した。人数は一隊を構成するには不足したので奇勝隊に編入されることになった。

なお、新たに鉄之助の建議で募集に応じた人々が当初から百石貰ったわけではない。その功によって、身分は士中、禄は百石を給され得る、ということである。このお布令の反響は大きかった。慶応四年（一八六八）八月初旬という時期が、四面楚歌の危機感がみなぎっていたせいもあろうが、一村あげて適齢者が応募して来たところもある。

募集に応じた農町兵の中から二百五十人を選抜して、まず独礼の資格を与えた。これは士分を意味する。かれらは敢死隊という隊名を与えられて、訓練を行なうことになった。

こうした臨戦態勢以前に、会津藩では、地方家人の制度があった。

これは土佐などの古来から行なわれた一領具足などと同じく半士半農であり、保科氏入部以前の加藤氏や蒲生氏、あるいはもっと以前の蘆名氏の家臣で引込浪人となった者の子孫と伝えられている。各郡の村落に住居して、禄米の代わりに幾何かの土地を給されて代々世襲している。これは知行ではなく、自ら耕作するもので、自給自足である。したがって、一般の農民とは扱いが違った。

農耕のかたわら、槍刀火術を練習して、一朝事あれば、具足をまとって、若松に駈けつけることになっている。土佐の一領具足は、おおむね長宗我部氏の家臣たちだったが、乱世には常に具足を槍にくくりつけて田の畔に立て、城で危急の太鼓や法螺が鳴ればその具足をま

とい、槍をかいこみ馬に飛び乗って、駈けつけたという。

江戸時代になると、さすがにそうした風習はすたれていたが、閑暇に、刀槍をふるい、身体を鍛えるという心構えは失われていなかったのだ。会津藩では、かれらをもって一隊を編成していた。名称は正奇隊である。すでに白河戦でも勇躍出陣して戦っている。

若松城下には、したがって、さまざまの隊士が往来していた。

それぞれ隊旗が違うのはむろんだが、服装も異なっている。城下ばかりでなく街道の要衝も宿場も、軍兵の姿であふれることになった。

だが、八月上旬には、まだ誰も西軍が城下に雪崩こんでくるとは思わなかった。会津盆地を囲む山々の峰は、峻烈に聳えて、西軍を駆逐してくれると信じていたのだ。

城下の侍屋敷が並ぶお郭内はむろんだが、商家の多い七日町でも、人々は家を捨てて避難しようとしなかった。

「御国（会津藩）が潰れるはずがない」

と信じきっていた。未だかつて、そうした戦火の経験がないだけに無理もないことだった。名家として栄えた蘆名氏が、伊達政宗に滅ぼされたのは三百年も前の話であったし、当時は会津若松という名もなかった。お城は黒川城と呼ばれていて、ろくに城下町も出来ていなかったのだから、城下人としては戦火の洗礼は浴びたことがないといっていい。十数代にわたる平和な暮らしは、危機感にもまだ甘い部分を残していたのだ。

二

鮎川兵馬の耳に飯田兵左衛門の言葉が残っていた。兵左衛門は一言居士の渾名があるほど一徹者で、一度言い出したら後へ退かない性格であるのも事実だったが、城内ではさまざまの意見が火花を散らしている。誰もが御家のことを思い、この危機の打開策をそれぞれに感じていて、それが議論百出になるのはしかたのないことだった。

重役たちの間ですら、意見が食い違うのだ。誰が先見の明であるのか、その時になってみるまではわからない。少数意見は、こういう場合、非難を浴びて葬り去られるのである。兵左衛門のような一徹者でなければ、沈黙するか、渋々、大勢に従う。

「わしは面の皮が人並以上に厚いでの」

と、本人は呵々大笑するが、上役にでも噛みつく気質は、煙たがられることが多く、いつか立場を失うのではないかと、兵馬には心配だった。

相手が年長の老人なので、若者が忠告するわけにはいかない。兵馬は、たしかに兵左衛門の言うように、急速に大人びていた。京から江戸と、動乱の中で多くの経験を積み、戦場で敵を殺傷したし、おのれも傷ついて、療養の床に臥したりして、思慮も深くなっている。自分でそう認識するのだ。もっとも年長者から見れば、未だしであろうが、少なくとも、藩公の護衛として上洛した当時の兵馬ではない。

もっとも、あれから、まる五年経っているのだ。多感な青年が動乱を経て変わらなければ嘘だ。

兵左衛門と会ってから兵馬は七日町筋へ出た。土蔵造りの重厚な店が並んでいる。人々が忙しく出入りしていた。往来も活気がある。

兵馬はある店の前に佇んだ女性を見て、足を止めた。北原半介の妹の豊だった。

ほとんど同時に、豊の方でも兵馬を見て、かなり離れていたにも拘わらず、丁寧にお辞儀をした。

兵馬は会釈を返し、微笑を含んで近づいた。

「貴女でしたか、久しぶりだ」

「御無沙汰して居ります。お怪我をなさったと聞いておりましたが、もうおよろしいんですの？」

「この通りです。今日にも、復帰を願い出ようかと思っています」

「よかったわ、ほんとうに、お元気そうで」

と、豊は羞じらうように頬を染めて言った。

たしか十八歳になっているはずだった。以前から好意は持っていたが、あまり口はきいたことがない。ひところ、半介の家に始終遊びにいって、目あてが違うんでねか、と揶揄されたことがある。そのときは若かったせいもあり、ひどく腹を立てて暫く絶交状態になった。少年の域を抜けない年ごろだっただけでなく、会津藩士の子弟は軟弱さを恥とする教育を受

けていた。男女の交際は難しかった。姉妹とでも往来で立ち話をすることを許されないほどだった。

それは、訓育を受ける年齢ばかりでなく、長じてからも、武士としての矜持につながった。女性の方でも、たしなみのある者は、軽々しく歯を見せない。慎しみが美徳とされていた。

だが、未曾有の事態はそうしたことに拘泥してはいられない状況を作りだしている。従来までの男女の語らいを不謹慎としていては、戦備もととのわない。士農工商の垣までとり払われる時代では、おのずから、それらの規制も追いやられ、倫理感も変容してくるのは自然の成り行きだった。

一部では混乱と頽廃も免れなかったが、それだけに、教養の個人差が出てくるのである。

兵馬はもっと話していたい気持を抑えて別れようとした。

そのとき、店の中から、二人の若い娘が出て来た。豊は先に出て彼女たちを待っていたらしい。

娘たちは、西郷頼母の長女と次女だった。細布子と瀑布子である。十六歳と十三歳でよく似た姉妹だった。頼母にはこの下にまだ三人の娘がいる。一番下は二歳になったばかりだ。

「針と糸をもとめて参りましたの」

と、細布子が長女らしく、はっきりした口調で言った。

「木綿針ですの、すぐ折れてしまうので、いっそ沢山もとめました」

兵馬のけげんな表情に応えるように、豊が口をはさんだ。

「わたくしたち、だんぶくろを縫っているんです、呉絽服は地が厚いものですから、なかなかはかどりませぬ。でも……」

会津藩でもこの春から欧米の軍制に見習って、活動しやすい筒袖だんぶくろの生産を急いでいた。

老人たちの中には、そんなものが着れるかと、毛嫌いする者もいた。実際、長年着物で過ごして来た人々には、筒袖やズボンは活動的とわかっていても窮屈でしかたがないのである。着物の袖は括ればいいし、袴の裾も括るように紐布を通したものもあり、それなりに古来工夫されている。伊賀袴や類似したものに、いわゆるモンペなどと称される、すぼまったものもあって不自由はない。その上に具足をつければいい。重代の鎧をまとうことに武士らしい誇りがある。この誇りが士気に結びつくと信じている人も尠くなかった。

ただ一つ、その頑固さの泣きどころは、山野を走り廻り、樹下石上、草の中を這い廻ったりするのに、着物はあまりにも弱いことだった。

呉絽服のラシャ地なら、岩肌でこすれても容易に破れないし、雨にも強い。戦いが冬に入れば、もっと大きな効果を発揮するに違いなかった。

従来の着物の縫い方に馴れていても、洋服には、誰もがとまどった。運針が容易でなかったし、固い生地を、さらに折り返して厚くなったところを二重に返し縫いをやらなければ、頑丈な軍服としては完全でなかった。

女たちの繊手では大変なのだ。鉄ゴテで火熨斗するように折り目をつけて、一針一針縫ってゆく。数千人の軍服を作るという作業は、募集した農家や町家の女性たちの手だけでは間に合わず、侍の家人たちも、奉仕を買って出ていたのだ。

豊は西郷家の姉妹と書のほうで親しくしていた。中野竹子のところに通って机を並べている仲で、相談しあって呉絽服を縫うことにしたのである。

そのため、書のほうはお休みです、と三人は顔を見合わせるようにして、くすっと笑った。三人と別れてからも、兵馬の瞼に明るい娘たちの表情が揺曳していた。こちらの気持まで明るくなる。三人とも華やいだ雰囲気で、それぞれに美しく魅力があった。

京や江戸で、何人かの女を知った兵馬ではあったが、この娘たちは慎しみ深く若さが溢れて清潔感に満ちていた。他国の女を知り死線をくぐって来たことで、さながら兵馬は、一種のみそぎをした後のような清々しいものを自覚していた。昔の少年時代の、希望に胸をふくらませながら日新館に通っていたころの自分に戻ったような気さえする。それはやはり、生まれ育った会津若松の城下のたたずまいが齎すものかもしれなかった。

竹刀と道具を担いで通う道すじに、ふと沈丁花の匂いがして、思わず足を止めたことがある。その清新な目ざめるような思いは、美しい女性とすれ違ったときのときめきにも似ていた。

京で振りかえった多感な青春時代は、遠い昔のことのように思われたが、故郷へ戻ってくると、それはつい数年前だったのだと、囁きかけてくるものがあった。

いつに変わらぬ磐梯山の温容かもしれないし、猪苗代の大湖の静かな水面のきらめきかも

しれなかった。故郷の風、といってしまったほうが的確であろう。

会津の山河の中で生まれた兵馬は、他国で受けた傷を癒すのに、やはりこの風に吹かれる必要があったのだ。草木にしても、その土地の土壌でなければ満足に成育しないものが多い。動物でもそうである。それは寒帯と温帯というふうに大別されるものでもない。

人間だけが、それらのものとは別といえないのではあるまいか。生命を持つ物の適応性というものは、概念だけで割りきれない何かがある。それは他国の者が磐梯山を見た場合と、磐梯山に見まもられ、語りかけて育った者とでは、その嵐気に触れるだけでも、大きな違いがあるはずである。

湖水に影をうつす磐梯山には、どっしりとした安定感があり、土地の人間を優しく、力強く、包容してくれるのだ。古い時代に、人々が山の神を信仰したのも、そうした心の安らぎが得られたからにほかならない。

あるいは、保科松平家開闢以来の危難に直面して、神仏にもたのみたい気持が、ことに磐梯の威容を頼もしく思わせるのかもしれなかった。

信仰は、時におそろしいほどの力を生むことがある。人間の心とからだのふしぎさは、医学的に解明出来ない奇蹟を生じることがあるのだ。それは一口にいえば生命力であり、その力の源泉は信仰と信念といえる。

兵馬の場合、おのれを生み育んでくれた会津の山河への愛着が、自分の存在への自覚を促したのだ。

おそらく会津藩士の多くが、同じような心境で刀槍をひっ下げて蹶ったことであろう。

家へ戻ってくると、雪乃がちょうど外出しようとしているところだった。

「何処へゆく」

「中野竹子さまのところへ」

兵馬はいま別れたばかりの三人が竹子に書道を習っていたことを思いだして、書か、と聞いた。雪乃はかぶりを振った。

「薙刀ですわ、早く上達しないと、敵が攻め込んで来たとき、辱めを受けますもの。では、行って参ります」

いそいそとして出てゆく妹を見送りながら、彼女も立ち直ったな、と兵馬は嬉しかった。

決戦迫る

一

雪乃は二十二歳になっていた。この時代の女性としてはすでに婚期を過ぎている。だが、幕末の動乱の波紋は多くの青年子女の生活を狂わしていた。特に会津藩では藩士の娘たちは、婚期を逸した者が多い。千人もの精鋭が藩公容保の護衛として京に出張していたのだ。当然、若者が多かったし、婚約したまま、ずるずると遅れてしまった者もいたし、討死にされてしまい、嫁かず後家になった者も尠くない。

井上丘隅の娘チカなど、その例だった。彼女は婚約者を禁門の変で失い、三十一歳になるのに独身であった。沼沢出雲の二人の姉、ユヤ（二十七歳）とスガ（二十三歳）もそうだった。朱雀一番隊士の小山田大学の娘ミネも三十歳。青龍三番足軽小隊頭の大竹勝左衛門の娘ヤエも三十五歳。竹本登の姉マサも三十七歳。家老の内藤介右衛門の妹は三人いるが、長姉のジュウは二十三歳になっている。青龍三番隊士で木本隊小隊頭の永井左京の姉ヤエは三十八歳になるし、上田八郎右衛門の妹ジュンも三十歳、町野主水の姉フサは三十一歳だ。

こうしてあげれば限りがないくらい、大勢いる。ちょうど、適齢期に国内は内憂外患で房州警備や北辺視察にやらされたりした若者が多いのだ。

従来、十六、七で輿入れするのが普通とされていたのだ。西郷寧太郎の妻ヤホは十六歳である。庄司勇助の妻コトも、柴太一郎の妹の表衣も、朱雀二番士田中隊の柴太郎の妻ヒサも、いずれも今年十九歳だが、それぞれ嫁して二、三年経っている。

持って生まれた運不運もある。誰もが動乱の嵐の中で多少の差はあっても影響を受けていた。

雪乃の場合は、他の娘たちと違って、あやまちがあったために、虚しく青春の刻を過してしまったのだ。六年前のことを、すっかり忘れたといえば嘘になる。だが、忘れようとつとめていた。三田村新蔵の名も、時にふっと忘れることがある。その忘れる時間が度重なり、それが連続してくれれば、完全に忘却の彼方へ押しやることが出来るのだが、十六歳の娘のからだと心につけられた傷は、完全に癒されるのは難しかった。歳月だけが、雪乃の救いだった。

あるいは、彼女が他の男に心を動かせるような機会があればよかったのかもしれない。だが、会津藩のこの時期の情勢と会津若松の城下では、それを望むのは無理だった。

いや、何よりも雪乃の心の問題だった。一人の男に弄ばれただけで、男というものすべてを否定するようになるのは、幼さのあらわれだが、それだけ心の傷が深かったともいえる。雪乃の場合、自分だけの成長ではその傷が消えない事情があった。父の外記が失明したのは

三田村の兇刃の故なのだ。

年老いてにわかに盲人となった父の世話をすることが、おのれに課せられた贖罪だと、雪乃は自分に言い聞かせていた。外記の眼は永久に治らない。病ならば治癒することもある。が、兇刃で傷つけられた眼は永久に光を失ったのだ。それは、雪乃の心の闇ともいえた。

若い娘が、しかし長い一生を暗い闇の底で生きるのはあまりにも哀れだった。外記は一言も娘を責めなかった。それだけがかれの娘への愛情だった。その父の気持がわかるだけに、雪乃は自分の罪を恣に消すわけにはいかないのだ。

どんな動乱の中でも、男女の情感は別物だという見方もある。欲望というものは、あるいはそうかもしれない。だが、雪乃の心の中は、常に自制が作用していた。異性を慕う心の芽を自ら摘み取っていたのである。

藩公容保父子が会津へ引き揚げて来て以来、城下は騒然としてきて、武士ばかりでなく町人たちも武器を買い込んだり家財や家人の避難を考えはじめていた。恐いのは戦火ばかりではなかった。弱い女性や老幼は、侵略者たちの凌辱、暴行を受けるのは明らかなのだ。

城下の女たちの間で、武芸への関心が深まった。もともと尚武の風は藩祖正之公以来、会津藩士風の根幹をなしている。婦女子の間でも武芸の一手二手習得している者も尠くない。

雪乃も小太刀と薙刀を習っていた。兄の兵馬から見れば、踊りをやっているようなものでなし、と揶揄せずにはおれないほどのものであった。藩風は物堅く婦女子に武芸は不必要といわれていたが、男たちの気風の間で暮らしていれば、自然、女性でも武芸に興味を持つよ

うになる。だが、あくまでも、たしなみの域を出なかった。

西軍が大挙して押しかければ、四境に敵を受けることになり、会津盆地が錦旗と数十の大小名の軍勢で埋まることになる。その敵を武士だけで邀撃するのは大変だった。

「女ながら、わたくしたちも、刀を執って闘います」

けなげに闘志を燃やす女たちに対して、しかし、武士の立場ではこれを認めるわけにはいかないというのが、会津士道だった。

「戦さは男がするものじゃ、婦女子の手など借りぬ」

と、突っぱねる。

「戦さの勝敗は時の運。婦女子が加わっていては、あれ会津藩では、女の手まで借りたかと、物笑いにされよう。それは会津の士道が嗤われることである」

というのである。

だが、女性の身として、そんな伝統に縛られているわけにはいかない。参戦しないまでも、敵から身を守らねばならないのだ。我が身を守るための武芸は、誰も文句はつけられない。母は子を、娘は親を、守る義務もある。

戦機が迫るにつれ、雪乃の薙刀の稽古は熱を帯びてきた。稽古をしているときは、それこそ、すべてを忘れられる。

中野竹子の稽古は厳しかった。

歌人としても書家としても一流の中野竹子は、薙刀でも卓抜していた。書道では師の佐瀬

得所をしのぐとうたわれた能筆で、備中庭瀬藩主の祐筆に望まれたほどであった。

前に述べたが、江戸から引き揚げて来た中野親子には、住む屋敷がなかった。父の中野平内がずっと江戸詰めだったためである。

藩士の屋敷の敷地も建物もすべて藩から下賜されているわけだから、恒常的な財政難の会津では、出来る限り冗費を省くために、長期の江戸詰めと京都詰めの場合、城下の屋敷を返上させている。

中野親子のような例は高士（三百石）以上からだが、七百石の西郷勇左衛門はじめ、林権助、小森一貫斎、海老名郡治なども同じだった。一族や知人の屋敷にそれぞれ厄介になっていた。中野親子の寄宿先は郭外の玉木家だった。

この屋敷で行水を覗かれた竹子が、薙刀を持ち出して男たちに斬りつけた話はよく知られている。男勝りの行動だという非難も、臨戦態勢となった今では、かえって頼もしく感じられているのだった。

筆をとり、歌を詠むときは、楚々たる女性の竹子である。日ごろも慎ましく控えめな竹子が薙刀をとると、凛ッとして勇ましく犯し難い美丈夫になるのである。

（わたくしも竹子さまのようになりたい）

雪乃は、彼女から稽古をつけて貰うのが嬉しかった。憧れでさえあった。竹子には十六歳の妹の優子がいる。この姉を持った優子が羨ましくてならなかった。

「雪乃さんはまだ気迫が足りません」

と、厳しく注意をされる。

「槍でも薙刀でも同じです、ほんとうに敵を前にして斬り倒す気持でなければはね返されてしまいます」

女性は手が小さい。薙刀の柄も細身でなければ握れないし、したがって二間柄は無理だった。一間半が限度である。

槍もそうだが、薙刀の場合は殊に石突を利用する。打つ、斬る、薙ぐ、返す、突く、これらの動作を自在に行なうこと、さながら手足を動かすが如くでなければならない。

黒河内伝五郎直伝の穴沢流の薙刀術は竹子が使うと華麗にして凄絶であった。ひらりひらりと蝶の舞うが如き姿態ながら、びゅっと打ちおろすとき、その風を切る音は氷のような冷気を感じさせた。やあーっと大声を発するとき、日ごろの落ち着いた明るく澄んだ娘の声とも思われない凄まじさであった。

竹子姉妹の言葉は江戸育ちらしく、明晰で歯切れがよく、雪乃には音楽を聞いているような心地よささえ感じられた。早く上達して、竹子に褒められるような腕前になりたい、と思うのだった。

二

鮎川兵馬が軍事奉行飯田兵左衛門の左遷の噂を聞いたのは、兵左衛門が見舞いに来てから

すぐのことである。

あのとき、かれが重役たちの考えが浅いと忿懣を洩らしていたことが思いだされた。兵馬の杞憂が当たったのか。敵が城下へ押し寄せて来たときのために、十八倉の米を城内へ運び込んでおけ、という兵左衛門の忠告は、国境いで侵攻を食い止めることが出来るとする人々から、〝要らざる心配〟であり、

「徒らに不祥の言を放ちて軍気を沮喪するもの」

と、非難されていたのである。

軍事奉行を拝命するからには、兵左衛門は西軍の進撃ぶりとその充実した軍備への判断を誤らなかった。が、その慎重論が意気軒昂な人々からは脆弱なものに見られたのだ。

兵左衛門は軍事奉行を免ぜられ、玄武足軽隊中隊頭を命じられたということであった。

これは誰の眼にも左遷であった。兵左衛門の弟の小勝が呼びに来たことで、兵馬はその事実を知った。

「すぐ来てくれぬか、わしの手に負えぬのだ」

と、小勝はいつになく気弱な表情になっていた。三十九歳になっていたが、末弟だけに、小勝から見れば、長兄の兵左衛門は父親のようなものだった。

「酔いどれて手がつけられぬのだ。兵馬を呼べ、兵馬を呼べ、とな、喚くばかりでの」

小勝は砲兵隊士である。兵馬が一緒にいってみると、兵左衛門が真っ赤な顔で盃を傾けていた。

「来たか兵馬」と、眼を据えて、「来いよ、一盞仕ろう」

「随分、過されたようですな」

「なに、一寸だ。兵馬も飲め、これが飲まずにおられるか。兵左衛門、末期の酒だ」

「なんと、縁起でもない。あまり飲み過ぎてはからだに悪い。もうお年齢なのですから」

「年齢だと、馬鹿吐け、わしはまだ、腕に年齢はとらせぬ。それをなんじゃ、玄武隊じゃと。わしは青龍隊に入れてくれと申したが、はねつけられた。なんじゃ、ひとを老人扱いしおって」

兵左衛門は荒れていた。左遷の鬱憤を酔いに任せて、吠えたてる。兵馬は小勝と顔を見合わせた。屋敷の中でなら、どんなに荒れても家財の損害で済むが、戸外で放言するとどんなことになるかわからない。緊迫した空気の中では、誰もが気が立っている。

兵左衛門の地声は、往来や隣屋敷にまで聞こえかねない。

「お説の通りです、私もそう思いますが」

と、兵馬はなだめるように言った。

「意見が上に通らない以上、止むを得ないではありませんか」

「イザとなって狼狽しても間に合わぬのだ。米倉を敵に奪われては、籠城も出来ぬぞ。それがわからぬのか」

「私にはわかりますよ、だげんじょも、頭の固い重役には、その辺のところがわからないのでしょう。もしも国境いが破られるようなことがあったら、万一ということですが、そのと

きは、急いで兵糧を運び入れればよい、そう思っているのではありませんか」
「それでは遅いのだ。何千俵もの米俵を一刻や二刻で運ぶことが出来るものか」
「兄上は中隊頭に任じられたのですから、早く用意しなければなりません。もう、酒はそれくらいで」
と、小勝ははらはらしている。左遷された上に、出陣に遅れたとなったら、今度は切腹ものである。
「わかっとる、わかっとる。戦場に出たら、一番槍じゃ、老いても腕に年齢はとらせんぞ。小勝、もう一本」
「まだ飲むのですか」
「もう一本だ。もう一本。今度は出陣祝いじゃ」
ようやく兵左衛門は現実に還ったようだった。軍事奉行から中隊頭に降等された以上、実力で証を立てるしかないのだ。
さすがに兵左衛門はしっかりしていた。その最後の一本を飲み干してから、具足をつけはじめた、老軀ではあっても、鍛え抜いた体軀は見事で、鋼鉄のような感じであった。
「わしが討死にしても、大次郎がいる。心置きなく闘えるのう。頼むぞ、後を」
「はい。御安心下さい」
言葉少なに、大次郎はきっぱりと言った。兵馬と同い歳だが、まだ童顔を残している大次郎である。日新館で机を並べた仲で兵馬とは親友だった。

兵馬自身も早く戦線へ復帰しなければならない。兵左衛門が支度をはじめたのを見て、辞去することにした。小勝が送って出た。
「助かったよ、兵馬。おぬしが来なかったら、兄者は治まりようがなかった」
「そんなことはありません。あれで生酔い本性違わず、ですよ」
「そんな塩梅だな。ともかく、助かった」
兵馬は兵左衛門に同情していた。軍事奉行の役目は、並大抵ではなれるものではない。その地位を棒に振ってしまった以上、兵左衛門は、あるいは死ぬことを考えているのではないかと思った。恥の意識と強い古武士の意地が、討死にという華々しい終焉に突っ走らせるのではないかという危惧であった。
帰り道にそのことが脳裡から離れなかった。豪放で強情な一面しか世間は見ていないが、兵左衛門には濃やかな心配りをする優しさがある。あの老齢で左遷されたことは兵馬たちが考える以上に、衝撃的だったはずなのだ。
いまの兵左衛門の立場では、果敢な斬込みなどで討死にするしかない。
（重役の中で、誰がそのようなことを言いだしたのか）
臨戦態勢となっていても、大藩だけに家中にはさまざまの関係がある。人間だから虫が好かないという感情もある。薩長という共通の敵を目前にして一丸となったようでいても、意見の食い違いや感情の問題が残るのは、しかたのないことだった。
それは、この会津若松城下に集まって来た諸隊との関係でもいえた。旗本のいわゆる脱走

や、佐幕派であるために、城を焼かれた家中などが、会津を頼って来ている。

その人々との間に、立場からくる意見の違いがあった。浜田藩士と桑名藩士との間でも微妙な違いがある。土方歳三の率いる新選組と古屋、今井の衝鋒隊で、しっくりいかないものがあった。

それは、会津藩の武装恭順という姿勢を煮えきらないものとする感情が、諸隊を占めていたからにほかならない。

諸隊は、すべてを失った人々である。城を、故郷を、家族を、すべてを失って、会津にやって来た。かれらに残されたものは、決戦しかない。会津若松を牙城として、薩長の軍勢を引き寄せ、一挙に殲滅して奥羽に親徳川政権を樹立したい、という構想を描いている者すらいた。

だが、会津藩はそうではない。戦さは好まないのだ。攻められたら、闘うしかないが、出来るかぎり、和平で事を処理したかった。武装恭順は、武士としての誇りを保ち、錦旗には刃向かう気はない、という姿勢である。そこには二十八万石の保科松平家の存続願望がある。

この立場の相違が両者の間に、溝を作っているのは否めなかった。

諸隊は、必ずしも、会津の立場に同情している者ばかりではない。成り行きで流れて来た者もいる。それぞれの功利性で動いているのは当然だった。立場は同一ではないのだ。すべてを失った者は、乾坤一擲で、一か八かの勝負に賭けようとする。

その破れかぶれの連中に引きずられてはたまらない。

あくまでも会津藩は、徳川御家門という名誉と京都守護職として朝廷と幕府の間を調停し公武合体を推進して来たという立場を貫かねばならないのだ。

その諸隊の一つである新選組の土方歳三の顔を見かけたのは、極楽寺坂の石工のところだった。

墓石や五輪塔や自然石などが、雑然と転がっている。石工がコツコツと鑿できざんでいるのは墓石である。

土方歳三は供を一人連れていた。

兵馬が近寄ってゆくと、声をかけない前に土方は振り向いた。

「おお、鮎川さんか、久しぶりだな。たしか越後へ出陣していたと聞いたが」

「その通りです。あちらでは散々でした」

「河井継之助のことは聞いた。会津領に入って死んだそうだな。せめてもだ……」

土方は語尾を湿らせた。

「その墓は？」

「近藤さんだ。江戸で捕縛されたことは知っているだろう。板橋で斬られてしまった。おれにはわかっていたのだ。だから、引き止めたのだが……あんなことになるのなら、無理にも、連れてくるべきだった。同じ死ぬにしても、この会津なら、本望だったろうが」

「残念なことです」

京における近藤と土方の関係は、鮎川兵馬にはよくわかっていた。新選組は当初会津藩お

預りで、のちに近藤らが旗本に取り立てられてからも、会津藩では新選組と不即不離の関係にあった。

鳥羽伏見でも協調して戦っている。土方が近藤勇と袂を分かってから会津を目ざしたのもそのためだった。

こうした仲だけに鮎川兵馬も土方歳三や新選組に友情を感じていた。だが、土方の心境は複雑なものがあったようである。

「おれもいつ討死にするかしれんからな、せめて近藤さんの墓だけでも残しておけば、と思ったのだ」

「御自身の墓はどうなのです」

「ははは、おれのは要らんさ、薩長のやつらに新選組の恐さを思い知らせてやるために、目の黒いうちは暴れまわる。墓の下に眠るのは成仏するためだろう。おれは未来永劫、成仏しようとは思わぬ。鬼となって、薩長のやつらを斬りまくってやる」

さすがに、京では白鬼と恐れられた新選組副長土方歳三だった。

兵馬は墓石を見た。近藤勇の戒名らしい。

貫天院殿純忠誠義大居士

と、読めた。

白虎士中二番隊

一

江戸へ逃げ戻った新選組が、甲陽鎮撫隊を組織して、甲府へ向かったときは、近藤勇はまだ関東における巻き返しを信じていたようである。だが、すでに土方歳三は匙を投げていたらしい。それは下総流山での駐屯でも同じであり、近藤との意見の衝突が、訣別を招くに至ったのだ。あくまでも武州多摩の郷士として徳川家を信じていた近藤勇にとって、奥州へ戦場を移すことは、もはや徳川幕府のために戦うという意味を失うことだと思われたのではないか。一介の郷士から旗本にまで成り上がった自身の存在も、幕府あってのものであり、江戸が瓦解してしまえば無価値になる、そう思いこんでいたふしがある。

その点が、土方は違っていた。幕府は潰れても武士は存在する。士魂の存在の証しは、目の黒いうちは薩長と戦うということである。土方にとって大事なのは、肩書や衣冠束帯ではなく、武士の心情であり情念だということに徹していたことだ。近藤との訣別も必然であったろう。多摩以来の同志、もしくは弟分として近藤を支えて新選組を組織し、ついに幕臣の

若年寄格にまで押し上げた以上、もはや、義理は充分尽くしたし、これ以上、してやることはない、と見切りをつけたと思われる。長年の友人として、お互いを知り尽くしているだけに、近藤が流山からの逃走を肯んじないのを、強いて説得することはなかった。おのれの死場所はおのれで選ぶのが武士である。

流山を去ったのち、下総で大鳥圭介と合流し、下野宇都宮と転戦して会津へ入り、白河城攻防戦に加わるなどして負傷した土方が、近藤勇の墓を作る気になったのは、いまここで供養しなければ、後のことはおぼつかないと判断したからにほかならない。

「中島」と、土方は連れを振りかえった。「鮎川さんだ。君は長く京を離れていたから、知らんだろうが、京ではよく顔を合わせたものさ」

「中島登です。当藩の方ですか、いいところですなあ、会津は。私は、武州多摩は八王子の近くの生まれですが、先日、如来堂から大川橋の方へいってみたら、多摩川の辺とよく似ていました。故郷を思いだしましたよ」

「多摩川か、なあに、川なんてどこも同じさ」と土方は吐き捨てるように言った。「白河のあの川は何といったかな、そうだ、阿武隈か、あれだって同じような風景だった。ははは、感傷だ中島。生まれ故郷を懐かしがっていると、どこを見ても、故郷と同じように見える」

「そうでしょうか、そうかもしれません」

「つまらん事を考えるな。われわれは、薩長のやつらと戦えばいいのだ。さあ戻って一杯飲ろうではないか。鮎川さん、来ませんか、昔懐かしい顔が揃っている。近藤さんや沖田はいないが、そうだ原田左之助も……」

ふっと土方の顔が翳った。

「伺いましょう」と、鮎川兵馬は黙っていられずにいった。

「わたしも皆さんに逢いたい、久しぶりですから」

「そうか、みんな喜ぶだろう、関東の人間は無骨だが人懐っこいやつらだから」

「宜しいのですか、ここは」

石工に命じて近藤勇の墓石を彫らせていたところだったのである。丸に二つ引の定紋の下に、貫天院殿純忠誠義大居士、という戒名らしかった。

「ああ、全部話してある。一寸様子を見に来ただけだから」

新選組が与えられた宿舎は、すぐそこの極楽寺だった。

「墓地はこの寺ですか」

「いや、ここは町中だから……」

と言葉を濁した。あとから考えてみると、西軍が雪崩こんで来たら城下は戦場になる。土方はそこまで考えていたらしい。戒名と家紋だけで、俗名を彫らせなかったのも、万一を慮ったのである。

「天寧寺あたりがよいのではないかと思っている」

「ああ、あそこは山の手ですから」

「和尚も人物だ。傷の手当てで東山に数日滞在した折、和尚と碁を囲んでな、すっかり意気

投合した」

天寧寺は愛宕のお社に隣りして、東山温泉への通り道である。兵馬が三田村新蔵と決闘した河原に近い。土方は白河の戦いで負傷したのを、温泉で療治したらしい。

「もう傷のほうはよいのですか」

「うむ、治りが早い」といってから、土方は色白の面をほころばせた。

「東山には美形が揃っているな」

「そういう評判です。もっとも、島原や祇園にはかないませんが、鄙には稀な、というところですか」

「そういうこと、そういうこと」

土方は白面に似合わなく、豪快な笑い声を吹き上げた。

極楽寺の境内には仮小屋が幾棟も建っていた。新選組総員は九十五人ということであった。会津へ来たときは百三十二人いたという。

「やあ、鮎川さんだな、御無事でしたか」

かれらが本堂に入ってゆくと、数人の隊士が近よって来た。

島田魁が、いかつい顔の相好を崩して、

「なんだ、少しも変わらんのう、いい男は得だのう」

「当たり前だ、わしらのような宿無しとは違うさ」

と、言ったのは永倉新八だった。右の眼の下に生々しい刀傷が残っている。斎藤一は隊中

一番の長顔が特徴だった。寡黙な男で愛想が悪いが、怒っているのではない。

「こいつは、いまは山口次郎と名乗っている。われわれのなかで、一番モテるのが、この不愛想なやつなのだから、おかしなものさ」

と、永倉は揶揄するように言った。が、斎藤こと山口はにこりともしない。他人事のような顔をしていた。

「鮎川さん、高木小十郎という方を御存知か」

「小十郎、ああ大目付の高木どのですか」

「この男だけが、大目付の屋敷に頻繁に招かれるので、どうもおかしいと思うていたら、娘御の聟にという縁談が持ち上がっているそうな」

「縁談ではない」ぶすっとした調子で山口は言った。

「この戦さでどうなるかわからぬというのに、それどころではあるまいが」

「それはわれわれの言うことだ。聟入りの話だから、縁談だろう」

「お互い、いのちがあったら、の話だ」

「それ見ろ、婚約ではないか」

鮎川兵馬も、その娘なら見たことがある。

米代三ノ丁に高木家があり、四ノ丁の山本覚馬の屋敷と一軒おいて背中合わせになっている。覚馬の妹の八重子と兵馬の妹の雪乃が親しいので山本家に遊びにいったことがある。娘たちが何人か来ていたが、小十郎の娘とも会っている。

「高木どのの娘御なら存じています。たしか、時尾とか申されましたな」
と、兵馬は言った。
山口は驚いたように、口ごもって頷いた。
「左様……」
「たしか、一人娘と聞きましたが、時尾どのなら、申し分ない、米代小町という評判です」
「こりゃあ、いよいよ、ただでは済まされんぞ、斎藤。明日はどうなるかわからん、盃ごとを済ましてしまえ」
永倉新八はやたらにはしゃいで、
「土方さん、ひとつ京以来の新選組のなかまとして、祝言に押しかけましょう。土方さんが同志として、話を進めて下さればいい」
「馬鹿なことをいうな。押しかけ聟など聞いたことがない。それに、ここは京都や武州と違うぞ。会津はもの堅いところだ。何事も、ちゃんと手順を踏まんと、ことは運ばん。それに、新選組といっても、敗残の浮浪の徒ということになる。家柄の相手にそんな押しつけがましいことが出来るか」
「なるほど、そうでしたな」
永倉は素直に、意見を引っ込めた。土方の表情は冷たくて何を考えているかわからないようなところがあるが、常に冷静にものごとを判断して先を読んでいる。
「永倉、そんなことより、斎藤と安富の手柄を話してやれよ、そら、白河での、あれだ」

「ああ、そうでした。鮎川さん、高台寺党のことは御存知でしたな」
「伊東甲子太郎とか称していた、あの」
「新選組を脱走して御陵衛士になった裏切り連中です。あの中に、加納道之輔と清原清というのがいましたが、こいつらが白河城攻撃に加わっていましてね、乱戦の中で顔を合わせたときには驚いた」
お互いに憎悪がはげしい。加納は流山で近藤勇の素姓を暴露した男だが、このとき永倉たちはその事実を知らない。高台寺党は獅子身中の虫であり、近藤勇を京で狙撃したのも、かれらである。永倉が斬り立てられているところに、安富才介と斎藤一が駈けつけて来た。
安富も伊東らと同時期に入隊した者だけに一種の近親憎悪が強い。斎藤と安富の勢いに負けて加納が斬り倒され、清原も退却し損ねて倒された。清原は当時鮎川直枝と名乗っていた。加納も伊豆太郎と改名していた。
京都油小路で、伊東甲子太郎が斬殺されたのはよく知られている。兵馬も噂を聞いて油小路に駈けつけたほどだから、この白河での私的な斬り合いは興味を感じた。戦さの最中に私的感情で斬り合うなどというところに新選組の立場の奇妙さがあった。
「混戦の中でよく顔がわかりましたな」
と、兵馬は率直に言った。
「なかなか敵の顔などは見分けることが出来ないものだ。わたくしなどは、まだ修行が足りんというところでしょうか」

兵馬の率直な言葉に、安富があわてて言った。

「そんなことはない。あいつらだから、おぼえていたということです。ま、いわば親の仇のようなものだから」

安富はやがて土方らと箱館に走り、五稜郭戦争では陸軍奉行改役になるのだが、のちに高台寺党の生き残り阿部十郎に殺害されるのである。

二

新選組のすべてが極楽寺にいたのではない。ここに宿泊していたのは二十人あまりで、あとは、湖南の三代、舟津、中地と分宿駐屯していた。白河城が落ちたいま、西軍は、中通りから会津への進攻を目論んでいる。どの峠を越えてくるかわからないのである。

白河、郡山、須賀川辺から会津盆地への侵入口は主だったものだけでも七、八ヶ所ある。御霊櫃峠や三森峠を越えてくる可能性が強かった。猪苗代湖からは、沿岸を伝ってくる東の道と西の道があり、そのはずれも舟津や中地で防ぐのが最初で、そのために新選組の猛者たちが派遣されたのだった。

因に会津へやって来た百三十二人のうち、京以来の同志は五分の一にも充たなかったようである。残りは甲陽鎮撫隊を組織するときの急募の連中と、大鳥圭介軍と合流して下野に転戦した際、編入された者たち、あるいは江戸脱走で転戦中に集まって来た者たちだった。

幕府の歩兵奉行だった大鳥圭介の名声も高かったが、実戦という点では、新選組の洛中における功績のほうが数倍も大きい。近藤を失ったいま、新選組の隊長は土方歳三にまぎれもなかったのだ。

四月以来、会津を最後の牙城に頼んで佐幕派の人々が続々と入って来ていたから、お互いに顔を知らない者が多かった。会津の人々にしても、有難さと迷惑とが同居していたようである。

土方は会津へ入って来たとき、すでにダンブクロに革靴、頭はザンギリの短髪にしていた。これは旧習を重んじる老人たちには、奇異で珍妙なものに見えた。近藤勇ですら、この土方の思いきった変容に違和感をおぼえ、長年の盟友とも、どこかでずれが生じていたことに気づいたのではなかろうか。

新選組の金銀出納帳を見ると、土方はダンブクロを三十五両で購入したとなっているが、いくら何でも、洋服一揃三十五両というのは高い。ピストルでも五両くらいである。もしこの値段が正しいとすると、たとえば、マンテルとか靴とか帽子とか、あるいはサーベル、ライフル銃などが付属品として含まれていたか、数着分だったかと思われる。

ともあれ、鳥羽伏見の敗戦から、土方の意識が大きく変わって来たであろうことは推測出来る。

小具足からダンブクロへの移行は、どこの藩でもかなりの抵抗があったらしい。西軍の方が、全体的な服装改革が早かったのは、地理的にも、軍備の西欧化を急いだ戦争準備の早さ

からいっても当然であるが、東軍には、混乱が多かった。

だが、軽装で利便だという現実主義が国粋主義者を黙らせた。山野を跋渉しての戦いには重い小具足や邪魔になる袖はない方がよい。括り袴にしてもダンブクロにはかなわない。何よりも厚手の呉絽服地が丈夫なのだった。

それでも一世一代の武士の名誉の最後の晴れ姿を伝来の鎧で飾りたいと固執する者も尠くなかった。

そのこだわりがもっとも少なかったのは、白虎隊の少年たちである。

これは必要に駆られたせいもある。一家で鎧や小具足がそうたくさんあるわけではない。たいてい一領だ。泰平の二世紀半は、大名や大身の旗本でもなければ、保管も手入れも出来ない。一領あれば面目は保てた。

出陣は戸主だけではない。一国の存亡の危機だ。男はすべて出陣を迫られている。兄弟の多いところでは調達も間に合わないし、費用も容易ではなかった。少年の鎧など持っている家のほうが少ない。

会津藩では、筒袖ダンブクロの縫製を城下の仕立屋に命じたがとても大量には間に合わないので、上下を問わず女性たちの篤志に任せることにしたのである。

先に傭われたオランダ系プロシャ人のヘンリー・シュネルなどの指導もあった。ヘンリーは武器商人として横浜で活躍していたエドワードの実の兄である。河井継之助との契約で、越後新潟へ武器を輸送したエドワードと屢々混同されるが、ヘンリーは、松平肥後守に拝謁

して〝平松武兵衛〟の名を賜り、軍事顧問として、働いていた。因に〝平松〟は、松平を逆さにしたものである。

材木町に屋敷を与えられ、武器や火薬の製造所を設けたのだが、これは泥縄の感があったのは否めない。すべては、当初は戦争の意図などなく、追い詰められてやむなく蹶った会津藩の状況を物語るものであった。

それにしても、会津若松の城下は、年齢も身分も、生国も、服装も違うさまざまの武士たちの往来で混雑をきわめていたといえる。そうした中で、眉目秀麗、白皙の土方歳三の髪をザンギリにしたダンブクロ姿は、一際目を引いたことであろう。土方の写真は今日では広く流布されているので、凛々しい風丰は一目瞭然だが、実際の目撃談がある。

この一ヶ月ほど後の仙台におけるときのことだが、榎本武揚、松平太郎、永井尚志らが集まって土方を総督として会津へ派遣する討議をした。

「――本人を其席へ呼んで見た所が、色は青い方、軀体も亦大ならず、漆のやうな髪を長がう振り乱してある。ざっと云へば一個の美男子と申すべき相貌に覚へました……」とある。

このときは、髪が伸びて、総髪のようになっていたのであろう。青白い顔と漆のような黒髪という表現に美男子ぶりが窺える。

もっともダンブクロ姿は、西軍の方に多かったようだ。土方の颯爽とした姿が、東軍にしては垢ぬけていたのか、間違われて白虎隊に発砲されている。

湖南を守っていた若殿喜徳の護衛の白虎隊士であった。

喜徳は、子供のいない肥後守容保の養嗣子として水戸家から入っている。中納言斉昭の第十九子で慶応二年（一八六六）十二月の縁組みである。容保の名目上の退隠により、慶応四年二月四日に会津松平を継ぎ、十世の当主となっていたが、まだ少年で、実際の采配は容保が振っていた。

西軍の侵入に備えて、喜徳は安積郡福良村に出張、布陣していたが、早朝、哨戒中の白虎隊士が、朝靄の中に馬を飛ばしてくる武士を見た。

「や、あいつは何だ」

前夜雨が降って山も野も湿っている。早朝から気温が上がって、視界が靄っていた。影のようにその姿は見えた。隊士たちは馬蹄の音で耳をそばだてたのである。

騎馬が急坂を駈けおりてくるのが、夢の中のようであった。

「敵の斥候かも知れんぞ」

と、年長の安達藤三郎が言った。小野田雄之助の三弟で、少年とは思えないほど思慮深い男だ。

某が鉄砲の筒口をかまえた。

「まて、見境いなしに撃ってはいかん」と制してから、藤三郎は大声で叫んだ。

「待て！　何者だ。止まれ」

騎馬は十数間の近くまで来ていた。馬上の武士が黒い影のように見えたのはダンブクロに陣羽織の姿だったからだ。

聞こえたのか聞こえないのか、騎馬は止まらない。

藤三郎は、さらに、三度叫んでいる。

「止まれ！　止まらぬと撃つぞ」

それでも騎馬は無視して走り去ろうとした。

「撃て」

叫びざまに藤三郎は発砲した。まさか、警告を無視して走り過ぎるとは思わなかったのだ。狼狽と怒りが、狙いを狂わせた。手応えはなかった。その命令と銃口火に促されて、ほとんど反射的に某も引金を引いている。馬が十数間先で棒立ちになったので、

「やったか」と、誰かが喜びの声をあげたが、命中したのではなく、急停止したにすぎなかった。馬首をかえして、その武士はひきかえして来た。

「敵ではないぞ」

朝靄の中から、明快な声が聞こえてきた。

少年たちはなお警戒を解かず鉄砲をかまえていたが、その銃口の前で、ダンブクロの武士は馬から降りた。

「わしは新選組の土方歳三だ」

藤三郎も同輩の某も、このときはじめて京洛に名を轟かせた剣士の顔を目のあたりにしたのだった。

土方歳三もまさか味方に鉄砲を撃たれるとは思っていなかったらしい。朝靄の中から誰何

されたのを無視して馬を飛ばしたのは、かれらしい傲慢さであろう。あるいは見張りのおぼろな姿に、少年と見てたかをくくったのか。安達藤三郎の誰何は、少年らしいかん高いものだったのも、かえって横着さを助長させたようだ。

ヤーゲル銃でも、狙えば充分命中する距離だった。弾丸が外れたのは、咄嗟のことではあるし、狼狽していたからと才次郎には思われた。年下の鮎川才次郎は、藤三郎に促されても発砲の決断さえつかなかったのだ。

（弾丸が耳を掠めた）と、のちに土方歳三は斎藤一に言った。

（あやうく近藤さんの二の舞だった）

近藤勇は伏見の墨染で伊東甲子太郎一味に狙撃されて肩を撃ち抜かれたのである。

靄の中ではあったが、すぐ傍を駈け抜けた騎馬である。藤三郎も日新館の射撃場では一応の経験を積んでいる。そのときは狼狽が的をはずしたと思われたのだが、よく考えてみると、咄嗟の間にも、威嚇射撃で充分だという判断がはたらいたのではなかろうか。本人は笑って口にしなかったが、才次郎にはそう思われた。

安達藤三郎はこの藩公喜徳に従って湖南の福良に駐屯している白虎士中二番隊三十七人の中でも、もっとも思慮深く、冷静沈着で十七歳とは思えないほど大人びた少年だった。

藤三郎の父小野田助左衛門は物頭で四百石。屋敷は米代一ノ丁にある。日新館は二ノ丁、つまり南面しているので、同じ裏通りということになる。

日新館の西北の隅に天文台がある。一ノ丁と桂林寺町通りの角だ。天文台の筋向かいの角

から二軒目が小野田の屋敷である。家の門を出れば、左手にすぐ天文台があり、その向こうに大成殿の大屋根が見え、さらにその彼方に鶴ヶ城の天守閣が聳えている。藤三郎は日新館への往復にもお城を眺めて会津武士に成長する夢をふくらましていたのであろう。

この藤三郎は十一歳で日新館に入学し四塾の一つ、尚書塾一番組に編入された。素読所でもぬきんでて、たびたび賞典を受けたという。

少年ながら如何に思慮が深かったかを物語る逸話がある。

ある年の四月八日、学友某と城下の北一里余の木流村に遠乗りしたことがある。

この日は村の観世音堂でお祭りがある。例祭で俗に馬頭観音の賽詣という。何しろ馬のお祭りだから士庶を問わず、愛馬を飾り立てて牽いてくる。

だが、村祭りなので、なるべく行かないようにしている。藤三郎が友人と出かけたのは子供らしい好奇心と無邪気さからだったろう。

ところが村に入ってお堂の屋根が見えてくると、すでに周辺は大変な混雑で、わーっわーっと、ざわめきが聞こえてきた。煙がもうもうと上がり、そのざわめきも、怒号や悲鳴がまじっていて、無礼講の狂躁的な祭りになっていた。

「大変な騒ぎだな、いつもこうか」

「みんな楽しんでいるのだ。もっとも、今年はいつもより賑やかすぎるが……」

近づくと、その騒ぎのもとは、一人の喰い酔った男が、派手な色布で飾り立てた馬をやたらと鞭をふるって走らせ、麦畑を踏み散らしたり、女の群に突っ込んだり、狼藉して喜んで

いるのだ。

それを見るや藤三郎は、

「戻ろう」

と、言い捨てて、くるりと馬首をめぐらした。

突然だったので友人は驚いて、

「どうした？　ここまで来て、祭りを見ずに帰るのか」

「ははは、もう見たではないか」

「何をいう、せっかくここまで来たのだから、観世音に詣でてゆこう、もうそこではないか」

と、引き止めようとするのを肯かず、馬を走らせた。しかたなく友人は彼に追いついて、

「どうしたのだ、一体、わけをいえ」

「おぬし、あれを見なかったか、李下に冠を正さず瓜田に履を納れずというぞ、つまらぬ騒ぎに巻きこまれてはなるまい」

友人ははじめて、藤三郎の思慮の深さを知り、おのれの浅薄さに気がついたという。

そこまで考えるのは少年の域を超えているようだが、日新館教育はそれだけの実をあげていた。安達藤三郎だけが成長していたわけではない。

同じ隊士に石田和助がいる。一歳下で、武士の出自ではない。

かれの父は龍玄という医者だった。それも農医だが、兄が分家して隣村で医者になっていたので、発奮して若松城下に出、御側医鈴木玄甫の門に学んだ。

内弟子となって拭掃除から苦学して、ようやく認められ、さらに江戸に遊学してようやく一家をなしたのである。師玄甫の一字を貰い龍玄と名乗る。会津に戻り規木町に居を構え、しだいに名声を得た。

肥後守容保が文久二年（一八六二）に京都守護職を拝命するに及び、御側医の下問があり、玄甫は龍玄を推挙した。その出自からすると、大変な抜擢で、それは名医の証拠でもあった。生来蒲柳の質の肥後守が、あの動乱の京で五年間を過ごし得たのには、大いに龍玄の診療と薬餌が役立ったであろうことは否めない。

和助はこの龍玄の二男に生まれている。かれが十歳になったとき、龍玄はすでに側医格として士分になっていたので、すんなり日新館に入学出来たが、二つ違いの兄の伍助は、十四歳ではじめて日新館に編入され、それまでは、学館に入って勉強していた。

学館は南北にある。南は郭外の花畑一丁で、南学館と称され、北学館のほうは北郭門外の甲賀町口の角にあった。

当時、龍玄の屋敷は槻木町から紺屋町に移っていて、伍助は北学館に通ったものと思われる。この伍助がのちの日下義雄で、数奇な運命で、長崎県、福島県知事を歴任し衆議院議員になり、第一銀行取締役にまでなった。

それはさておき、弟の和助は嘉永六年（一八五三）九月の生まれだが、母親が病気になって乳をやることが出来なかった。そこで乳母を頼んで里子に出した。以前婢女として働いて

いた女が、郷里で子を生んだばかりだったのだ。ところが、その乳母もすぐに年子を妊ったため乳が出なくなった。

不運というしかない。そこで和助はまた母の父親の妾に預けられた。ところが、その女に事故があったので、三転して、従兄石田昌訪の妻に養われるようになった。乳離れしてから、病床の母が没し、後妻が来た。和助は継母に養育されて成長したのだ。

前述のように日新館に入学、毛詩塾二番組に編入されて勉強したが、父親譲りの気性の烈しさは負けず嫌いで成績抜群、しばしば賞与を貰ったという。

強情もので酒好きで豪快ながら、心情濃やかで、従兄夫婦の恩を忘れず、下校のたびに屋敷へ立ち寄る。我が家と同じように、勝手に酒を汲んで飲む。夫婦もそんな和助が可愛かったようだ。

どこにでも意地の悪い子はいるもので、和助の家が農村出ということで、

「成り上がりもの」

と、辱める者もいた。

すると、和助は平然と笑って、

「たしかに、おれの父は農村から出て御側医になったのだ。まさに成り上がりにちがわん。だげんじょも、汝らは何だ。先祖は偉かったろうが、いまはただ、碌々として祖先の禄位を守っているだけではないか、天っ晴れ成り下がり者というべきだ」

こう言い返されて、相手はかえって愧じ入りひき退るしかなかった。

安達藤三郎と石田和助の生い立ちは隔たりが多いが、同じ白虎士中二番隊士としての活躍と最期に変わりはなかった。

日新館教育の成果を見ることが出来る。

三

白虎隊士といえばれっきとした戦闘要員のように聞こえるが、鶴ヶ城の帷幕では、戦いの主力とはむろん考えていなかった。盆地である会津境いを破って侵入してくるおそれのある道は、およそ二十を数えた。その警備配置に要員を配ると、要員に不足を来した。白虎隊士を派遣するというよりは、喜徳公をして湖南の総帥とし、その護衛という意味だったのである。殊にこの八月上旬においては、まだ危機感は少年たちの力を頼るところまでいってはいない。

ひたすら勉学にいそしんで来た少年たちを、干戈の間に送り出すには、軍事奉行はじめ躊躇するものがあった。紅顔の少年の剣を借りるには、まだ青壮の余力を残していたのだ。

そうした会津藩の内情を、周囲にひしひしと押し寄せた西軍の方では、充分に把握していた。

もはや、会津討伐と鶴ヶ城の落城は時間の問題と思われていたのである。参謀大村益次郎や板垣退助らは、陸続と到着する味方の軍勢を算えて、自信を増していた。

会津藩領が高山を屏風のようにめぐらした盆地に在ることは、西軍の京都出発時から参謀の胸にあったことである。

盆地を攻めることの難易が、常にかれらの脳裡を去来していたにちがいない。

四囲の山脈が外壁をなす盆地そのものを城と見なしての攻め方である。広大な盆地の周囲に藩兵をゆき渡らせるのは不可能に近い。したがって、西軍が侵入するのは難しくない、という希望が日を逐って固まってきたのであった。

盆地はその意味では、必ずしも金城湯池ではなかった。峠の一ヶ所が破れると、千丈の堤も蟻の一穴の譬えのように、崩壊はその瞬間からはじまる。

堤防に頼り過ぎた城は、一ヶ所が決壊したとき、水浸しになってしまう。会津も峠が破れたとき、鶴ヶ城の命運は時間の問題となる。

そう見たとき、西軍参謀たちは、この奥羽鎮撫に名を借りた会津藩への報復が遂に成ったような安堵をおぼえた。

「枝葉を刈りて根を伐り巨本を枯らすの策」

を提案したのは、長州の大村益次郎とも土佐の板垣退助ともいう。

どちらが先に言ったかは問題ではない。

西軍の方針が七月ごろからそのように固まっていったのは、その配軍と周辺の城への連携攻撃を見ればはっきりする。

はじめ板垣退助は野州を席捲して、日光街道を鬼怒川から山王峠越えで南会津へ入るつも

りでいた。

だが、南会津の日光口を守ったのは、会津の謀将山川大蔵である。山川はのちの浩、帝大総長を二度つとめた健次郎の兄であり、若くして家老職を継ぎ、西軍の侵攻に伴い日光口総督となった。

江戸を脱走し歩兵などを糾合して日光にやって来た大鳥圭介、土方歳三らとともに、西軍と戦った。大鳥・土方らが会津若松に入った後も、山川は山王峠を守っていた。

日光・鬼怒川での戦いには、山川は若輩として、総督の地位を大鳥に譲っている。大鳥が幕府の歩兵頭より歩兵奉行に陞った経歴を尊重したのだ。

因に初代の歩兵奉行になったのは小栗豊後守（上野介）忠順。小栗は外国奉行、勘定奉行から陸軍奉行並、歩兵奉行などを歴任、海軍奉行、陸軍奉行（再任）まで兼ねた幕府の重鎮であった。

大鳥圭介は肩書によって買いかぶられていたことがしだいに判明するのだが、小栗の名が高かったせいもあり、その歩兵奉行にどさくさ紛れではあっても就任したということが、陪臣の身である山川大蔵を遠慮させたのであろう。

因にその小栗上野介は上野の烏川の畔りで岩倉具定の率いる東征軍によって捕われ斬首されてしまっている。

小栗は逃れられない運命をさとると、妻や母などを会津へ逃げるように供をつけて落とした。夫人は身重のからだで、山越えして越後の十日町へ逃れ、新潟に入って、越後街道から

会津へ辿りつくことが出来た。

四月四日に脱出してから、会津若松へ入ったのは六月のことで、その逃避行の苦難は筆舌に尽くし難いものだった。

小栗の家族は、家老の横山主税が自分の屋敷に部屋を与え、世話をしているということも鮎川兵馬は聞いていた。

板坂退助は、山王峠下の五十里に山川大蔵の軍勢を打ち破って南会津へ侵入するという予定を諦めねばならなかった。

「ほかにどこに道があるか」

日光街道を避けるとすれば、白河を廻るしかなかった。

板垣は断念して、思いきりよく、東に軍を転じた。もしも強引に五十里へ進撃していたら、山川の作戦にかかって軍勢を失い、かれ自身討死にする結果になっていたかもしれない。

その意味では、賢明な選択だったといえよう。

板垣は肥前兵と交替を申し出て、白河に向かった。

白河城も棚倉城もすでに西軍の手にあったが、東軍はその恢復を策して、しばしば、攻撃をかけて来ていた。

棚倉城が陥ちたとき、藩主阿部正静主従は逃れて飯坂に走っていた。会津藩の南摩綱紀と西郷頼母は、福島で老公阿部葆真（正外）と来会し、棚倉恢復の相談をしている。このとき輪王寺宮法親王の御親兵を組織する話も持ち上がっていた。

棚倉城につづいて、三春藩も開城した。三春は小藩であるし、藩公も幼かった。重臣らは、同盟東軍をあざむいて、ひそかに西軍に通じていた。城を開くや、自ら、西軍を先導して、二本松城を攻めたのである。

薩州、長州、土州、備前、佐土原、忍、館林、大垣、黒羽、彦根などの西軍に対して、東軍は松坂や本宮口で邀撃したが、会津、仙台、二本松の少数では、二本松を支えきれなかった。

二本松の落城は福島城をも恐怖させ、闘わずして開城、藩主板倉勝尚と家臣たちは米沢を頼って逃げだしている。

米沢藩にしても、こんな弱腰の多人数を収容する余裕も義理もない。同盟軍だし隣邦だから、勝尚とその家族だけは世話をすることにしたが、上下家来たちの面倒までは見きれない。領内からの退去をもとめている。

非情というより止むを得ない措置であろう。そうそう甘えられては、ただでさえ苦しい台所が機能を失ってしまう。

そうでなくても米沢は会津救解の主唱者だったばかりに、多大の迷惑を蒙っている。会津から仙台へ向かうのに、米沢を経由することがもっとも安全で確実だったために、往来が頻繁になっている。

板垣らのいう伐られた枝葉である。次々となかまの葉が散ってゆくのを見ると、残りの葉は一層、枝にしがみつきながら、しかし、運命の日が迫るのを予期し、生きながらえる力を

失ってゆく。

白河・棚倉を支えに来ていた仙台兵がそれであった。かれらが仙台へ戻るしかないと決めたときはすでに遅く、中通りの退路は断たれていた。

仙台兵は須賀川にいたのである。郡山の近くで現在は牡丹園で有名なところだ。退却のために斥候を派遣したところ、付近から得た情報では、すでに西兵の大軍が八丁目辺に充満しているということだった。八丁目とは、現在の松川辺である。戦後、三鷹事件とともに世間を騒がせた松川事件の現場になったところである。

実際は松川辺に進入していたのは、一、二小隊にすぎず、かれらが放った流言だったのが、うまくその術に乗せられた。東北人の朴訥さと不安がその偽情報に気がつかなかったのだ。総督の坂英力は勝軍山越えで猪苗代を抜け、迂回して帰国することにして本宮から母成峠への道に入った。石筵口には、会津藩の北原半介などが布陣していたから、これに頼みこんだ。

北原半介は仙台兵が大軍なので驚いた。

「これだけの大兵なら、たとえ路を塞がれていても撃破するのに難くはござるまい。いまやわが藩は兵力を四方に割き、国ざかいを守るだけで精一杯です。この大兵があれば二本松城を奪回し、やつらの北上を食い止められたらどうですか。そうすれば、われらは、やつらの背後を断ち殲滅することも出来るではありませんか」

半介のこの提案も、しかし、浮足立った仙台兵には説得力を持たなかった。

実際、大軍を擁しながら坂英力は何を考えていたのか、塒に急ぐ宵の烏のように、ただひたすら、

「御藩の領内を通行させて頂きたい」

と、頼むだけだった。

「兵士は疲労し、弾薬は欠乏し、如何ともすることが出来ないのだ。この窮状を察して頂きたい」

懇願のかたちはとっているが、その表情と態度の底には、

（会津救解のためにわれわれは、ひどい目にあっているのだぞ）

という気持が見える。

しかたがなかった。北原半介は、守将の和田八兵衛と相談して、本陣へ早馬を走らせるとともに、母成峠一帯に露営を許した。

何しろ大軍だから、露営も止むを得ない。坂英力は仙台藩では家老であるし、身分の高い将校たちだけ仮屋を提供して糧食の世話をしなければならなかった。このなかに日野徳次郎や、からす組を率いて活躍した細谷十太夫などもいた。十太夫たちにしてみれば、敵陣突破はさしたることはなかったろうが、かれらの別働隊としての果敢な行動が、しばしば坂英力たちの逆鱗にふれて、十太夫も鋭鋒を折ってしまっていたのである。

仙台藩は会津の倍以上の大藩、雄藩である。奥羽一の大国で中興の祖たる伊達政宗の名声だけでも、奥州探題たる指導力がある。真にかれらが西軍への怒りを燃やして事に当たって

くれていたら、遠征に疲れた西軍をして、有卦に入った勝利を重ねさせることはなかったのだ。

当初から仙台藩内には薩長側の連中がいた。六十二万石が分裂する騒ぎだったのである。結局、奥羽越同盟の主力となって出兵したわけだが、意にそまぬまま、隊列に加わった者が尠くなかったのだ。砲煙弾雨の地獄の戦場ではそれらが吹き飛び、なかまが一体化すると思われたが、いささかでも敗色が見えはじめると、とたんに士気が萎え、命が惜しくなってくる。仙台兵は翌日、許しが出て猪苗代を経、米沢へ抜けて帰国していったのである。

こうした東軍の足並みの乱れは、西軍にしてみれば予測したことであり、作戦は効を奏して、枝葉を次々と落されてずんべら棒の巨木だけとなった会津の孤立化が目前にあった。板垣退助は、もっとも短距離にして確実な侵攻経路をさぐっていた。その候補にあげられたのが、母成峠越えと中山峠越えだったのである。

われは王臣なり

一

会津突入を目前にしての板垣退助の意気込みは、異常なばかりであった。板垣は総督府参謀であるが、奥羽遠征軍の土佐勢の頂点に立っていた。薩長と同じく内部抗争の烈しさから血で血を洗う殺戮で、多くの人材を失った土佐藩では板垣退助はもっとも嘱望されていた。薩長に一歩も二歩も遅れているという負い目がある。犬猿の仲だった薩摩と長州を握手させ三国同盟を結ばせたのは、坂本龍馬だが、土佐藩が薩長に対して多少なりとも発言権を持っているのは、その功績だけだった。

薩長に比べてもともと禄高は少なかったし、山内容堂は本質的に佐幕派だったのだ。悪くすると龍馬の功績も差し引き零になる。動員兵数も少ない。板垣退助はここで何がなんでも会津若松へ一番乗りをしなければならなかった。

やはり東山道先鋒総督府参謀である薩摩の伊地知正治は、板垣をはじめから呑んでいた。この男は、目と脚が不自由であったが、典型的な薩摩武士で、西郷吉之助や大久保一蔵（利

通）の信頼を得ていた。

板垣は天保八年（一八三七）生まれのまだ三十二歳、伊地知は九歳年長であり、薩英戦争といわれる鹿児島湾でのイギリス軍艦との戦いから、元治禁門の変（蛤御門の変）、鳥羽伏見の戦いと経験を重ねてきている。

伊地知は薩摩藩独特の合伝流の兵学を法元宇佐衛門に学び、のち教授となって二才衆を育成した。その弟子たちの中に、西郷従道や三島通庸がいる。

西郷従道は周知のように吉之助の弟だが、西南戦争では大久保利通に付いて兄を見殺しにした。のち、海軍大臣、内務大臣などを歴任して元帥府に列し、斜陽の薩摩出身の中でひとり栄華を極めた。

合伝流の兵学は人間的な教育とは無縁なのであろう。西郷従道にとっては、兄弟愛よりも保身と出世が大事だったのか。

三島通庸は初め林太郎、のち弥兵衛と称した。周知のように、寺田屋事件に有馬新七らと共謀の科で謹慎させられた過激派で、鳥羽伏見の戦いには小荷駄方にすぎなかったのが、維新後、藩政改革の急先鋒となり、都城地頭になるや大改革を行ない、権力を恣にし道路改良などに大鉈をふるった。

その成果によって、東京府に出仕して参事になり、ついで教部省に転じ教部大丞に陞り、さらに奥羽の各県令を歴任するようになる。

かれは道路改良におのれの本分を見出したかのように、福島県令になるや会津若松を中心

とした、いわゆる三方道路の建設を断行する。

夫役強制と民費負担の過重さから、農民は三島県令をして、

「鬼県令」

と呼び、恐怖した。

これが福島県下の自由民権運動の引金となる。三島は、三春出身の河野広中らの活躍に凄まじい弾圧で応じ、内乱陰謀罪で検挙するという大事件を起こすことになる。

のちの加波山事件などの原因も三島であり、遂に明治政府の恐怖政治の実行者〝鬼警視総監〟に出世するのだ。

この三島が教部省に入ったのも伊地知のおかげである。伊地知は当時（明治四年）左院の中議官・大議官兼教部省御用掛、翌年から左院副議長という要職にあった。

薩摩藩士の誰もが、過激で奥羽皆敵の異常な情熱を燃やしたのではない。この正治と同姓の伊地知貞馨などは、島津久光の公武合体運動こそ無血革命と信じて、最後まで節を曲げなかった。

佐幕派の人々の幕末の改革が公武合体にあったことはいうまでもない。徳川慶喜の大政奉還によって、その新政治への移行は速やかになされるところであった。

徒らにこの悲惨な流血腥風によって関東以北の山河を汚すことも千載の遺恨を生じさせることもなかったのだ。

貞馨は討幕が成ったのちも、公武合体による政治こそ正しいという信念を歪げなかった。

ゆえに、同姓でありながら、正治やその他の嘗ての同志はどんどん出世の階段を昇っていったのに、貞馨は琉球藩在勤となって陽の当たらぬ場所で余生を送るようになる。

その後、貞馨は修史局編修という地味な職務に任じられた。そして、華やかな檜舞台から目をそらして、晩年を〈沖縄志〉全五巻の著述に没頭している。

同じ伊地知でも、残忍非道な「鬼」を育てた男と、地道な研究と著述で平和な晩年を過ごした男と、いずれが人間的であろうか。問うまでもない。

その伊地知正治は、

（土佐などに先を越されてたまるか）

と、板垣を牽制していた。

どちらが先に会津若松城下に突入するか。

同じ東征軍として協力していながら、それぞれに内心では、競争心を燃やしていた。

会津侵攻の拠点となったのは、二本松と本宮に置かれた総督府本陣だった。

八月十日のことである。この本宮陣所に数人の若者がやって来た。

陣所は寺を接収したものだったが、残暑のきびしい日で、戸障子は取り払い、伊地知や板垣たちが絵図を前に協議しているところだった。

取次ぎの者が、三春の河野と申す者が参りましたが、と告げると、縁側で鉄砲の手入れをしていた男がふり返り、

「なんじゃ、三春の狐がまた来たか」

と、言った。

板垣と伊地知は顔を見合わせた。どちらからとなく、にやりとした。伊地知は照れ隠しのように八の字髭をなであげて顎をしゃくった。

「仕様んなか、此処へ連れてこい」

吼えるように言い、声を落とした。

「川村、あいつの前で、狐じゃら狸じゃら言わんほうがよか」

川村与十郎は後の参謀兼海軍卿川村純義である。白河攻撃では戦功をあげて、意気軒昂たるものがあった。伊地知に咎められても、けろりとして、

「どがいしたぞ、そこらで唄っとるじゃなかか、会津猪、仙台狸、三春狐にだまされた、とな、はっはっ」

「あいつの前では言わんこっちゃ、またあの陣羽織を差し込んで来るに違わん。本人は大真面目でごわそ」

そう言っているところへ〝三春の河野〟がやって来た。

若い。十九か二十歳か、意志の強さがはっきりとした眼と口もとにあらわれている。なかなかの好男子である。若者が大人ぶって背伸びしている感じだが、その意気込みは、伊地知や板垣には利用し易いのだ。

「三春の河野広中です」

張りのある声で、青年は言った。

「知っちょるきに。お前は断金隊の小隊長をしとっつろう」

河野は参謀たる板垣が自分のことを憶えていてくれたのが嬉しかった。かれは肩を揺すって一歩前へ出た。陣羽織を誇示するように見えて、川村与十郎は鼻先に冷笑を浮かべた。

河野が着ている黄色の陣羽織には「天無二二日一地無二二王一河野広中王臣也」と記されていたのだ。

かれらの冷笑は〝王臣〟という点にあった。三春藩の動向はよく知っている。河野の気負いは、かれらの眼から見れば児戯に類すると思われた。三春藩の立場はそう思われてもしかたのないほど複雑なかたちをとって来た。五万石の小藩である。どこでも小藩の立場というものは哀れだ。大勢に左右される。士道も正義もない。力がなければ大勢に従って動くしかなかったし、くるくる態度が変わるのもやむを得ないことかもしれない。

殊に慶応四年の三春藩は、当主が秋田万之助（映季）といい、年歯僅か十一歳だったところに問題がある。

奥羽越同盟の調印には御用人の大浦帯刀が出席したが、会津救解が目的とあれば反対する理由は持たなかった。事なかれ主義ではあっても、動乱の中では、中立を許されないのだ。中立は左右から敵視されるのである。

後見は秋田主税（静臥）で、小藩とはいえ人材がいないわけではなかった。すでにして、生き残りの手は打ってあった。

同盟に加わる一方で、新政府とも接触を持っていたのである。首鼠両端を持していた。江戸詰めの家老小野寺市太夫と御近習目付の湊宗左衛門が京へ派遣されたのは、大政奉還による情勢の変化に対応するためであり、権力の移行に伴う身分の保全を考えての処置だった。つづいて藩主名代として年寄の秋田広記が追いかけるようにして上洛した。

その措置は機敏で時宜を得たものだった。だが、会津救解同盟の話が持ち上がると、これを拒めずに、前述のように御用人大浦が調印に出向いている。

朝敵と目され、追討令が出された会津を救け、歎願する一方で、その追討令を出した西軍に媚を売るというのは、政治的には当を得ているかもしれないが、武士道では裏切りといわれてもしかたがない。

誠実さと信念のゆえに、今日の悲劇を招いた会津藩主従が、この裏切りに激昂したのはいうまでもない。

三春藩が一兵も損せずに西軍を迎え入れたことから、この間の事情が奥羽一帯に広がり、あのような戯れ唄が誰からとなく唄われるようになったのであろう。

三春藩が小藩の哀しさから首鼠両端を持したという事情は、土佐や薩摩のような大藩の威勢を身につけた板垣や川村らには理解出来ないところだった。

かれらもまた三春藩士を利用する一方、侮蔑を隠さなかったのである。

同盟成立までの三春藩の劃策は咎められるところではない。だが一旦、同盟に調印しながら、一方でその弁明に藩士らが上洛している。山地純之助と熊田嘉膳は秋田広記の歎願書を携えて行き、苦境を説明した。

むしろ西軍としては幸いだった。利用しない術はない。間諜を送り込んだに等しいのだ。

奥羽の情報が容易に入手出来る。西軍には、まことに〝愛いやつ〟であったろう。奥羽鎮撫の嚮導を命じる沙汰書を下している。

周辺には、磐城平、棚倉、白河、守山などの同盟藩がある。いずれも、それぞれに西軍に抵抗したのち、城を焼いて逃走したり降伏したりしているのだ。武士として当然の行為だった。信義を失った武士は武士ではない。のみならず、道義的にも——人間の道からも外れることになる。

二

たとえ五万石でも大名である。三百人前後の武士とその家族、陪臣小者など数えたら、二千余人の生活がある。宿老たちの頭にあるのは、家名の存続と所領の安堵であったろう。冒険は許されないのだ。そのための両天秤だった。

だが、こうした老人たちの考えを因循なものとして若者たちは歯痒い思いを抱く。いつの世でもそうである。東西を問わず、若者の感情は直線的である。

「ご家中の執政は姑息なことばかりする。いまや勤皇の大義に生きるのに何の逡巡があるぞ」

と、いきまく若者たちがいた。

河野広中とその兄広胖、安積儀作、影山東吾らである。青年の純粋さは、また視野の狭さにも通じるが、かれらの誤りは、薩長の権力欲と、国粋思想を混然とさせていたことだ。世間知らずの青年たちに、薩長の真意とこの六年間の動向を把握させることは難しい。野望と欺瞞の尊皇攘夷運動も、表面だけを見れば、大義に殉じているように見えるものだ。

河野広中は当時二十歳、薩長の宣伝を信じこんだのもしかたがない。

かれが黄色い陣羽織をあつらえ、肩章には王と記し、天に二日無く地に二王無し、河野広中は王臣なり、と記して意気揚々たるものがあったのは、稚気微笑ましいものがある。かれが薩長の欺瞞に気がつくのは、明治の暴虐を目のあたりにしてからである。

自由民権運動の闘士に転身したときのかれは、会津藩を朝敵と信じこんで板垣の下で働いたおのれへの慚愧と贖罪に苛まれていたにちがいない。

河野広中たちが発奮したのは、土佐や薩長の連中と同じく、出自が低かったせいもある。士分ではなく、郷士の家に生まれている。

五歳のころ里子に出されて、七歳で父広可を失い、十二歳で二本松の商家に小僧として働きに行っている。

情熱的で激しい性格の広中には、商人になる気もなく、単に口減らしの奉公だったろう。二年で出奔し帰郷している。文久二年（一八六二）、ちょうど、松平肥後守容保に京都守護職の大命が下ったころである。漸く幕末の風雲急なる空気が、十四歳の少年に鬱勃たるものを感じさせたのかもしれない。

河野広中の転機がこの時期だったことは、きわめて象徴的である。悲劇への道と知らずに上洛する会津藩士たちと、時勢の流れに開眼してゆく小藩の少年と。

河野の先祖は、瀬戸内海の水軍で有名な河野一族だったらしいから、奥州中通りには珍しく、南国の荒波育ちの血を引いていて、それが情熱的な気性を作り上げたのであろう。

広中が儒者川前紫渓に入門したのは帰春後だから、十四歳である。勉強をはじめるには遅い年齢だが、かれの負けん気は、そのハンデを乗り超えた。

川前は安積艮斎と親交があったといい、実学を尊ぶ水戸学派だったから、広中の国粋的な面もその影響と見てよい。因に、幼名の太吉を広中に改名させたのは川前である。郷士にすぎない出自は世襲名でない限り普通、改名の習慣はない。

実際に水戸天狗党の連中が脱走して来たりして、その言動に接したりしたことが、広中を益々尖鋭な志士にしていったのは推測に難くない。

白河城の攻防戦は当初、会津と仙台の敵対から、一転して同盟軍となり、東西の攻防となり、取ったり取られたりと転変を重ねたが、三春藩の動きも、そのたびに、右へ寄り左へ傾くなど、混乱が重なった。

いよいよ西軍の勢いが強くなった慶応四年七月半ば、三春の大勢は西軍の迎え入れに決定した。佐幕派の人々は沈黙し、同盟の調印をした大浦などは急いで苗字名前まで変えている。

河野広中は、三春城開城が決まると進んで棚倉の西軍に帰順を申し入れにいった。が、青年の上に肩書もないので相手にされず、老臣らとあらためて出向いて、開城と会津攻めの嚮導を約束するに至り、このとき広中は、影山らと人質として棚倉に残っている。

西軍首脳は、あまりにも容易に開城を申し出た三春藩に、何か罠でもあるのではないかと疑ったのだ。

疑うほうが当たり前だった。会津藩をはじめ、平や棚倉などあれほど抵抗したのに、隣藩の三春のこの態度は、素直に信じ難いほどのものだった。

西軍は柴原道から三春に入って来た。太鼓、笛のお囃子で威武堂々二千の軍勢の入城だった。荷物が多く人足も夥しかったし、一目で弾薬とわかる箱が荷駄で運びこまれた。貝山鷹巣道からも入って来たのは、これも万一を懸念してのことだった。

城下の屋敷や町家では、大騒ぎしてこの行列を見物したが、これほどの人数は小さな三春城内には泊れない。食事の世話も出来ないので屋敷や町家が開放され、それぞれ分宿したが、城下の人々は大歓迎したという。奥羽皆敵という気の西軍はこそばゆい気がしたにちがいない。

広中たちは勇躍した。ただ嚮導役では物足りない。ここで〝王臣〟たることを示す働きをしたいと思ったろう。

「御人数の中に加えて頂きたい」

と、申し込んだ。

板垣退助はその熱意に打たれたが、薩長土三藩の競い合いからいっても、正規軍には入れ難い。

「断金隊ならよかろう」

といって、隊長の美正貫一郎を呼んだ。

ここに板垣の狡さがある。まかり間違っても土佐藩の損失にはならないし、役に立てば土佐藩の名誉になる。

隊長の美正貫一郎は土佐藩の下士で、徒士格の家に生まれている。豪快な土佐人の典型で、名利にこだわらぬ性格から迅衝隊一番司令として東漸して来たが、甲府には浪士掛探索役となって潜入している。

例の近藤勇らの甲陽鎮撫隊の進撃を聞きつけて、急いで甲府を陥れるのに功績があった。甲陽鎮撫隊の敗北の要因は、この甲府城を先に奪われたことにあるのは周知の事である。

江戸に入ると、かれは、

「官軍に入れば出世出来るぜよ」

と、触れ廻って、浪人はむろん、博奕打ち、大道芸人から乞食まで、むろん前科者などもかまわず隊士に加えた。戦さは人殺しだという気持が、貫一郎を徹底的に戦争屋にしていた。かれはこの無頼の集団を、土佐断金隊と名づけた。その命名はどこから生じたのか詳らかにしない。

が、何しろ命知らずの悪党連中なのだ。欲と二人連れの殺し屋集団としての果敢な攻撃が成果をあげたのはいうまでもない。

河野広中らは、この隊に編入された。

これは三春藩への侮辱というしかない。だが、自ら西軍を招き入れた手前、一片の苦情もはさめない。

「あんな連中と行動出来るか」

と、いきまく仲間をなだめて、

「われわれは王臣だ。三春藩士として戦い行動をすればよいのではないか」

ここで乗り遅れたら、せっかく開城したことも忘れ去られる。かたちの上で、会津攻撃の実績をあげておかなければ、という考えで耐えることになったらしい。

最初の戦いは二本松攻略であった。だが、阿武隈川の渡河作戦で、先頭にあった美正は飛弾を眉間に受けた。悲鳴がほとばしり、その頭から血が噴き上がるのを、数人の輩下が見たという。そのまま、美正のからだは激流に呑まれ、流されていった。

この渡河作戦は七月二十七日のことである。その後、藩命で広中らは三春へ戻った。

広中としてはこのままでは諦めきれなかった。かれは藩庁に申し出、ふたたび、会津攻撃に加わるべく、本宮の板垣退助を訪れたのである。

母成峠

一

三春藩の河野広中が会津侵攻の戦いで、どれほどの働きをしたかわからない。三春側の記録にもないし、薩長土の記録にも見えない。

板垣退助は断金隊の関係から、三春藩士のふたたびの参戦を許しはしたが、あくまでも金穀弾薬などの運搬などに利用した程度だったようである。三春から二本松までの阿武隈川沿いの嚮導役で利用したあとは、もはや大して役に立たないと見たのであろう。断金隊長美正貫一郎が討死にしていなければ、あるいは活躍の場もあったかもしれないが、美正の討死にでいったん潰滅したかたちの断金隊に属していたことは、河野広中らを表舞台から閉め出した。

断金隊の隊士らの大半が、寄せ集めの無法者や前科者などで、戦さには命知らずの働きはするが、劫掠、強姦、放火など悪事もやめない。錦旗をふりかざし〝王師〟を標榜する西軍としては、甚だ都合の悪いことだった。

編成替えを理由に、三春隊も運搬の方に廻されてしまったのだ。

河野広中の失望は大きかったろう。だが、何が幸いするかわからない。

もしもかれが土佐兵の先鋒となって会津へ乱入し殺戮を行なっていたとしたら、自由民権運動の旗頭となることは難しかったろう。

二本松と本宮に会津攻めの本営を置いた総督府参謀は、土佐の板垣退助、薩摩の伊地知正治だった。伊地知の下に川村与十郎がいたし、長州藩は楢崎頼三、有地品之允などが指揮をとっていた。

二本松が陥ちてから、白河口本隊として作戦を練っていたのである。

北方の米沢がまだ抵抗しているので、会津盆地への侵攻は東、南、西の三方からせねばならなかった。

周辺の同盟諸藩を順次踏み潰していって、そのあとで孤立化して会津若松へ四方から雪崩こむ、というのが当初の作戦だった。いわゆる枝葉を落とし根を伐り自ずから巨木を枯らしむる、という策略である。

のちに長州人なにがしは、故意に米沢口を開けておき、窮鼠の決戦を避けた、というようなことを言っているが、それは結果からのこじつけにすぎない。

首鼠両端を持して西軍を迎え入れた三春藩や、戦わぬ前から城を捨てて主従が逃げ出した福島藩と違って、米沢は上杉景勝以来の勇武の家だ。

会津救解の主唱者でもある。奥羽越三十一藩の同盟が成立したのも、米沢中将上杉斉憲の

呼びかけで仙台中将伊達慶邦が応じたことに始まる。上杉謙信の川中島における戦いの伝統が米沢藩には生きていた。〝車懸り〟と称する攻撃陣はよく知られている。鷹山公（治憲）以来、米沢ではすべてに節倹の風があったが、幕末に至って鉄砲の充実を計って、外商エドワード・シュネルから欧米の武器を買い付けている。

松平肥後守容保にお目見得したエドワードの兄ヘンリーが、やはり米沢へ招かれている。この米沢藩主従の態度は、たんに隣邦会津への同情だけではない。薩長の虎狼性への危機感に発したものにちがいなかった。

三春や福島と同日には論じられない。上杉謙信以来の家名の誇りと、尚武の伝統が幕末まで生きていたのだ。

三春藩の郷士河野広中は、伊地知や板垣などから、会津攻めに参軍の許しをとると、意気揚々として三春藩へ戻って来た。

三春藩の執政たちは、長い間、首鼠両端を持して、戦局の成り行きを見守っていただけに、西軍に寝返りを打つことに成功した喜びで、ほっとしていた。

家名と所領の安堵が保障されさえすれば、天下がどこへゆこうとかまわないのだ。

ともかく危機は免れた。戦争も頭の上を通りすぎて、会津へ移ってゆく。

嵐が通りすぎるのを待っていたあとの虚脱感のようなものだった。

したがって、断金隊が隊長美正貫一郎の死により、休息を命じられたのを幸い、このまま後備えのうちに、会津落城による戦争の終結を望んでいたところだった。

そこへ若者たちが河野広中を先頭に立てて乗り込んで来たのである。

熊田嘉膳や佐久間昌言などが、向後の見通しについて相談しているところだった。

「なんじゃ、おぬしら」

「ただいま本宮の官軍本営から戻ったところです」

と、河野は肩をそびやかして言った。

例の黄色い陣羽織を誇らしげに、胸を張った。同じ色の肩章をつけている。そこには、れいれいしく、天の一字。

王臣を自称する青年河野広中の気負いが、年輩の者には仰々しく気障ったらしく見えるのはしかたがない。

熊田は眉をひそめて、

「おぬしらだけで行ったのか」

と、佐久間らと顔を見合わせた。

「何か上申があるなら、わしらに話をしてくれてからでなければ困る。問題が生じてからでは遅い」

三春藩が西軍を迎え入れるのに河野らはたしかに功績がある。それを知っているだけに家老をはじめ強いことが言えない。

青年たちは調子づいていて、言動に上司をないがしろにしている、と、重役たちは考えていた。

「御心配御無用です。板垣参謀も伊地知参謀も、私の訪問を喜んで下さいました」
佐久間はまた熊田を見た。やれやれ、というように首を振った。
「それで、一体、何を話して来たのか」
「参軍の御内意を伺って来たのです」
「なんじゃと」
「隊長が討死にしたからといって、隊士がこのままいつまでも休息している時ではありません。会津へ攻め込むのが目下の急務なれば、参謀らもその配軍の駒を塩梅していたところでした。申すなれば、ちょうど良いところに伺ったことになります」
「それで」
「申し上げました、断金隊としてわれら三春の者も尽忠の志やみ難く、一刻も早く出陣させて頂きたいと」
佐久間が何か言おうとしたのへ、河野は押しかぶせるようにして、語を重ねた。
「出過ぎた真似であることは、重々承知しております。しかし、このたびの戦さは、かしこきあたりよりの逆賊を討てとの勅命あっての戦いでござる。王臣たる身が、従軍に遅れるようなことがあっては」
「わかったわかった、左様、われらは王臣じゃ。わかった、三春藩としてあらためて願い出るべしと申すのであろう」
「その通りです。よろしく手続きを」

河野の熱意に押されたというより、それが藩の責任者としてとるべき道だという気がしてきた。
実際、何をしていいかかれらにはわからなかったのだ。こういう動乱の当座を乗り切るだけが精一杯だっただけに、朝敵にならなくて済んだというだけで、全精力を使い果たしたような、虚脱と疲労で頭の回転が鈍くなっていた。
奥羽同盟に誘われた際、強硬に反対したり、積極的な収拾案が出せなかったように、こんども奥羽鎮撫総督府に食いこみ、先陣を承って、新時代の発言権を得ようというような積極性は持たなかった。
河野広中のやや先走った行動も、純粋な青年客気の情熱がさせたことで、そこまでの計算はなかったようだ。
「そのほうらのやり方は、些か出過ぎだと思うが、かような時じゃ、大目に見ることにする。が、これからは、相談した上で動くのじゃ」
「わかりました」
「このたびのことはよいが、相手は王師じゃ。一つ間違うと大事を招く。よいか、くれぐれも注意しておけ」
こう言って、かれらは、辛うじて上司の権威を保った。
が、全く方策もなく、様子がわからなかったので、帰ろうとした河野を佐久間が呼び止めた。

「ところで、参謀らの話じゃが、見たか」
「何を、ですか」
「本陣での軍議じゃよ。それとも、小耳にでも挟んだか。それぞれ、その会津攻めのことじゃ」
「はあ、それは、聞くとはなしに、少しは」
「どこからじゃ」
と、それまで黙っていた渡会外部が、詰問するような語気で言った。
「会津への攻め口は、どこに決まった？　石筵口か、中山口か」
「はあ、どうやら中山峠の方が楽に進めるのではないかと、伊地知どのが話されましたが」
「よし、中山口だの」
決定的に頷いたので、河野はあわてた。
「いや、はっきりと決まったわけではありますまい。御諮問に答えたにすぎませんから」
「わかった。もうよろしい」
これで、会津攻めは中山口と決めてしまった。
かれらは倉皇として、家老の秋田主税と年寄の秋田広記の屋敷に出かけた。藩から出陣要請というかたちをとるには、かれらの承諾と署名が必要だったのだ。

二

四十一歳になった伊地知正治は老獪である。中山口と吹聴したのは陽動作戦だった。若い河野広中が、かれらの肚裡を読めなかったのはしかたがない。
石筵口からの母成峠と中山口からの中山峠との難易を考えると、たしかに、後者の方が傾斜もなだらかで、要害は少ない。
当時、いわゆる中通りの白河と二本松までの間から山脈を越えて出入りするのは、四つの峠越えがもっとも使われていた。
前記の二ヶ所のほか、勢至堂口と三斗小屋口である。
このほかにも、数ヶ所があるが、道が細く難所が多い。
殊にこの年は全国的に雨が多かったために崖崩れや樹木の倒壊や岩石の流出などで、小道は塞がれてしまったところが尠くない。
白河から向かうには、この二つの口のどちらかということになるが、本宮に西軍本陣を置いての攻撃では、前者のほかはない。
当然、会津側でも、密偵を放ってこの西軍の動向を調べているはずだった。
因に、勢至堂口から進めば猪苗代湖南岸のあたりに出る。
白虎隊二番士中隊が警戒にあたっているのはこの方面だった。

中山口からは現在の磐梯熱海があるところを通って中山峠を越える。

西軍がこの方面を攻めてくるらしい、という情報は、八月の半ばごろには、会津藩首脳部の耳に入っていた。

「西軍は焦っている。九月の声を聞かぬうちに攻めこんで来よう」

という意見が多数だった。

八月といえば夏のように聞こえるが、陰暦である。その上、四月に閏があったので、ずっと季節は遅れている。

慶応四年八月半ばは、すでに十月の半ばころの陽気だった。

「あと三十日もすれば雪が降る」

と、西軍の方で心配していたのも事実だった。

遠く、南国の土佐や薩摩から遠征して来ている者たちにとって、奥羽はあまりにも僻遠の異郷だった。

かれらはロシアの冬に敗れたナポレオンの故事を知っていたかどうか。奥州という概念には、〝寒冷〟と〝風雪〟が重要な部分を占めていたことは否めない。

「雪に降られでもしたら城攻めどころではなか、手が凍って鉄砲に氷柱の下がるちゅうではごわはんか」

「まだ三十日や四十日はある。それまでに攻め落とせばよか」

そうした西軍の動向が会津側にわかってくると、いよいよ、進攻はここ数日のうちという

見込みもついてきたのである。

「中山口の守りを固むべし」

鶴ヶ城での議論は紛糾した。

「中山口、中山口というが、西軍がわざと流したものではあるまいか」

と疑惑をいだく者もいた。

「やつらの考えそうなことじゃ。うかと手に乗ってはなるまい。中山口にわれらを集めておいて、勢至堂と母成から攻めてくるかもしれぬ」

「たしかに、その憂いはある。三方に軍を分散していてはどうか」

「それでは兵力が少なくなる、越後口も危ないし、ここは、何れの口か見きわめることが大事じゃ」

そうした議論の席で、西郷頼母は黙然としていた。

さきに謹慎の身を解かれて白河口総督として出馬したものの、数度の攻防戦の果てに敗北し、白河城を奪われて敗走せざるを得なかった頼母は、自ら蟄居していたが、いよいよ進攻の動きありとして、またもや召し出されるに至ったのである。

だが、苦しい立場にあった。

もともと和平を論じて、筆頭家老の地位を棒に振っているのだ。白河城で勝利したままなら、かれの身分も、地位も復権したであろうが、結果的に敗将となった以上、もはや、何もいえなかった。

かれはただ、会津松平家の家臣として、全力を尽くし、
（今度こそ、死のう）
と思っていた。
討死にすることによって、主君の鴻恩にこたえねばならない。
いまさら、
（だから、言わぬことではない。はじめから、京都守護職などお受けせねばよかったのだ）
というようなことは、口が腐ってもいえないのだ。
それは今や、禁句であった。主従数千人を侮辱する言葉になるし、武士は愚痴を洩らすものではなかった。
いまは運命に従うしかない。武士の本分に尽くし、立派に死ぬ。それしかなかった。
議論の果てに決まったことは、一応、峠に配軍するものの、どの口が破れたにしても、鶴ヶ城へ迫るには、猪苗代湖と、背炙山がはだかっている。この二ヶ所に全力をもって防禦すればよい、というものであった。
猪苗代湖からの流れに、いわゆる十六橋が架けられている。
この橋を切って落とせば、急流が敵を阻むし、戸ノ口原につづく赤井谷地は湿地帯で、これも湿泥と身のたけを越すほどの草などが障害となる。背炙山越えは、馬も通れない嶮峻の道である。
こうした見地から、将士の部署が決められたのだが、母成峠の守りには、大鳥圭介と新選

組と猪苗代隊が当てられることになった。
これは一説によると、大鳥圭介が母成峠を見分して、その要害の急坂を見て、
「ここを守るには、一中隊もあれば充分。われらだけで守ってみせる」
と、大言壮語したからという。
大鳥圭介は日光口でやはり敗北している。山川大蔵が総督を譲ってかれに指揮を委ねたのがアダになって、敗北した。
大鳥は何かと弁解しているが、旧幕軍の歩兵奉行というむかしの肩書のてまえ、どうしてもここで手柄をたてたかったのか。
あるいは中山口には西軍の主力が殺到するが、この母成峠に攻めてくるのは少数と思ったのか。
大鳥圭介は嘗て小栗上野介と謀って、フランス式調練を受けた陸軍と新造軍艦を持つ海軍が呼応しあい、箱根を中心とする江戸防衛作戦をたてていたといわれる。
海上からの艦砲射撃と、名にし負う天下の嶮の防禦陣地は、充分、西軍を追い落とすことが出来る。この戦略は、しかし実行に移されなかった。
海上からの掩護をする海軍が榎本武揚の考えで動かせなかったからである。
周知のように、箱根を守った遊撃隊は伊庭八郎や人見勝太郎ら講武所の剣術方教授などをつとめた剣客たち四十名ほどであり、上総請西藩のこれも百名たらずの主従の応援を受けても、数倍の西軍に抗すべくもなかったのである。

大鳥圭介には、その憾みが残っていたのではあるまいか。

峻嶮を利用しての邀撃に抱いた夢の実現が胸にあったと見てよい。

日光で敗れ、南会津境いの山王峠で実行出来なかっただけに、是非、この母成峠でやりたいという、戦略家としての思いが、強烈に作用したであろう。

会津藩にとって、要地となった母成峠の指揮を、なぜ大鳥圭介などに任せたのか、という疑問と不満が、のちのちまで会津武士の間にくすぶっていたが、大鳥圭介のほうからの申し出が、熱烈なものがあったといわれるのも、こうしたことを考えてみると、辻褄が合うようである。

中山口に西軍が向かうのは、八月二十一日ということであった。それも板垣らの謀略であったろう。

二十日の払暁、二本松に屯集していた西軍は突如移動をはじめたのだ。

本営にはすでに先鋒が待機していた。二本松からの軍勢が発したとの報告で、ただちに先鋒が動きだした。

その向かった先は、中山口ではなく、石筵口であった。

総勢三千数百。

その構成は、薩・長・土の三藩を主力として、これに大垣藩と大村藩が督励されながら進んでいた。

後者は別として、薩・長・土の三藩の将兵には、

（会津への一番乗りはわれらで）

という功名心が働いていた。

ここまで追い詰めた以上、あとは、一気に会津へ突入し、鶴ヶ城を陥すだけだという気持で、誰もが昂奮していた。

三春藩の河野広中らは、従軍を許されたが、弾薬や食糧を運ぶ役目で、大軍のうしろから車を押し、荷駄を曳いているにすぎなかった。

中山口のほうにも薩・長と大垣兵の一部をもって別働隊が向かっていた。

これは岐れ道になる会津街道玉ノ井村で会し、左右に進んでいる。陽動作戦であったが、一応の実勢がなければ、作戦を見破られるからであった。

母成峠の山は勝軍山と呼ばれていた。この名前に大鳥圭介は大いに気をよくしていたが、思いがけない大軍の攻撃に狼狽した。

二十一日の早朝、濃い朝霧の中に夥しい大軍が石筵口に殺到して来たのである。

解説

歴史・文芸評論家
高橋千劒破

会津藩がこれまでの軍制を改め、大砲や洋式小銃を取り入れた兵制の大改革に着手したのは、慶応四年（一八六八）三月のことであった。一月に鳥羽伏見の戦いに敗れたことが改革の契機となった。それまでは、成人男子すなわち十五、六歳から六十歳ぐらいまでの男子が入り混って同じ隊を構成していたので、機動性に欠けるものがあった。

新軍制では、会津藩の職制に応じて三階級に分け、さらに年齢別に編成した。すなわち士中隊、寄合組隊、足軽隊に編成し、その各々を年齢別に組織した。十六、七歳の者は白虎隊、十八から三十五歳までが朱雀隊、三十六から四十九歳までは青龍隊、五十歳以上が玄武隊というようにである。たとえば朱雀隊ならば、朱雀士中隊、朱雀寄合組隊、朱雀足軽隊となり、さらに各隊の人数によって一番隊、二番隊というように分けた。会津藩の正規軍は十二種類二十一中隊となった。

戊辰北越戦争で奮戦した猛将佐川官兵衛は、朱雀四番士中隊を率いていた。

ちなみに、白虎・朱雀・青龍・玄武は、中国古代の方位思想による四神である。すなわち東を守備するのが青龍、西は白虎、南は朱雀、北が玄武である。

戊辰時における会津藩の部隊は、以上がすべてではない。非常時である、寄合組隊や足軽隊には、兵糧方・医師・町兵・農兵などが付属隊員として組み込まれた。まさに一藩一丸となって、薩長を中心とする非道な西軍に対抗したのである。それだけではない。戦闘が開始されると、正規軍のほかに多くの諸隊が生まれた。会津の地には、戦乱を逃れた佐幕派の藩主のほか、旧幕臣や新選組の生き残り、各藩の脱藩者たちが集結していた。また領内の農民や神主、修験者たちも起ち上がった。彼らによって多くの諸隊が自発的に結成されたのである。正規軍の他にどのような諸隊があったかといえば、諸生隊・遊撃隊・別撰隊・狙撃隊・進撃隊・会義隊・純義隊・勇義隊・一心隊・決死隊・誠志隊・力士隊・娘子隊など三十数隊に及ぶ。

本巻では、朱雀士中隊ほか正規軍の奮戦だけでなく、力士隊の活躍なども描かれる。そしていよいよ、白虎隊が登場する。

さて、本巻に描かれた北越での激戦の模様を振り返ってみよう。

長岡城を西軍に奪われたことは、東軍にとって痛恨事であった。長岡藩の主席家老であり長岡藩兵を率いる河井継之助は、長岡城奪回のために果敢な作戦行動を取っていく。会津にとっても、北越の要である長岡が恢復できるか否かは大きな問題であった。

慶応四年六月十四日、長岡郊外の大黒新田で、雨中の激闘が繰り広げられた。長岡軍は多くの死傷者を出して、いったん兵を退いたが、西軍にも多数の死傷者が出た。山県

狂介（のちの有朋）は西軍苦戦の原因を高田藩兵の戦いぶりにあるとして、一罰百戒の意味を込めて高田兵の隊長の処分を高田藩に命じた。たしかに越後高田藩は西軍に与してやむを得ず出兵したものの、兵士たちの意気は上がらなかった。このように西軍に膝を折りはしたものの、釈然としないままに参戦している藩も少なからずあったのである。

北越の戦線が思ったより長びいているのに業を煮やした京都では、新たに長州より千人、薩摩より三百人ほか総計四千人に近い軍勢を北越に送り込むことになった。その情報を察知した東軍は、敵の援兵着到前に長岡城を恢復しようと焦った。

河井継之助は六月二十二日に八丁沖から総攻撃を仕掛ける作戦に出た。八丁沖は、今の長岡市富島と浦瀬の間に位置する低湿地帯である。泥濘の中を膝まで没しての暗夜雨中の難行進であった。敵の不意を衝いたこの夜襲は成功したかに見えた。大黒の水門を守備していた西軍は武器弾薬を放置して逃げた。だが、夜明けと同時に西軍の猛反撃が開始され、前後二度にわたる激闘の末、長岡軍は撤退を余儀なくされて、奪回は失敗に終わった。

長岡を恢復することは、河井継之助と長岡藩将士たちの悲願であるだけでなく、会津藩自身のためでもあった。六月二十七日、会津軍は長岡攻略に向けて移動を開始した。朱雀四番士中隊、青龍二番士中隊、それに砲兵隊などである。会津隊は三条から地蔵堂に進軍し、与板城の山に連なる大山に胸壁を築いた。

こうした掩護を受けて継之助率いる長岡軍が、再び長岡城奪還の奇襲をかけたのは、

七月二十四日のことであった。敵の裏をかき、再度、前回失敗した八丁沖の深田からの、暗夜雨中の総攻撃であった。継之助の作戦は成功し、すさまじい白兵戦の末、ついに長岡城を奪回した。逃げまどう西兵のうち、折からの雨で増水した信濃川にはまって溺死したものも少なくなかった。

しかし長岡城に入った将兵たちに休む間は与えられなかった。夜明けと同時に長岡城の急変を知った西軍が、猛反撃を開始し出したのである。長岡勢が城を奪ったあと、呼応して米沢兵が応援に駆けつけ、西軍の盛り返しを防ぐ手筈になっていた。だが米沢兵は来なかった。長岡城は再び西軍の猛攻の前に孤立することになった。

この日、継之助は逃げ遅れた一隊を救うため大手口から新町へと出たところ、敵弾に左脚を砕かれて倒れた。

数日の間、長岡城をめぐるすさまじい攻防戦が繰り広げられた。長岡城の守備兵を救うため、会津藩の決死の一隊が西軍に斬り込みを敢行した。その中に鮎川兵馬の姿があった。兵馬は六月下旬棚倉街道で負傷し、会津へ戻っていたが、傷が癒ると矢も楯もたまらず、志願して小隊を率い、越後に赴いて佐川官兵衛の朱雀四番士中隊に属していたのだ。

こうした反撃はあったもののしかし、七月二十九日、長岡城は再び西軍の軍門に降った。二十五日には西軍の新たな大軍が、海路松ヶ崎浜に上陸していた。これを嚮導したのは、東軍の味方であるはずの新発田藩であった。会津の諸隊は北越各地で戦っていた

が、もはや北越の地を守備することは不可能となった。この上は会津への進攻路を防ぐしかない。鮎川兵馬は、佐川官兵衛の朱雀四番士中隊と共に、新発田街道（赤谷街道）の要衝赤谷へと向かう。

傷ついた河井継之助は、八月に入ると、戸板に乗せられ八十里越を越えて会津へと向かった。十二日には会津領の塩沢村まで運ばれたが、十六日、傷が悪化してついに帰らぬ人となった。

赤谷口を守備する会津兵のなかに、兵馬の弟才次郎も加わっていた。白虎一番寄合組隊の一員として出陣していたのである。八月十四日、赤谷で戦闘が開始され、才次郎も負傷し、兵馬もまた傷つき、若松城下へと戻った。

いっぽう、二本松に屯集していた西軍の大部隊は、八月二十日移動を開始した。一部を中山口へと向かわせるという陽動作戦を取りつつ、主力部隊は石筵口へと進攻した。母成峠を抜いて一気に会津へ突入しようというのである。母成峠を守備するのは大鳥圭介と新選組、それに猪苗代隊であった――。

〈巻末エッセイ〉
東山温泉の思い出

俳優　菅原文太

昨年の秋、仕事で宮城県と秋田県の県境の山の中を歩いた時、田代沼という小さな沼の辺で、昔マタギをしていたという案内の佐藤さんから、この沼には戊辰戦争の時、峠の道を敗走する兵士が槍や刀を投げ込んだという言い伝えがあるということを聞いた。このような人知れぬ山奥にまで、戊辰戦争の名残が眠っているのかと、沼を渡る風と霧雨の中で深い感慨に襲われたのを思い出す。

洋の東西を問わず、人間の歴史は枚挙に遑のない戦いの連続の上に成り立っている。戊辰戦争は徳川の幕藩体制を終わらしめ、近代日本の幕を開けた日本人同士の最後の戦いとして記されているが、その功罪はさておいて、薩長によって起こされたかなり理不尽な戦争であったことは間違いの無いところである。特に、会津藩の筆舌に尽くせぬ惨状は、白虎隊の悲劇、戦争後の下北斗南への配流、その他数知れぬ事例によって、とみに知られているところである。

旧知の早乙女貢さんが、その会津の悲劇を渾身の力をもってライフワークとも言える

労作『会津士魂』として仕上げられた。読ませて頂いて、その会津への限りない思い、悲しみ、憤り、すなわち早乙女さん自身の内なる〝会津士魂〟にただただ感服するほかは無い。

二十年ほど前、NHKの大河ドラマ『獅子の時代』で会津藩下級武士をやらせて頂いたが、当時外務大臣をされていた伊東正義先生からお電話があり、大臣室でお目にかかり、先生の祖父が斗南に流されたお話などを伺い、それが機縁で大層可愛がって頂いた。ある選挙の時、会津での遊説のお供をして、その夜東山温泉で伊東先生御夫妻から慰労して頂いた。その時偶然のことに早乙女さんが同じ宿に逗留しておられ、伊東先生もご一緒に一献傾けながらいろいろ語り合ったのだが、今思い出してみると、『会津士魂』の構想をあの時に、練っておられたのではないかと想像されるのである。

学業不良だった高校時代から歴史は好きで、ミーチャンハーチャン的とも言える新選組好きは六十半ばになる今でも変わらない。会津藩主松平容保が藩祖保科正之の遺訓を守り、誰も受け手の無かった京都守護職を拝して赴任し、新選組の創設に力を貸し、近藤勇、土方歳三、永倉新八を始めとする、ひたむきに将軍家のため佐幕の道に邁進した新選組を愛し、庇護し続けたことがその後薩長のいわれの無い私怨を買い、戊辰戦争でのあの苛烈な会津への攻撃となったことも良く知られるところである。私の郷里である仙台藩の斡旋による、涙を呑んでの会津藩の恭順降伏の歎願書が、長州の参謀、世良修蔵によって一蹴され、それが奥羽列藩同盟の結成となり、やがて会津を無残な戦火の渦

の中に呑み込んでいった。

尊皇攘夷の美名の下に走った当時の若者たちの情熱も、やがて薩長の一部の者たちの恣意による倒幕の旗印にすり替えられ、日本史を大きな悲劇へと巻き込んでしまった。明治維新を近代日本の夜明けと喜んで良かったのは、けだし薩長だけだったかもしれない。

振り返って信玄、謙信、信長、秀吉と続く戦国時代、家康によって築き上げられた二百数十年の江戸時代、その幕を引いた幕末維新の数世紀にわたる近代日本史は、夢、ロマン、勝利と敗北、そして愛と憎しみなど、芝居、映画、テレビドラマの題材にこと欠かぬ宝庫であった。

それに較べて今世紀の日本は、金と物の経済一本槍。たしかに富める国にはなったが、来世紀、いや百年の後、果たしてドラマや舞台の題材として喜んで取り上げられるであろうか。今からでも遅くはない。温故知新ではないが、金と物はこのくらいにして、日本と日本人は日本士魂をこそ取り戻さなければならないのではないか。

知友早乙貢さんには、この先も深く歴史の森に踏み込み、史実を掘り起こし日本人に武士道に代表される良き魂をゆさぶってほしいと願っている。

年表

（月日は旧暦、月の下の数字は日を表す）

日本・幕末会津藩の事項

西暦	和暦	
一八五三	嘉永六	6月、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー、軍艦四隻を率いて浦賀に来航。
一八五四	嘉永七	1月、ペリー、神奈川沖に再来。3月、日米和親条約を締結。
一八五八	安政五	4月、井伊直弼大老に就任。6月、日米修好通商条約調印。9月、安政の大獄始まる。10月、徳川家茂第十四代将軍となる。
一八五九	安政六	5月、露・仏・英・蘭・米五ヶ国に神奈川・長崎・箱館の三港を開港。
一八六〇	安政七・万延元	1月、咸臨丸、米国へ向けて出航。3月、3大老井伊直弼、桜田門外で水戸浪士らに暗殺される（桜田門外の変）。
一八六二	文久二	2月、11将軍家茂と皇女和宮との婚儀（和宮降嫁）。4月、23上洛中の薩摩藩島津久光、同藩尊攘派志士を弾圧（寺田屋騒動）。7月、6幕府、一ツ橋慶喜を将軍後見職とする。9松平慶永（春嶽）を政事総裁職に任命。8月、21島津久光の行列護衛の薩摩藩士、英国人を殺傷（生麦事件）。閏8月、1会津藩主松平容保、京都守護職を拝命。10月、28三条実美・姉小路公知、幕府への攘夷勅旨の勅使として江戸着。12月、9朝廷、国事御用掛を設置。12尊攘派井上馨ら品川御殿山の英国公使館を焼き討つ。24松平容保、会津藩兵を率いて上洛。
一八六三	文久三	1月、2松平容保、はじめて孝明天皇に拝謁。2月、23尊攘派浪士、足利三代木像の首を賀茂の川原に晒す。清河八郎ら浪士組入京。3月、4将軍家茂、上洛し二条城に入る。4月、13清河八郎、暗殺される。15新選組、京都守護職の傘下となる。20将軍家茂、攘夷期限を5月10日と上奏。5月、10長州藩、下関で攘夷開始、米・仏・蘭艦を砲撃（下関事件）。6月、1米軍艦、5仏軍艦、長州藩砲台を報復攻撃。6長州藩の高杉晋作、奇兵隊を編成。13将軍家茂、海路江戸に戻る。7月、2薩摩藩、鹿児島湾で英艦隊と交戦（薩英戦争）。8月、18公武合体派による宮中クーデター（8月18日の政変）、三条実美ら七卿、長州へ（七卿落ち）。11月、1薩摩藩、生麦事件の賠償金10万ドルを英国へ支払う。12月、30松平容保、一ツ橋慶喜・松平慶永・山内豊信（容堂）・伊達宗城と共に朝廷より朝議参与を命じられる。
一八六四	文久四・元治元	6月、5新選組、池田屋に長州浪人を襲う（池田屋騒動）。12会津藩士柴司（次正）、土佐藩士を刺傷させ自刃。7月、11佐久間象山、京都で暗殺される。19会津藩兵、御所を守り、蛤門などで長州藩兵と交戦（禁門の変＝蛤御門の変）、長州藩士久坂玄瑞自刃。21真木和泉ら自刃。24長州藩追討の勅命で、幕府諸藩に出兵を命令（第一次幕長戦争）。8月、5米・英・仏・蘭四国艦隊、下関の長州藩砲台を砲撃破壊（馬関戦争）。11月、11長州藩、禁門の変責任者益田右衛門介ら三家老に自刃を命ず。
一八六五	元治二・慶応元	6月、24薩摩藩西郷隆盛、京都で坂本龍馬らと会い長州藩の武器購入の協力を約す。7月、21長州藩井上馨・伊藤博文、薩摩藩の仲立ちで英国商人グラバーより鉄砲を購入。9月、21将軍家茂、長州再征の勅許を受ける。
一八六六	慶応二	1月、21坂本龍馬の斡旋で、長州藩の木戸孝允と薩摩藩の西郷隆盛ら、薩摩と長州の同盟を密約（薩長同盟）。6月、7第二次幕長戦争始まる。7月、20将軍家茂

一八六七	慶応三	大坂城で死去。そのため翌月、征長停止の勅命が下る。12月、5徳川慶喜、第十五代将軍に就任。25孝明天皇急逝。 1月、9皇太子睦仁親王践祚、明治天皇となる。10月、14将軍慶喜、大政奉還上奏表を朝廷に提出。15大政奉還の勅許。24慶喜征夷大将軍の辞職を請う。11月、15坂本龍馬、京都の近江屋で中岡慎太郎と共に暗殺される。12月、9朝廷、王政復古を宣言。松平容保、京都守護職を免じられる。25旧幕府、薩摩藩浪士の江戸攪乱に対し、諸藩に薩摩藩邸の焼き討ちを命ず。
一八六八	慶応四・明治元	1月、3旧幕府軍、入京途中鳥羽・伏見で薩・長・土三藩軍と交戦（戊辰戦争始まる）。4会津白井隊、鳥羽街道で、上田隊、淀で奮戦。6松平容保・松平定敬、徳川慶喜に従い、軍艦開陽丸で大坂脱出、6日後江戸着。10朝廷、徳川慶喜・松平容保ら旧幕閣の官位を止め、京都屋敷を没収。17会津藩征討の朝勅、仙台藩に下る。 2月、3天皇親征の詔。9総裁有栖川宮熾仁親王を東征大総督に、板垣退助を東山道先鋒総督府参謀に任命。10松平容保、徳川慶喜により登城を止められる。12徳川慶喜、江戸城を出て上野寛永寺で謹慎。13恭順に傾いた会津藩用人神保修理、三田屋敷で自刃。22松平容保、江戸より会津に帰国、挙藩防戦を藩士に告げる。23旧幕臣の渋沢成一郎ら浅草本願寺で彰義隊を結成。月末までに会津藩士、藩主容保に続いて順次帰国。 3月、6大総督府、江戸総攻撃を命令。8会津藩、軍組織を改革し白虎隊などを組織。13西郷隆盛と勝海舟、江戸薩摩藩邸で会見（江戸無血開城談判）。19奥羽鎮撫総督九条道孝、仙台藩・米沢藩に会津征討を命じる。

		4月、11江戸開城。徳川慶喜、水戸に退隠。旧幕府歩兵奉行大鳥圭介、江戸開城に反対し、兵を率いて脱出。19大鳥軍、北上し、宇都宮城を落とす。 閏4月、11奥羽列藩重臣、白石城に会し会津救解嘆願書提出に同意。12同嘆願書、総督府参謀世良修蔵に退けられる。20仙台藩士、世良修蔵を斬殺。会津藩兵、白河城を襲撃占領。26小千谷へ向かう西軍と会津軍、雪峠で戦う（北越戦争）。 5月、1白河城、西軍伊地知隊が攻略。3奥羽越列藩同盟が成立。輪王寺宮、奥羽越列藩同盟軍事総裁となる。7山川大蔵、大鳥圭介と今市で西軍に敗れる。15上野寛永寺の彰義隊敗れる（上野戦争）。輪王寺宮、品川から海路脱出。19長岡城陥落。25奥羽越列藩軍、白河城の攻撃開始。27西軍総督参謀板垣退助、白河城に来援。 6月、2長岡城の奪回作戦、河井継之助ら今町の西軍を攻撃。6輪王寺宮、若松城に到着。12東軍、白河城を総攻撃、奪回ならず。16西軍、三隻の汽船で常陸平潟港に上陸。 7月、17朝廷、江戸を東京と改称。24河井継之助ら、長岡城を一時奪還。26三春藩、西軍に降伏。29二本松城、落城。河井継之助、長岡城の攻防に敗れる。 8月、月初め、北越戦争終結。16河井継之助、会津へ逃れる途中で傷病死。21東軍、石筵口に殺到。22西軍、猪苗代を攻略し、十六橋を突破。23西軍、若松城（鶴ケ城）下に迫る。白虎隊、飯盛山で自刃。 9月、4米沢藩、西軍に降伏。8明治と改元。15仙台藩なども西軍に降伏。21松平容保、家臣に開城の意を懇諭。22若松城を開城降伏。

早乙女 貢の

大河歴史小説 会津士魂（全十三巻）

第一巻 会津藩 京へ

会津藩主松平容保は京都守護職を拝命し藩士を率いて上洛した。その中に鮎川兵馬もいた。京では尊攘テロの嵐が吹き荒れていた。

第二巻 京都騒乱

新選組が京都守護職の前衛となり、尊攘過激派を封じるべく池田屋を襲った。兵馬は、日々使命を果たしながら仇三田村新蔵を追い求める。

第三巻 鳥羽伏見の戦い

公武一和を目指す幕府と朝廷の迷走、薩摩と長州の接近。孝明天皇亡き後、将軍慶喜が大政を奉還し、やがて戊辰戦争の火蓋が切られた。

第四巻 慶喜脱出

鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍が敗退すると、前将軍徳川慶喜は大坂城を脱出して海路江戸へ向い、松平容保は止むなくこれに従った。

第五巻 江戸開城

慶応四年四月、江戸城の明け渡しが行われ、徳川慶喜は水戸へ去ったが、上野の山にこもった彰義隊が西軍と壮絶な戦いを繰り広げた。

第六巻 炎の彰義隊

朝敵と目された松平容保は会津へ戻り、抗戦を覚悟した。上野の山で戦った鮎川兵馬も、西軍の厳しい残党狩りを逃れて江戸を離れた。

第23回吉川英治文学賞受賞作

第七巻 会津を救え

恭順か抗戦か、力を正義として押す薩長の西軍に会津藩は呻吟した。会津を救うべく仙台、米沢藩を中核とした奥羽列藩同盟が成立した。

第八巻 風雲北へ

歩兵奉行大鳥圭介は、土方歳三らと旧幕軍を率いて宇都宮、日光、今市と転戦。奥羽への関門白河城の攻防の中に鮎川兵馬の姿があった。

第九巻 二本松少年隊

阿武隈川流域の磐城地方では、西軍と奥羽越列藩同盟軍の攻防が熾烈を極めたが、三春藩の反盟もあって戦火はついに二本松城に及んだ。

第十巻 越後の戦火

越後も戦火に見舞われる。沼田に集結した西軍は三国峠から小出、小千谷を抜いた。長岡藩家老河井継之助の和平工作も叶わなかった。

第十一巻 北越戦争

長岡城の血戦はやがて西軍の勝利に帰し、河井継之助は会津への途次傷病死する。会津城下には北越戦線で負傷した兵馬の姿があった。

第十二巻 白虎隊の悲歌

西軍は母成峠をはじめ会津の防塁を次々と破り会津若松城下に迫った。砲撃で炎上する城下を落城と見て絶望する白虎隊の姿があった。

第十三巻 鶴ヶ城落つ

城下はもとより会津盆地の随所で白兵戦が繰り広げられた。そして九月半ば、圧倒的な火砲をもった西軍三万の総攻撃が始まった……。

第23回吉川英治文学賞受賞作

斎藤栄　ダイヤモニヤ殺人事件
斎藤栄　鎌倉将軍連続殺人事件
斎藤栄　風の魔法陣（上）
斎藤栄　風の魔法陣（下）
斎藤栄　雪の魔法陣
斎藤栄　アルプス秘湯推理旅行
斎藤栄　月の魔法陣　タロット日美子の夢街道旅行
斎藤栄　冬虫夏草の惨劇
斎藤栄　真夜中の意匠人（じん）の魔法陣
斎藤栄　蒙古襲来殺人旅情
斎藤栄　東北新幹線殺人旅行　タロット日美子　日本のエーゲ海殺人事件
斎藤栄　棋聖忍者・天野宗歩1
斎藤栄　棋聖忍者・天野宗歩2
斎藤栄　棋聖忍者・天野宗歩3
斎藤栄　棋聖忍者・天野宗歩4
斎藤栄　棋聖忍者・天野宗歩5
斎藤栄　棋聖忍者・天野宗歩6
斎藤栄　棋聖忍者・天野宗歩7
斎藤栄　棋聖忍者・天野宗歩8
斎藤栄　悪魔を見た家族
斎藤栄　謎の人命電話（ホット・ライン）
斎藤栄　謎の女真教団
斎藤栄　殺人フェアウェイ
斎藤栄　紅の天城高原
斎藤栄　タロット日美子運命の時刻表
斎藤栄　鎌倉十二神将の誘拐
斎藤栄　悪魔が裁く
斎藤栄　平成元年の殺人　女高生俳句殺人事件
斎藤栄　枕草子殺人事件
斎藤栄　謎の幽霊探偵
斎藤栄　天の魔法陣
斎藤栄　新版　ミステリーを書いてみませんか
斎藤栄　日本列島殺人旅行
斎藤栄　花の魔法陣
齊藤令介　男の行動学
齊藤令介　動物と暮らす
西東登　クロコダイルの涙
早乙女貢　奇兵隊の叛乱
早乙女貢　維新の旗風
早乙女貢　赤い渦潮
早乙女貢　血槍三代（青春編）
早乙女貢　血槍三代（愛欲編）
早乙女貢　血槍三代（風雲編）
早乙女貢　泰平の底

早乙女貢　海の琴　火焔城の章
早乙女貢　海の琴　恋渦巻の章
早乙女貢　城之介非情剣
早乙女貢　百万両伝奇（上）
早乙女貢　百万両伝奇（下）
早乙女貢　暗殺
早乙女貢　志士たちの肖像（上）（下）
早乙女貢　会津士魂一　会津藩京へ
早乙女貢　会津士魂二　京都騒乱
早乙女貢　会津士魂三　鳥羽伏見の戦い
早乙女貢　会津士魂四　慶喜脱出
早乙女貢　会津士魂五　江戸開城
早乙女貢　会津士魂六　炎の彰義隊
早乙女貢　会津士魂七　会津を救え
早乙女貢　会津士魂八　風雲北へ
早乙女貢　会津士魂九　二本松少年隊
早乙女貢　会津士魂十　越後の戦火
早乙女貢　会津士魂十一　北越戦争
酒井順子　ギャルに小判　トイレは小説より奇なり
坂上弘　早春の記憶
坂口安吾　堕落論
佐木隆三　冷えた鋼塊（上）
佐木隆三　冷えた鋼塊（下）
さくらももこ　Momoko Sakura　バーグマン・訳　Momoko's Illustrated Book of Living Things
佐々木譲　振り返れば地平線
佐々木譲　真夜中の遠い彼方　きみの素敵なサクセス
佐々木譲　タイム・アタック
佐々木譲　マンハッタンの美徳
佐々木譲　夜を急ぐ者よ
佐々木譲　犬どもの栄光
佐々木譲　南の風にモーニン
佐々木譲　仮借なき明日
佐々木譲　五稜郭残党伝
佐々木譲　雪よ荒野よ
佐々木徹　船木誠勝物語　ストレイト
佐々木久子　酒——（はる）（あき）（なつ）（ふゆ）
佐々木久子　酒と旅と人生と
笹倉明　海を越えた者たち　アムステルダム娼館街
笹倉明　昭和のチャンプ
笹倉明　東京難民事件
笹沢左保　破壊の季節
笹沢左保　白昼の囚人
笹沢左保　孤独なる追跡
笹沢左保　絶望という道連れ

集英社文庫　目録（日本文学）

笹沢左保	結婚関係	佐藤愛子
笹沢左保	愛人ヨーコの遺書	佐藤愛子
笹沢左保	日暮妖之介流れ星　破れ笠編	佐藤愛子
笹沢左保	大江戸火事秘録	佐藤愛子
笹沢左保	明日はわが身	佐藤愛子
笹沢左保	裸の家	佐藤愛子
笹沢左保	地下水脈	佐藤愛子
笹沢左保	眠れ、わが愛よ	佐藤愛子
笹沢左保	漂流島	佐藤愛子
笹沢左保	野望将軍(上)(下)	佐藤愛子
笹沢左保	崩壊の家	佐藤愛子
佐高信	スーツの下で牙を研げ！	佐藤愛子
さだまさし	長江・夢紀行(上)	佐藤愛子
さだまさし	長江・夢紀行(下)	佐藤愛子
佐藤愛子	鎮魂歌	佐藤愛子
佐藤愛子	赤鼻のキリスト	佐藤愛子
佐藤愛子	天気晴朗なれど	佐藤愛子
佐藤愛子	娘と私の部屋	佐藤愛子
佐藤愛子	女優万里子	佐藤愛子
佐藤愛子	女の学校	佐藤愛子
佐藤愛子	娘と私の時間	佐藤愛子
佐藤愛子	男の学校	佐藤愛子
佐藤愛子	坊主の花かんざし(一)	佐藤愛子
佐藤愛子	坊主の花かんざし(二)	佐藤愛子
佐藤愛子	坊主の花かんざし(三)	佐藤愛子
佐藤愛子	坊主の花かんざし(四)	佐藤愛子
佐藤愛子	愛子の日めくり総まくり	佐藤愛子
佐藤愛子	父母の教え給いし歌	佐藤愛子
佐藤愛子	丸裸のおはなし	佐藤愛子
佐藤愛子	娘と私のアホ旅行	佐藤愛子
佐藤愛子	あなない盛衰記	佐藤愛子
佐藤愛子	幸福の絵	佐藤愛子
佐藤愛子	愛子の獅子奮迅	佐藤愛子
佐藤愛子	女はおんな	佐藤愛子
佐藤愛子	娘と私の天中殺旅行	佐藤愛子
佐藤愛子	男たちの肖像	佐藤愛子
佐藤愛子	男友だちの部屋	佐藤愛子
佐藤愛子	男はたいへん	佐藤愛子
佐藤愛子	花は六十	佐藤愛子
佐藤愛子	古川柳ひとりよがり	佐藤愛子
佐藤愛子	バラの木にバラの花咲く	佐藤愛子
佐藤愛子	幸福という名の武器	佐藤愛子
佐藤愛子	娘と私のただ今のご意見	佐藤愛子
佐藤愛子	ひとりぼっちの鳩ポッポ	佐藤愛子
佐藤愛子	今どきの娘ども	佐藤愛子
佐藤愛子	女の怒り方	佐藤愛子
佐藤愛子	凪の光景(上)(下)	佐藤愛子
佐藤愛子	メッタ斬りの歌	佐藤愛子

佐藤愛子	淑女失格	佐藤正午
佐藤愛子	男と女のしあわせ関係	佐藤正午
佐藤愛子	憤怒のぬかるみ	佐藤正午
佐藤愛子	人生って何なんだ！	佐藤嘉尚
佐藤愛子	死ぬための生き方	佐野洋
佐藤愛子	娘と私と娘のムスメ	佐野洋
佐藤愛子	戦いやまず日は西に	佐野洋
佐藤愛子	結構なファミリー	佐野洋
佐藤英一	医者も人の子 生と死をみつめてジャガーになった男	佐野洋
佐藤賢一	傭兵ピエール(上)(下)	佐野洋
佐藤正午	永遠の½	佐野洋
佐藤正午	王様の結婚	佐野洋
佐藤正午	リボルバー	佐野洋
佐藤正午	私の犬まで愛してほしい	佐野洋
佐藤正午	童貞物語	佐野洋
佐藤正午	夏の情婦	佐野洋
佐藤正午	人参倶楽部	佐野洋
佐藤正午	彼女について知ることのすべて	佐野洋
佐藤嘉尚	ぼくのペンション繁昌記	佐野洋
佐野洋	片翼飛行	佐野洋
佐野洋	未亡記事	佐野洋
佐野洋	秘密パーティ	佐野洋
佐野洋	人面の猿	佐野洋
佐野洋	かわいい目撃者	佐野洋
佐野洋	優雅な悪事	佐野洋
佐野洋	盗まれた影	佐野洋
佐野洋	実験性教育	佐野洋
佐野洋	蹄の殺意	佐野洋
佐野洋	重い札束	佐野洋
佐野洋	旅をする影	佐野洋
佐野洋	貞操試験	佐野洋
佐野洋	再婚旅行	佐野洋
佐野洋	第4の関係	佐野洋
佐野洋	宝石とその殺意	佐野洋
佐野洋	銀色の爪	佐野洋
佐野洋	緊急役員会	佐野洋
佐野洋	夢の破局	佐野洋
佐野洋	おとなの匂い	佐野洋
佐野洋	消えた男	佐野洋
佐野洋	歩きだした人形	佐野洋
佐野洋	白く重い血	佐野洋
佐野洋	鏡の言葉	佐野洋
佐野洋	殺人書簡集	佐野洋
佐野洋	七人の味方	佐野洋子
佐野洋子	私の猫たち許してほしい	澤田ふじ子
澤田ふじ子	蜜柑庄屋・金十郎	澤田ふじ子
澤田ふじ子	修羅の器	

澤野久雄　生きていた
椎名篤子・編　凍りついた瞳が見つめるもの
椎名誠　地球どこでも不思議旅
椎名誠　インドでわしも考えた
椎名誠　全日本食えばわかる図鑑
椎名誠　岳物語
椎名誠　続・岳物語
椎名誠　菜の花物語
椎名誠　シベリア追跡
椎名誠　ハーケンと夏みかん
椎名誠　零下59度の旅
椎名誠　さよなら、海の女たち
椎名誠　白い手
椎名誠　かつをぶしの時代なのだ
椎名誠　パタゴニア
椎名誠　草の海
椎名誠　フィルム旅芸人の記録
椎名誠　喰寝呑泄　くうねるのむだす
椎名誠　地下生活者／遠灘鮫腹海岸
椎名誠　アド・バード
椎名誠　はるさきのへび
椎名誠・編著　蚊學ノ書
椎名誠　馬追い旅日記
ジェームス三木　島崎恭子　芸人女房伝
塩田丸男　上司のホンネ　部下のタテマエ
塩田丸男　女にわかるか！　男のホンネ
塩田丸男　それでもオレは課長になりたい
塩田丸男　こんな女は鼻持ちならん
塩田丸男　男と女のテクニック
塩田丸男　オレが主役、男は勝負
塩田丸男　美女・美食ばなし
塩田丸男　ぼくは五度めし
志賀直哉　清兵衛と瓢箪・小僧の神様　気分はいつも食前酒
重金敦之　四反田五郎　殉愛
篠沢秀夫　教授のオペラグラス
篠田節子　絹の変容
篠田節子　神鳥　イビス　愛逢い月
篠山紀信　シルクロード①
篠山紀信　シルクロード②
篠山紀信　シルクロード③
司馬遼太郎　歴史と小説
司馬遼太郎　手掘り日本史
司馬遼太郎編　長城とシルクロードと
芝木好子　面影
芝木好子　巴里の門

集英社文庫　目録（日本文学）

芝木好子　女の橋
芝木好子　幻華
芝木好子　青磁砧
芝木好子　女の肖像
芝木好子　女の庭
芝木好子　冬の椿
芝木好子　黄色い皇帝
芝木好子　夜の鶴
芝木好子　花霞
芝木好子　慕情の旅
芝木好子　海の匂い
芝木好子　別れの曲
芝木好子　落葉の季節
芝木好子　流れる日
芝木好子　女ひとり
芝木好子　洲崎パラダイス
柴田錬三郎　英雄・生きるべきか死すべきか（上・中・下）
柴田錬三郎　度胸時代
柴田錬三郎　生死の門
柴田錬三郎　大将
柴田錬三郎　図々しい奴
柴田錬三郎　地獄の館
柴田錬三郎　曲者時代
柴田錬三郎　乱世流転記
柴田錬三郎　貧乏同心御用帳
柴田錬三郎　江戸っ子侍（上）（下）
柴田錬三郎　遊太郎巷談
柴田錬三郎　生きざま
柴田錬三郎　おらんだ左近
柴田錬三郎　うろつき夜太（上）（下）
柴田錬三郎　毒婦伝奇
柴田錬三郎　日本男子物語
柴田錬三郎　若くて、悪くて、凄いこいつら（一）（二）（三）
柴田錬三郎　われら旗本愚連隊（上）（下）
柴田錬三郎　忍者からす　南国群狼伝／私説大岡政談
柴田錬三郎　清河八郎
柴田錬三郎　チャンスは三度ある（上）（下）
柴田錬三郎　幽霊紳士
柴田錬三郎　夜叉街道
柴田錬三郎　牢獄
柴田錬三郎　生命ぎりぎり物語
柴田錬三郎　源氏九郎颯爽記　次信剣・水煙剣の巻
柴田錬三郎　源氏九郎颯爽記　秘剣揚羽蝶の巻
柴田錬三郎　地べたから物申す
柴田錬三郎　柴錬忠臣蔵　復讐四十七士（上）（下）
柴田錬三郎　デカダン作家行状記

集英社文庫

会津士魂 十一 北越戦争

1999年5月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 早乙女 貢

編集 株式会社 創美社

発行者 小島民雄

発行所 株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
〒101-8050
(3230) 6095 (編集)
電話 東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷 図書印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

© M.Saotome 1999

Printed in Japan

ISBN4-08-748826-8 C0193